ISBN 978-4-902325-90-4

地球研言語記述論集５

大西正幸・稲垣和也・伊藤雄馬（編）

言語記述研究会

総合地球環境学研究所
「アジア・太平洋における生物文化多様性の探究」プロジェクト

2013 年 3 月

地球研言語記述論集 5

目 次

序文 ..... 大西 正幸 i

カムチベット語 sDerong-nJol（得榮徳欽）方言群の諸方言における
弱強型の韻律特徴と分節音に見えるその反映形 ..... 鈴木 博之 1

ɣ —チベット・ビルマ系諸言語における “唇歯母音”— ..... 鈴木 博之 17

ビルマ語の受動構文 ..... 倉部 慶太 27

南スーダンのことば遊び —「ルドリング」の類型論への視点— . 仲尾 周一郎 73

「地球研言語記述論集」第 5 号
序文

大西 正幸

この 3 月で、言語記述研究会が開始してから 6 年が経過し、地球研記述言語論集は 5 号目となった。地球研では、昨年の 3 月に長田さんがリーダーだったインダスプロジェクトが終わり、メンバーは四散した。4 月から私の生物文化多様性プロジェクトが始まったので、記述研は私のプロジェクトが引き継ぐ形となったが、まだ予備研究の段階なので、地球研で定期的に研究会を開くこともままならない。そういうわけで、今年 1 年は研究会もやや低調であった。

今回の論集は、鈴木博之さんが 2 本と、倉部慶太さんと仲尾周一郎さんが各 1 本ずつの、計 4 本の論文からなっている。本数は少ないが、いずれも力のこもった論文である。例年通り、これらの論文は、研究会で議論され、その後 2 人ずつのメンバーによる査読が入ったあと、今の形に書き上げられている。

今回は、本数も少ないので、個々の論文の紹介だけでなく、私の感想も簡単に付け加えることにしたい。

鈴木博之さんの最初の論文、「カムチベット語 sDerong-nJol（得榮徳欽）方言群の諸方言における弱強型の韻律特徴と分節音に見えるその反映形」は、中国の四川省・雲南省に分布するカムチベット語の諸方言に見られる、二音節複合語の音節初頭における有気音の無声化と、初頭音節における母音 a の弱化という 2 つの音声・音韻現象を、「弱強型の韻律特徴」という概念によって統一的に説明しようとする試みである。統一的説明というのは、つまり、これら 2 つの現象のあるなしや、その濃淡、文法化の程度などが、各方言にどう現れているかということの緻密な記述と、それらの方言の地理的分布や複合語形成の歴史的過程などを合わせて検討し、こうしたことすべてを整合的に説明するのにもっとも合理的な仮説を提供する、という意味である。また、この検討の過程で、「弱強型」、「強弱型」、「指定不要」の 3 つの韻律タイプの方言があるという風に、仮説を広げている。

ところで、この論文のキーワードとなっている「弱強型の韻律」だが、これは音韻現象ではないため、音声的に義務的に第 2 音節に強勢が置かれるわけではない、と言う。（これとは逆に、「強弱型の韻律」をもつ方言の場合は第 1 音節に強勢が現れることが多いが、このばあいも義務的ではないと言う。）すると、循環論法に陥らないためには、本論で検討されている音声・音韻現象とは独立に、自然発話の中でこの韻律特徴がどのようなかたちで現れるかについての具体的な記述が当然必要になってくる。また、この現象が通言語的にどの程度一般化できるかについても説明があるとうれしい。今後の検討課題としてほしい。

2 番目の論文、「チベット・ビルマ系諸言語における“唇歯母音”」は、いくつかのチベット・ビルマ諸語に見られる、音節核を形成する唇歯摩擦音 [ɣ̩] の、調音的な特徴の詳細な観察に基づき、その区別を正確に記述する新たな音標表記の提案である。鈴木さんによれば、調音上の区別として重要なのは、調音器官の接近性ないし摩擦性、円唇性の有無、そして調音時における舌の位置、の 3 点である。そして、特に最後の点について、その区別を行うことに言語学的に意味があることの例として、この区別が雲南省北西部の諸言語の歴史的関係に新たな知見を加える可能性があることを指摘している。緻密な論に思えたが、私は、ここでも、唇歯母音、あるいはもっと広げて子音的特徴をもつ母音の音声特徴などが、通言語的にどの程度一般化して記述できるのだろうかと考えざるをえなかった。これもぜひ、今後の検討課題としていただきたい。

倉部慶太さんの論文、「ビルマ語の受動構文」は、彼の卒業論文を改訂したもので、名詞化接頭辞 ʔă- をとる動詞と述語動詞 khàɴ 「受ける、耐える」の組み合わせによる、ビルマ語の受動構文の 1 タイプを、形態論、統語論、意味論、談話の観点から詳細に分析したものである。論文は、まずこの構文の全体と、各構成要素の、形態統語的な特徴の記述から入る。次に、受動構文が「被害」の意味を表す場合と「利益・恩恵」の意味を表す場合とを、名詞化される動詞の意味タイプとの組み合わせによって分析している。これに続いて、ʔă-V 名詞が名詞化接頭辞 ʔă- の脱落を許す音韻、統語、意味条件を整理しながら、受動構文のヴァリエーションを論じる、この論文の中でも最も詳細なセクションが続く。そして、最後に、この受動構文の意味的・統語的特徴を整理したあと、Shibatani や Dixon の類型論的な議論の中で受動構文を典型的に特徴づけるとされる 3 つの談話機能についても検証し、そのどれもがこの受動構文にあてはまらないことが指摘されている。

倉部さんのデータの豊かさと分析の網羅的なことはいつも通りで、この論文の記述的な価値を高いものとしている。私は、4 の、動詞の意味分類と受動構文全体が表す意味の記述に、特に関心を持った。受動構文が表す意味を「被害」と「利益・恩恵」という観点から捉えると、意味的に中立的な動詞との組み合わせの場合に「被害」の意味を表すことから、構文のデフォールトの意味は「被害」である、との倉部さんの分析が最初にある。だが、動詞の分類を見ると、動詞自体の意味にすでに、対象に「被害」や「利益・恩恵」を及ぼすことが含意されていると思われるものが多数あり、その場合、その意味が構文にあるのか、それとももとの動詞にあるのかは、簡単には決められない。こうした点を緻密に検討すれば、動詞分類も構文の意味分析も違ったものになる可能性がある、という印象を私は持った。また、今後の課題として、ビルマ語における他のタイプの受動構文にまで、ぜひ分析を広げていただきたいと思っている。

仲尾周一郎さんの「南スーダンのことば遊び　―　「ルドリング」の類型論への視点　―」は、南スーダンで話されるクレオール、ジュバ・アラビア語の、10 代の話者の間に見られるルドリング（言葉遊び）の分析である。論文は、まず、この言語の、異なったプロソディーをもつ 2 つの語彙タイプの緻密な音韻分析から入り、その分析結果をもとに、ルドリングの音韻構造に関する世界の類型論的な研究の詳細なレビューを行っている。後半では、ジュバ・アラビア語のルドリングに、スーダン・アラビア語話者の影響による脱クレオール化から生じたジュバ・アラビア語の中層話体や、アラビア半島の他の言語のルドリングの影響があることを例証し、このような研究がもちうる社会言語学的・歴史言語学的な射程を示している。また、これらの言語の、ルドリングに近接した秘密語などの現象も含む、より総合的な研究の可能性に言及している。

この論文は、仲尾さんがクレオール語を研究対象として選んだ利点がよく出ていて、私には非常に面白かった。前半部の、2 つの語彙タイプのプロソディーとルドリング化規則との絡み合いの分析もそうであるが、特に後半部で触れたテーマは独創的で、大きく発展する可能性を秘めている。今後の研究の展開が楽しみである。

以上、今年号掲載の論文について述べた。

次号では、より多くのメンバーが意欲的な論文を書いてくれることを期待したい。

最後に、この 1 年間を通して、研究会の手配や論文の編集について尽力してくれた、稲垣和也さんと伊藤雄馬さんに、感謝の意を表します。

2013 年 3 月

大西正幸

カムチベット語 sDerong-nJol（得榮徳欽）方言群の諸方言における弱強型の韻律特徴と分節音に見えるその反映形

鈴木 博之

キーワード：カムチベット語、sDerong-nJol 方言群、弱強型韻律、強弱型韻律

[要旨] 本稿では、中国四川省得榮県から雲南省徳欽県にかけて話されるカムチベット語諸方言（sDerong-nJol 方言群）において観察される 2 音節語の第 1 音節に含まれる分節音がさまざまな形で弱化する現象について、具体例を整理しつつその現象に対して弱強型の韻律構造を仮定することによって説明を試みる。また、これに対して、近接地域には強弱型の韻律構造をもつ方言も分布しており、類型の違いがあることを示す。

1　はじめに

筆者はかつて鈴木 (2011b) において、カムチベット語 sDerong-nJol（得榮徳欽）方言群[1] の諸方言における 2 音節語の初頭位置における有気音の無気化現象を報告した。この現象はチベット言語学上の類型にとって稀有なものであり、その具体的な言語現象を具体例とともにまとめることに一定の価値が見いだせるものであったが、このような音声現象に対する言語学的解釈は当時与えることができなかった。本稿では、この現象を含め、複数の際立つ分節音に認められる現象について、「弱強型」の韻律特徴の枠組みを導入することで統一的に説明を与えることを試みる。また、当該地域のカムチベット語諸方言に「強弱型」という異なる韻律特徴をもつ方言も共存していることにも触れ、類型の違いがあることを示す。

チベット系諸言語に関する先行研究において韻律が議論されることはほとんどない。韻律が音韻論的な機能を担わないことが背景にあると考えられる。ところでチベット系諸言語のうち、いくつかの言語群には超分節音素が存在し、基本的に語を単位として弁別機能をもっている。この超分節音素の発生という歴史的観点からの議論において、古い段階で強勢の有無の存在を認めるという議論が起こり、強勢の位置に基づいて超分節音のパターンが決まるという仮説が提出された（Caplow 2009）。ところが、強勢はピッチ型超分節音素（声調）をもたないアムドチベット語のような言語では音声学的により明確に現れることがあるが、声調をもっているカムチベット語などの言語ではあまり明瞭でなく、その代わりに軽声を認める分析が通例である。

[1] sDerong-nJol 方言群は中国四川省甘孜藏族自治州得榮県から雲南省迪慶藏族自治州徳欽県にかけて分布するカムチベット語の 1 方言群である。下位区分として、sDerong 下位方言群、雲嶺山脈西部下位方言群、sPomtserag（奔子欄）下位方言群、mBalhag（巴拉）下位方言群と gYagrwa（羊拉）下位方言群に分かれる。カムチベット語をめぐる方言区分については鈴木 (2009b)、Suzuki (2009a:17) を参照。雲南省のカムチベット語についての最新の見解は鈴木 (2012d) を参照。

本稿で議論するカムチベット語諸方言では、強勢が音声学的な卓立を伴って現れることはないため、強勢が音体系上機能していると言うことができない[2]。超分節音的音特徴にはおよそ明瞭な強勢の特徴が認められず、逆にチベット言語学上奇妙な現象が分節音に起きている。この現象を説明するために、「強さを伴わない架空の強勢パターン」（これを韻律特徴と呼ぶ）を設けて議論してみる。

2　韻律特徴とその要点

本稿でいう韻律特徴とは各方言における音韻単位ではなく、実際に生じている音声現象を効果的に説明する仮説的なものである。韻律特徴の現れを要約すれば、次のようになる。

- カムチベット語得榮徳欽方言群の諸方言は、基本的に「弱強型」の韻律特徴をもつ。
- 「弱強型」の韻律特徴は、第１音節の分節音に何らかの変化が生じる。
- ただし、例外的に「強弱型」の韻律特徴をもつ方言を認める。
- 「強弱型」の韻律特徴は、第１音節に強勢が実際に置かれることで実現することが多い。

韻律特徴は、その性格上、複音節語（音韻語）の初頭２音節（声調が機能する単位）に対してのみ適用される。また、韻律特徴というのは音韻単位ではないため、音声実現として特定の現象が義務的に実現されるという性格のものではなく、自然な発話において特に認められるものと考えて差し支えない。むしろ意図的に発話速度を遅くした場合[3]には以上の韻律特徴が失われることがあるため、特定の自然な発話速度があって初めて実現するものである。

弱強型の韻律特徴の場合、その作用は分節音に生じ、語構成における各形態素が（音韻）語の中で果たす役割（たとえば語幹、接辞など）にかかわらず適用される。それゆえ、第１音節の弱化が意味とかかわりなく自動的に起こる一方、実際の発話において適用されるか否かは容認度に何ら影響を与えない。ただし、方言によっては語彙的に現象が固定されており、自由変異とはみなせない場合がある。また、有気無気の双方を許容できるが、有気音での発音に対して「自らの方言らしくない」といった印象を抱く母語話者も存在する。

加えて特定の語では、それぞれの韻律特徴が想定されうるより古い段階の形式に作用し、そののち音変化が生じたため、現代の形式を解釈するにあたって特別な説明を与える必要性が存在する事例もある。このことから、韻律特徴というものは最近になって生じたものではなく、ある程度古い時期から存在した、もしくは各方言の成立時期にすでに潜在的に存在していたものではないかと考えられるが、現段階では詳細に述べることができない。

---

[2] おそらくピッチ型超分節音素をもつほとんどのチベット系諸言語において、強勢は超分節音的音声実現をもたないと見込まれる。そのため、音声記述において強勢という用語で説明する現象は存在せず、理論的な音韻解釈のために用いるものとして理解しておく必要がある。本稿では、「強勢」という用語を、明瞭な超分節音的音特徴を伴う現象が認められるときのみ用い、それ以外を音体系の外に位置する「韻律」という枠組みと用語で表す。

[3] たとえば語彙調査時に各音節を人工的に区切って発音するときなどが該当する。

3　「弱強型」韻律特徴の具体的な事例と分析

本節では「２音節語の初頭位置における有気音の無気化現象」および「２音節語の初頭位置における母音/a/の弱化現象」という２つの独立した現象[4]を、「弱強型」の韻律特徴を仮定することを通して共通の説明を与える。

議論に先立ち、本稿で扱う「弱強型」韻律特徴が仮定される諸方言の下位区分と分布地域をまとめておく。この韻律特徴は sDerong-nJol 方言群のうち、mBalhag（巴拉）方言と gYagrwa（羊拉）方言を除いて認められる。すなわち、sDerong 下位方言群、雲嶺山脈西部下位方言群、sPomtserag（奔子欄）下位方言群に適用できる。これらの下位方言群に属する諸方言は、四川省得榮県から雲南省徳欽県にかけて分布し、金沙江および瀾滄江沿岸部に広く分布する。これらの周辺に分布する Sems-kyi-nyila（香格里拉）方言群や Chaphreng 方言群（郷城）には、「弱強型」韻律特徴が適用される例が見受けられない（分布については、末尾の地図１、２を参照）。

以下、音声表記には正書法的な表記を用いず常に音標文字を用い、IPA のほか朱曉農 (2010) に定義される音標文字と鈴木 (2005) で用いられている表記法も断りなく用いる。

3.1　２音節語の初頭位置における有気音の無気化現象

この現象は鈴木 (2011b) で具体例を整理した。ただし最近の調査によって、若干更新するべき情報が見つかったので、まず最初にそれを補足しておく。鈴木 (2011b) では、この現象は特に金沙江流域で話される諸方言に認められると述べたが、徳欽県升平鎮阿東村で話される Adong（阿東）方言および同県佛山郷で話される Foshan（佛山）方言にも同様の現象が認められることが分かった。これらは金沙江沿岸ではなく、むしろ瀾滄江に近い地域で話される。本稿では Adong 方言の例について、後に言及する。

さて、具体的な現象の検討に入る。２音節語の初頭位置における有気音の無気化現象というのは、チベット文語形式（以下「蔵文」）を見れば理解できるけれども、もしも条件にあう２つの１音節語からなる複合語の場合、共時的に現象を説明することも可能である。sDerong 下位方言群に属する Zulung（日龍）方言の例で考えると、次のようになる。

/˜tɕʰɯ/「水」　＋　/ˋɲiʔ/「目」　＝　/ˊtɕɯ ɲiʔ/「泉」

˜tɕʰɯ という形式は、単独で「水」を表す語である。このとき、この語の初頭子音は有気音であり、また有気音でなければならない。この語がˋɲiʔ「目」という語と複合語を形成するとき、ˊtɕɯ ɲiʔ となって「泉」という語義で用いられる。複合語を形成したとき、上に示したように、有気の性質が認められなくなる。もしも「水」が第２音節に現れるような複合語を形成したとき、このような無気化は認められない。ちょうど「水」「目」の順序を逆にした形式が存在し、˜ɲiː tɕʰɯ「涙」という語になるが、第２音節初頭の有気音は有気音でなければならない。なお、

[4] 現段階の調査では、これら２種の現象が１つの方言内で共起する例をほとんど見いだせていない。ただし、以下にも言及するように、共起する方言も存在する。

いずれの２音節語の場合も第２音節に強勢が音声学的に強さを伴って現れることはない。また、３音節以上からなる場合にもこの現象が現れることがあるが、３音節以降は軽声であるため無視できる。

Zulung 方言の場合、以上と並行する状況において、語頭音節が無気音になるものと有気音のまま維持されるものの２種の例が共存し、どちらになるかはほとんど語ごとに決まっており、一定の発話速度においては互いに自由変異ではないことが多い。ただし、たとえば上記「泉」の各音節を調査時のように特にゆっくりと発音してもらうような場合には、第１音節の初頭子音が無気化することはない。以下に、Zulung 方言の調査語彙約 2000 語の中から複音節語で第１音節初頭子音が無気化する例を掲げる。

語義	Zulung 方言	蔵文
氷	´tɕa ɖõ	*chab rom*
泉	´tɕɯ ɲiʔ	*chu mig*
温泉	´tsaː tɕʰɯ	*tsha chu*
唇	⁻ⁿ̥̊tɕɯ rɯ	*mchu ru*
脇	⁻ⁿ̥̊tɕẽ kʰõ	*mchan khang*
親指	´ⁿ̥̊tə tɕʰẽ	*mthe chen*
犬歯	⁻ⁿ̥̊tɕi wa	*mchi ba*
友人	`pu ɕɑʔ	*pho shar*
孫息子	´tsa wu	*tsha bo*
孫娘	´tsa ɦõ	*tsha mo*
子ぶた	´pə ɦu	*phag gu?*
桃	´ka mõ	*kham bu*
粥	´toː ba	*thug pa*
階上	ˆkõ tʰuʔ	*khang thog*
階下	ˆkõ ʑoʔ	*khang zhod*
ふた	´kaləʔ	*kha leb*
縄	´tɑː pa	*thag pa*
経堂	⁻tɕuː kʰõ	*chos khang*
経院	⁻tɕuː ʱde	*chos sde*
白塔	⁻ⁿ̥̊tɕuː ɖĩ	*mchod rten*
区別	⁻tɕeː pa	*khyad par*
昨日	´ka tsõ	*kha rtsang*
大きい	ˆtɕa wu	*che bo*
別々の	´ka kʰa	*kha kha*

以上の例を見れば、無気化する語は多くが名詞であることがいえる[5]。また、以上の語の構成に注目すると、第２音節に蔵文で *pa, ba, bu, bo, mo* などの形式が来る例が複数ある。これらは語幹の一部ではなく接尾辞である。しかも蔵文形式で第１音節が開音節で接尾辞が b で始まっている「犬歯」「孫息子」「大きい」の例の場合、接尾辞の初頭子音が/w/になっているのは、接尾辞に弱化の規則（*p/*b > /w/）が働いていることを示している。もしも有気音の無気化を理論的に説明するために強勢を認めるとするならば、接尾辞に強勢を置くというのは類型的に見て稀な事例であり言語事実として特定の強さとして実際に接尾辞を強く発音するという現象も認められない。この場合に弱強型の韻律特徴を仮定して現象を理解することができると考える。ただし、Zulung 方言の場合には、有気音の無気化が認められない例も少なからず存在する。たとえば、以下のようである。

語義	Zulung 方言	蔵文
貯水池	´tɕʰu ⁿdzɵʔ	*chu mdzod*
つば	´kʰa tɕʰɯ	*kha chu*
商人	ˉtsʰõ ᵐba	*tshong pa*
母ぶた	ˉpʰɑː mã	*phag ma*

これらのような例には弱強型の韻律特徴が反映しなかったのかという疑問が残る。当然ながら、１つの言語に複数の韻律特徴が認められてもよいわけであるが、適用条件は現段階では不明である。

さて、Zulung 方言の有気音の無気化には、もう１つのタイプがある。次のような例である。

語義	Zulung 方言	蔵文
雨	´tɕɑː	*char ba*
雪	´kɑː	*kha ba*

これらの例は、蔵文が示すように、そもそもは２音節語であったものと理解できる。有気音の無気化は単音節語では起こりえない[6]ため、無気化したのちに２音節が縮約を起こしたものと考えるのが妥当である[7]。２音節の縮約は他の語でも周辺の諸方言にも見られるため特筆に値する現象ではないが、これもまた一定の条件にしたがって規則的に現れるものではなく、語

[5] 「子ぶた」の例について、蔵文の語形式としての *phag gu* は存在しない。しかし Zulung 方言の形式や周辺の方言形式も対照すると、指小辞 *gu* のついた *phag gu* のような形式が推定されうる。sDerong 下位方言群に属する sDerong 方言には、ここで取り上げている有気音の無気化現象はほとんど見られないが、「子ぶた」は´puːという形式で現れる。

[6] ただし注意の必要な語がある。それは「犬」で、蔵文では *khyi* と有気音であるが、Zulung 方言では/ˉtsə/というように無気音で現れる。これは古蔵文の *kyi* と対応するものと考えられ、本稿で取り上げている現象とは関連がない。無気音の「犬」の問題については、西 (1986:850) も参照。

[7] 以降に述べる Adong 方言において、さらに興味深い例が認められる。

彙的に決まっている[8]。加えて、縮約した語の声調パターンは上昇調が大部分を占め、少数例に高平調が認められる。下降を伴う例がほとんど見られない点に注目できる[9]。

次に雲嶺山脈西部下位方言群に属する Adong 方言の例について、簡単に触れておく。Adong 方言は現在調査途中であるため、多くの実例の収集には至っていないが、次のような例が認められる。

語義	Adong 方言	蔵文
泉	ˆtɕɤ ʱnʑiʔ	*chu mig*
温泉	´tsa tɕʰɤ	*tsha chu*
唇	´ᵐ̥tɕu pa	*mchu pa*
腎臓	´ᵑ̥kɛː la	*mkhal ma*
ぶたの糞	ˆpɑʔ ʰtɕɑʔ	*phag skyag*
犬の糞	ˆtɕə ʰtɕɑʔ	*khyi skyag*
鳩	´pɔʔ ʱɖɯ̃	*phug ron*
桃	´kɑ̃ ᵐbɤ	*kham bu*
もみ殻	´pɤ wɑ̃ʔ	*phu mag*
上半身	ˆkõ ʰtɯʔ	*khog stod*
下半身	ˆkõ m̥eʔ	*khog smad*
昨日	´ka tsɔ̃	*kha rtsang*
おととい	ˆkɛː ŋeː	*khas nyin*
さきおととい	´kɛː ʱʐa ŋeː	*kha gzhes nyin ka*
雪	´kɑː / ´ka wa	*kha ba*
雨	´tɕɑː	*char ba*
とげ	´tsõː	*tsher ma*

Adong 方言の例を見ると、Zulung 方言と語義と形式の面で共通するものが多いと言える。以上のうち、「ぶたの糞」「上半身」「下半身」の例は語頭子音が有気音になっても許容されるが、それら以外は無気音である必要がある[10]。なお、「雪」の例は、１音節形式と２音節形式の２つが併存する。この例は２音節語が縮約して１音節になる過程を反映しているものと理解できる。

次に sPomtserag 下位方言群に属する Shogsum（書松）方言の例を見る[11]。

[8] 方言ごとに現れる語が異なる点については、鈴木 (印刷中) を参照。

[9] これを韻律特徴とからめて分析することも可能であるかもしれないが、議論は別稿にゆずる。

[10] 「犬の糞」の例について補足しておくと、Adong 方言では「犬」は/ˋtɕʰə/のように初頭子音が有気音となり、調音位置も前部硬口蓋になる。Zulung 方言では無気音で実現されるため、第１音節の有気音の無気化には当てはまらないが、Adong 方言の場合は当てはまる。

[11] Shogsum 方言および sGogrong 方言の「子ぶた」の形式は、注５で述べたように、Zulung 方言と並んで蔵文と確実に対応しているとは言えない。詳細は Suzuki (2009b:80-81, 2012) を参照。

語義	Shogsum 方言	蔵文
雨	´ce wa	*char ba*
土手	´cɑ rɑʔ	*chu rag*
唇	´cɯ pa	*mchu pa*
肝臓	¯ci mba	*mchin pa*
つば	´ce mõ	*chu ma*
甥	´tsa wu	*tsha bo*
子ぶた	´piː ɖwe	*phag phrug?*
鴨	¯cɯ ʐa	*chu bya*
鳩	´pu ɖwĩ	*phug ron*
桃	´kɑ̃ mo	*kham bu*
屋根	´ko ʰti	*khang steng*
傘	´ca ʱdɔʔ	*chu gdugs*
縄	´te jiʔ	*thag pa*
昨日	´ka tsɔ̃	*kha rtsang*
おととい	´kɛ ȵi me	*khas nyin*
あなたたち	´tɕi ȵa ji ʈa	*khyod tsho*
大きい	´cɤ ɦu	*che bo*
雪	´kɑː	*kha ba*

また、同下位方言群 sGogrong（古龍）方言にも以下のようなものが認められる。

語義	sGogrong 方言	蔵文
雨	´ce wa	*char ba*
溝	´ca ʰka	*chu rka*
唇	´cɯ pa	*mchu pa*
甥	´tsa wo	*tsha bo*
子ぶた	´pe ɖɤː	*phag phrug?*
大きい	´cə wo / ´cʰə wo	*che bo*
雪	´kɑː	*kha ba*

sPomtserag 下位方言における諸方言においても有気音の無気化現象は一致する例が少なく、認められる例の数も異なる。しかしながら、第２音節の形態論的特徴は Zulung 方言と同じくさまざまであり、単純に複音節という環境で有気音の無気化が生じているといえる。

3.2　２音節語の初頭位置における母音/a/の弱化現象

鈴木 (2012a:126) における雲嶺山脈西部下位方言群に属する Sakar（斯嘎）方言の記述の中で、筆者は/a/の音声実現に次のような記述を与えた。

「**/a/**　複音節語において、最後以外の音節に現れる場合は [ɜ] 程度で発音される。」

この記述に、さらに次のような注を施した。

「例によってはさらに舌位置が高くなり、[ə] で実現されることも珍しくない。このような場合には/ə/と記述する。」

加えて、名詞化接辞の記述（鈴木 2012a:134）においても、次のように述べた。

「名詞化接辞が接続するにあたり、先行する語が１音節語の場合、/a/で終わる語は/ə/になったり（略）」

これは名詞化接辞が付加される場合だけとは限らず、条件に合う２音節の形式ならば、すべての例について起こりうる現象である。ただし、母音の質に変化が及ぶだけで、声調に明確な変化はなく、観察の限りでは非音韻的要素である強勢にも影響が見られない。それゆえ、この現象は音韻規則ではないと言い切ったし、その考えについて変わるところはない。この現象は/a/以外の母音では起こらないのも注目に値する。

以下に Sakar 方言における蔵文で第１音節が*-a#*で終わる形式の音対応について、音声形式の具体例をあげる[12]。

	語義	蔵文	Sakar 方言音声表記
(1)	斯嘎 [地名]	*sa dkar*	[ˉsʰɜ kaː, ˉsʰə kaː]
(2)	漢語	*rgya skad*	[ˆʱdʑa ʰtɕiʔ, ˆʱdʑɜ ʰtɕiʔ]
(3)	食べ物	*za-mi**	[´sɜ mə, ´sə mə]
(4)	食べなかった	*ma-za*	[´mə za]

上の (1, 2) は複合語の例、(3) は動詞語幹に名詞化接尾辞がついた例、(4) は動詞語幹に否定接頭辞がついた例[13]である。以上の例は形態論的にさまざまな語構成を示しており、いずれの場合でも第１音節の母音は/a/と分析しうるけれども、[ɜ] または [ə] で発音され、[a] で発音されない。特に (1, 3, 4) は [a] の発音が許容されない。

この現象は、Sakar 方言のみならず、雲嶺山脈西部下位方言群に属する方言の中で、前節で述べた有気音の無気化現象をもたない方言に広く認められ、これらの方言でも/a/以外に母音が変

[12] いくつかの口語形式は、完全に蔵文と対応するものをもたない。そのような例には、仮定される蔵文形式をあげ、*を付す。また、音声形式においても声調だけは分析済みの形式で記す。

[13] 蔵文の否定辞には *ma* のほかに *mi* もある。後者は通常の蔵文対応形式として/mə/という発音が期待されるが、Sakar 方言をはじめ、雲南省で話されるほとんどのカムチベット語方言は/ɲi/という形式になることから、*ma* が [mə] と発音されても混同されるおそれはない。

化することはないという観察結果を得ている[14]。ところが、前節で取り上げた Adong 方言は例外的で、第 1 音節の有気音の無気化現象に加えて/a/の音声学的な弱化もまた認められる。ただし、Sakar 方言などと異なり、音環境の条件を満たすすべての例に自動的に生じるものではなく、複合語を形成するときに限られ、また弱化した場合の音声実現も [ɜ] 程度にとどまる。

以上のような現象はチベット語全体を見てもまれな現象であるといえる。これについて、筆者は「弱強型」の韻律特徴が存在することによって起こっているのではないかと考える。

4　「強弱型」韻律特徴について

本節では、「弱強型」ではなく「強弱型」の韻律特徴をもつタイプの方言について mBalhag 方言を例に検討し、また韻律特徴の型の分布について短い考察を加える。

4.1　現象

このタイプをもつ方言には、mBalhag 方言があげられる。すでに鈴木 (2012d:60) において、次のような記述を与えた。

> 「複音節語について語単独での発音では、第 1 音節に聴覚印象として明瞭な強勢が置かれる例が存在する。強勢が置かれた場合、その直後すなわち第 2 音節以降の声調が低平調で実現される。また、第 2 音節以降に強勢が置かれる例は認められない。しかしながら、強勢の実現は現段階の資料において対立が認められず、かつ自由変異であり、現れても現れなくても許容されるため、一律表記しない。」

「弱強型」と違って、「強弱型」の場合は明瞭な強勢が置かれる点で大きな差異が認められる。一方、強勢が音韻的に機能していない点を考慮すれば、この事例も韻律特徴という枠組みにおいて現れる非音韻的要素と理解するのが妥当であると考える。

mBalhag 方言の場合、調査資料に基づくと、「強弱型」になるのは第 1 音節が接辞でないことが条件であろうと考えられる。つまり、各種接頭辞を伴う動詞に「強弱型」は現れない。たとえば、次のような例は「強弱型」の韻律特徴をもっている。

	語義	蔵文	mBalhag 方言
(5)	泥棒	*rku ma*	ˋʰkɯ mə
(6)	低い	*dma' mo*	ˋʱmɔ ma
(7)	草	*rtswa*	ˋʰtsə wa
(8)	唐辛子	*si pen*	ˋbə gu

(5, 6) の第 2 音節は接尾辞の一種と考えられるから、語幹部に強勢が置かれるのは自然といえる。(7) の場合、第 2 音節は蔵文に含まれる足字 w の対応形式であると見られ、語幹の一部で

[14] 同下位方言群に属する lCagspel（佳碧）方言では、より複雑な事例も見受けられる。この方言名は蔵文で *lcags spel* となり、老年層では/ˋʰtɕɑʔ ʰpeː/と発音されるが、若年層ではより漢字音に近い/ˋʰtɕa ʰpjeː/となる。後者の場合、第 1 音節が/a/で終わるため、音声実現としては [ˋʰtɕə ʰpjeː] となることもある。

あると考えられる[15]。(8) の形式は蔵文と対応しない方言形式[16]であり、語幹と接尾辞の関係であるかはわからない。いずれにせよ語幹でないものが第１音節に来ている形式には「強弱型」はあまり現れないのであるが、語構成が「語幹＋接尾辞」のものすべてが「強弱型」を取るとは限らないため、規則性があるとはいえない。

4.2　分布

mBalhag 方言のように、強勢が明確に強さとして現れるタイプの方言は少ない。ただし、第２音節の分節音に弱化の特徴が認められるような方言は確かに存在し、そのような方言を「強弱型」の韻律特徴をもっているものと分析するならば、さらに複数の方言が「強弱型」の韻律特徴をもつ例としてあげることが可能であるほか、「強弱型」の韻律特徴のほうが広範囲のチベット語諸方言に認められる特徴であるといえる[17]。

雲南省のカムチベット語において２音節語の第２音節の初頭子音が弱化する現象について、数詞「１」(*gcig*)、「２」(*gnyis*) と「11」(*bcu gcig*)、「12」(*bcu gnyis*) の関係を地理言語学的観点から取り扱った鈴木 (2012c) は、当該箇所で弱化が生じる方言が主に香格里拉県に分布していることを明らかにした[18]。方言分類の観点から見ると、Sems-kyi-nyila 方言群 rGyalthang 下位方言群と雲嶺山脈東部下位方言群のうち主に金沙江東岸に分布する諸方言、さらに Chaphreng 方言群のすべての諸方言[19]に認められる。一方、「弱強型」韻律特徴を仮定した sDerong-nJol 方言群には、この現象は認められていない。また、Sems-kyi-nyila 方言群の中でも、雲嶺山脈東部下位方言群のうち主に金沙江西岸に分布する諸方言（維西県塔城鎮で話されるものを除く）や Melung 下位方言群、Lamdo 下位方言群に属する諸方言にも「強弱型」を仮定する必要はないようである[20]。

---

[15] 雲南省で話されるほとんどのカムチベット語において、蔵文足字 w に対応する形で/w/が口語形式に現れる。それが蔵文のように語幹部分のわたり音位置に現れるものと、mBalhag 方言のように２音節になって現れるものと、２通りに分かれる。具体的な記述については、鈴木 (2008, 2009a, 2012b) を参照。

[16] mBalhag 方言の「唐辛子」の形式は、雲南のカムチベット語に広く認められる (Suzuki 2009b:85)。

[17] たとえば複音節語の名詞について考えるとき、ユー・ツァン地域のチベット語諸方言やカムチベット語 Derge（徳格）方言などにも、第２音節の初頭子音について弱化とみなされる音変化が起こっている（格桑居冕・格桑央京 (2002:24-25, 99-102)、星 (2003:xii-xiii) など）。

[18] 弱化の具体的事例としては、「１」の初頭子音は前気音つきの無声無気破擦音（調音位置は個別に異なる）である一方、「11」の第２音節に現れる形態素「１」の初頭子音は有声破擦音になるものや有声摩擦音で現れるという形になる。このような音交替は弱化と判断できる。

[19] 香格里拉県内に分布する gTorwarong 下位方言群の諸方言に加え、四川省側の郷城県で用いられる方言も含む。なお、鈴木 (2007:23) で扱っている郷城県のカムチベット語諸方言において、「32」などのきりの悪い数詞が、蔵文では *sum cu so gnyis* と４音節から形成されるのに対して、第２音節の対応形式が脱落する現象があるが、これは強弱型の韻律特徴によるものであるかもしれない。この点についての詳細な検討は別稿にゆずる。

[20] Melung 下位方言群に属する Zhollam（勺洛）方言では、語によっては複音節語の各音節に声調の型が指定されるものがあり（鈴木 2011a:5）、音節ごとの独立性が高い例も見受けられる。これはカムチベット語の中でも類似の特徴をもつ方言をあげるのが困難であるため、珍しい類型に入るといえる。

以上、本稿で「弱強型」「強弱型」と呼んだものは、これら２つの韻律特徴を指定する必要のない方言も含め、分布の観点からも方言区分の観点からも、かなりの程度まとまって現れていることがいえる（末尾の地図２参照）。

5　まとめ

本稿では、主に sDerong-nJol 方言群の諸方言に認められる、分節音に生じる複数の異なった現象について、韻律特徴という概念を用いて統一的に説明を与えることを試みるとともに、韻律特徴の類型的な異なりと方言の分類について若干の考察を加えた。

韻律特徴は「弱強型」「強弱型」の２種に分類され、雲南省で話されるカムチベット語について適用される方言群は、韻律特徴を指定する必要のないものを含め、以下のようになる。

弱強型　sDerong-nJol 方言群（mBalhag 下位方言群および gYagrwa 下位方言群を除く）

強弱型　Sems-kyi-nyila 方言群 rGyalthang 下位方言群、雲嶺山脈東部下位方言群のうち主に金沙江東岸に分布するもの、Chaphreng 方言群、sDerong-nJol 方言群 mBalhag 下位方言群

指定不要　Sems-kyi-nyila 方言群雲嶺山脈東部下位方言群のうち主に金沙江西岸に分布するもの（維西県塔城鎮で話されるものを除く）、Melung 下位方言群、Lamdo 下位方言群、sDerong-nJol 方言群 gYagrwa 下位方言群

「弱強型」「強弱型」という韻律特徴は各方言の音素体系の中では音韻的に機能しないと見込まれるけれども、各方言を特徴づける要素になる。大局的な観点から見ると、方言の類型について新しい観点から分類できる可能性が見えてくるものと考える。加えて、韻律構造の異なりが発生した歴史的背景もまた興味深い検討課題になりうるだろう。

また、韻律特徴として扱った種々の現象について、調査において容認度に関する聞き取りによる確認作業は困難であり、したがって当該形式を「言わない」（不自然さ）と「言えない」（非文法的）の異なりを判別することもまた困難である。できる限り多くの自然発話や語りなどの事例から実際に起こっている現象を収集し、傾向を見出す必要がある。

本稿の試みは最初期段階のものであり、今後とも記述を積み重ねるとともに理論的な側面からも検討を重ねる余地のあるものである。

参考文献

鈴木博之 (2005)「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 69 号 1–23

—— (2007)「甘孜州郷城県カムチベット語の方言特徴」『ニダバ』第 36 号 17–26

—— (2008)「迪慶州瀾滄江流域カムチベット語（徳欽/雲嶺/燕門/巴迪方言）の方言特徴」『ニダバ』第 37 号 115–124

—— (2009a)「迪慶州金沙江流域カムチベット語（奔子欄/尼西/拖頂/霞若/其宗方言）の方言特徴」『ニダバ』第 38 号 29–38

—— (2009b)〈川西地区 “九香線” 上的藏語方言：分布與分類〉《漢藏語學報》第 3 期 17–29

—— (2011a)「カムチベット語嘎嘎塘・勺洛 [Zhollam] 方言の文法スケッチ」大西正幸・稲垣和也編『地球研言語記述論集』３, 1–35

—— (2011b)「四川・雲南境界部金沙江流域のカムチベット語における有気音の無気化現象」『ニダバ』第 40 号 75–81

—— (2012a)「カムチベット語燕門・斯嘎 [Sakar] 方言の文法スケッチ」稲垣和也編『地球研言語記述論集』４（大西正幸博士還暦記念号）, 123–158

—— (2012b)「迪慶州香格里拉県中央域カムチベット語（建塘/小中甸/格咱方言）の方言特徴」『ニダバ』第 41 号 61–70

—— (2012c) 《雲南藏語土話中的特殊数詞形式：其地理分布與歴史来源》第二届中国地理語言學国際學術研討會發表論文（南京）[《第二届中国地理語言學国際學術研討會　會議論文集》125–134]

—— (2012d)「カムチベット語香格里拉県巴拉 [mBalhag] 方言の方言特徴」『国立民族学博物館研究報告』2012-37 巻１号 53–90

—— (印刷中)「カムチベット語雲嶺・査里通 [Tsharethong] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第７号

西義郎 (1986)「現代チベット語方言の分類」『国立民族学博物館研究報告』11 巻４号 837–900 + 1 地図

西田龍雄 (1987)「チベット語の変遷と文字」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』108–169 冬樹社

星泉 (2003)『現代チベット語動詞辞典（ラサ方言）』アジア・アフリカ言語文化研究所

Caplow, Nancy (2009) *The role of stress in Tibetan tonogenesis: a study in historical comparative acoustics*. PhD dissertation at University of California Santa Barbara

Suzuki, Hiroyuki (2009a) Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography — a case study in the Ethnic Corridor of West Sichuan —. In : Yasuhiko Nagano (ed.) *Linguistic Substratum in Tibet — New Perspective towards Historical Methodology (No. 16102001) Report* Vol. 3, 15–34, National Museum of Ethnology

—— (2009b) Origin of non-Tibetan words in Tibetan dialects of the Ethnic Corridor in West Sichuan. In : Yasuhiko Nagano (ed.) *Issues in Tibeto-Burman Historical Linguistics*, 71-96, National Museum of Ethnology

—— (2011) *Development of prepalatal and palatal articulations in Khams Tibetan spoken in bDechen Shangri-La (Yunnan)*. Paper presented at 17th HLS (Kobe)

—— (2012) *Tibetan* pigs *revisited : multiple* piglets *with a* sow *in Yunnan Tibetan and beyond*. Paper presented at 1st International Conference of Asian Geolinguistics (Tokyo)

格桑居冕 [sKal-bzang ’Gyur-med]・格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2002)《藏語方言概論》民族出版社

朱曉農 (2010)《語音學》商務印書館

[付記]

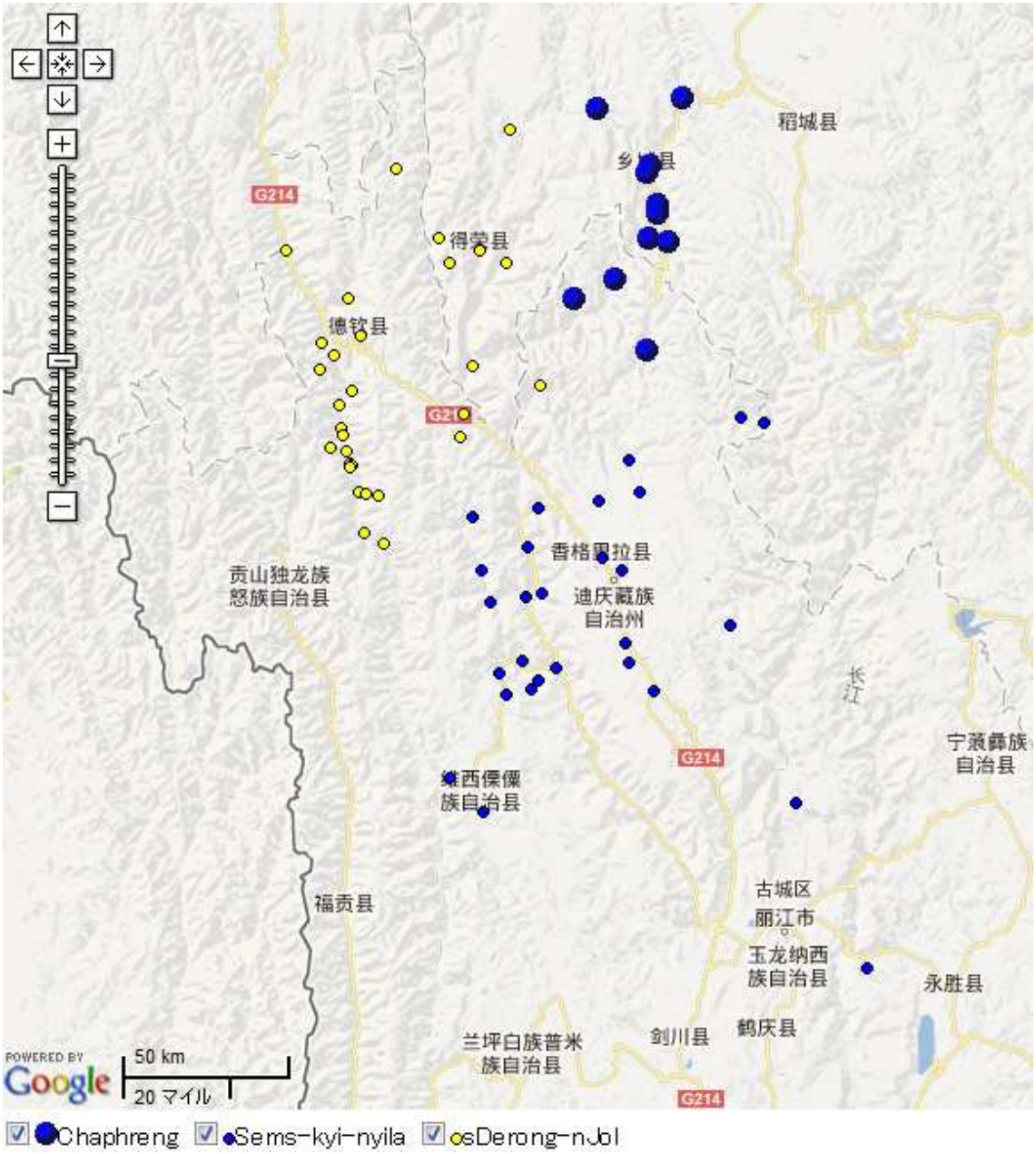
筆者による各種言語資料収集に関する現地調査については、以下の援助を受けている。

- 平成 16-20 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (S) 「チベット文化圏における言語基層の解明」（研究代表者：長野泰彦、課題番号 16102001）
- 平成 19-21 年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」
- 平成 21-23 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」（研究代表者：長野泰彦、課題番号 21251007）

地図

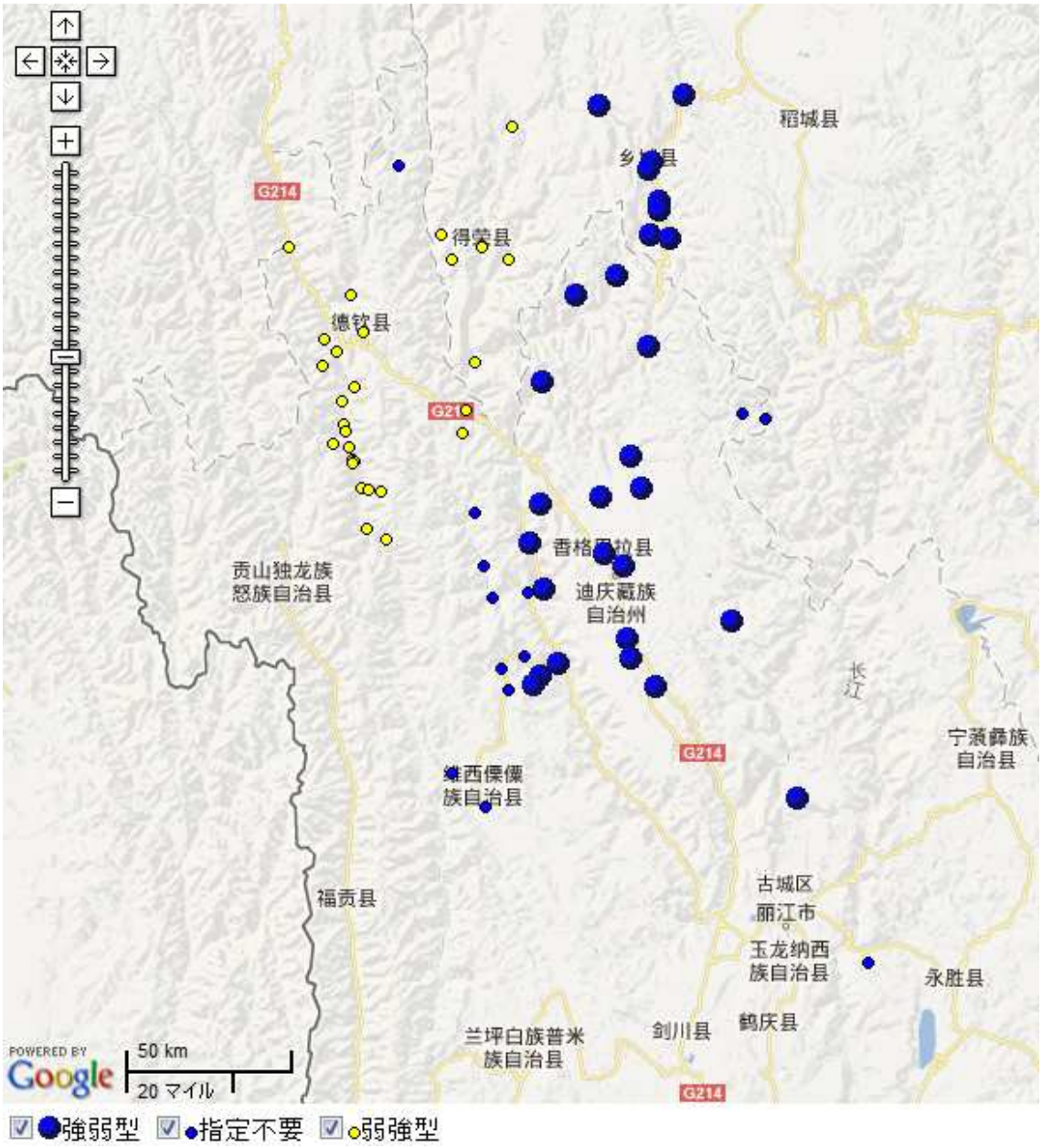
以下の地図は Geocoding を用い、Google Maps をもとに描いたものである。表示するのは、筆者の調査したカムチベット語 sDerong-nJol 方言群・Sems-kyi-nyila 方言群・Chaphreng 方言群に属する諸方言の計 69 地点である。

地図 1：雲南を中心とするカムチベット語の方言分類



方言分類は方言群レベルで分類して表示している。

地図 2：韻律特徴の分類と分布



ɣ̩

—チベット・ビルマ系諸言語における “唇歯母音”—

鈴木 博之

キーワード：チベット・ビルマ諸語、音標文字、唇歯摩擦音、音節核

[要旨] 本稿では、チベット・ビルマ諸語のいくつかの言語に認められる、音節核をなす [ɣ̩] という分節音について、それが調音音声学的にあいまいな表記であるため、1) 調音器官の接近性、2) 円唇性、3) 舌位置の 3 点で精密化する必要性があることを示し、区別されるべき音声とそれをいかに表記するかについて具体例を交えて提案する。

1　はじめに

調音音声学的観点から見て、分節音について子音と母音を一義的に分けるのは困難であり、各言語または理論的立場によってその基準が分かれるものである。一般に母音はその共鳴度の高さから、音節核を形成する主要な要素である。そして、調音音声学における母音の定義は口腔内における舌位置と唇の形状によって行われる。一方、音節核には母音とは呼ばれないもの、たとえば/r, l, n/のような共鳴音が占める言語がある。クロアチア語の hȑvatski「クロアチア語」の第 1 音節などがその例である[1]。音韻論的にはこれらも母音と呼ぶ立場もあるだろう。

母音の共鳴度が低いというのは可動器官（舌）と被動器官の間が狭くなることを指し、さらに狭窄すると流れる呼気の摩擦の度合いが高まることによって、接近音、やがては摩擦音が生じることになる。「舌尖母音」として知られる [ɿ] や「そり舌母音」として知られる [ʅ] などは、共鳴度の低い、すなわちより強い摩擦性を帯びた母音である。この摩擦性に注目して、近似的に [ɿ]=[z̩]、[ʅ]=[ʐ̩] と言うように、有声摩擦音を音節核とする音と同義であるという趣旨の記述がなされることがあるが、これは実際には区別されるべきものであるとされる（潘悟雲等 2012:4-5）。なお、[ɿ] や [ʅ] は国際音声字母 (IPA) には登録されていないが、シナ・チベット語族の言語を中心に頻出する音であるため、音標文字としては必要不可欠である（朱曉農 2010:17-21）。

摩擦性の高い音について、チベット・ビルマ諸語のいくつかにおいて摩擦音が音節核として現れるものがある。それは有声唇歯摩擦音の音標文字で書かれる [v] である。これは音標文字

[1] 子音連続中に現れる r が音節核の位置を占めるかどうかは、各言語の事情によって異なる。先のクロアチア語の例における r が音節核をなしているといえるのは、r が声調を担えることによる。hȑvatski という例では、r が低短型声調（ȑ）を担っている。ただし声調符号は正書法では記述されないし、方言によって異なって現れる。また、pȑst「指」といった、r 以外に音節核をなさないような語例も認められる。

の定義上、舌が構音に関わらない。この音をもつ言語は、主に中国雲南省、甘粛省および青海省に分布する諸言語に認められる。ただし、[v] の音価は言語によって異なり、また独立した/v/という音素になるかもしくは/u/の変異と分析されるか、といった異なりもある。[v] に関して、先行研究に記述があるものを挙げると、たとえば以下のようなものがある。

A [v] が１つの音素として現れる言語
イ語[2] 新安郷滑竹箐、沖鋒郷三家村、蘇雄郷、娃飛郷二村各方言（王成有 2003）、ハニ語菜園、水癸、浪雑各方言（李永燧 2007）、ナシ語青龍方言（姜竹儀 2007）、ナシ語大研方言（黒澤 2009）、トロ語水井方言（蓋興之 2007）、カツォ語（戴慶廈等 (1991)、和即仁 (2007)）、ペー語金華方言（徐琳・趙衍蓀 2007）、ペー語妥洛、俄嘎、金満、金星、大石、周城、馬者龍各方言（汪鋒 2012）、ペー語趙荘方言（趙燕珍 2012）、リス語永勝方言（木玉璋、孫宏開 2011）

B [v] が何らかの音素の自由変異音として現れるもの
ラフ語勐朗壩方言（張蓉蘭・馬世册 2007）、ザウゾウ語（孫宏開 2007）、サドゥ語（白碧波等 2012）、アムドチベット語 sDowi（循化）、Wayan（化隆）、gCantsha（尖扎）、Mangra（貴南）、Grotshang（卓倉）、Rebgong（同仁）各方言（王雙成 2012）

以上のうち、黒澤 (2009) には/ɣ̩/の音声実現は [ʋ̩] とある。また、王成有 (2003) の記述には/ʋ/が用いられ、さらに「歯化母音」として/ʉ̪/という文字による表記があるが、実際の音価は解説がなく不明である。一方で陳康 (2010:72, 74, 78) に「歯化合口音」として/u̪/があり、/u/と対立していることから、[v] と類似の音を意図しているのではないかと考える。この場合、イ語ラル (Lalu)、ラロ (Lalo)、タル (Talu)、リポ (Lipo)、ラヴ (Lavu) 各方言群も音素/v/をもつ言語になる[3]。字形から推測するに、/ʉ̪/は/u̪/のことを指す可能性が高い。音素的な/v/については、各種文献で母音の具体例において、その他の母音とともに最小対もしくは疑似最小対が与えられていることから、母音音素として取り扱うことができるといえる。

本稿では、音節核を担う [v]、すなわち [ɣ̩] を “唇歯母音” と呼ぶ。“ ” をつけているのは、この音が他の一般的な母音の定義と異なり、「舌と関わりのない分節音」であることによる。本来、母音と呼ぶことが適切であるかどうかがまず議論されるべきであるが、本稿の結論としては “唇歯母音” という名称が理にかなっていると考えている。本稿は、[ɣ̩] と記述される音の音素としての取り扱いについて検討することを目的としない。議論の目的は、この [ɣ̩] が調音音声学的にあいまいな表記であるため、表記を精密化する必要性があることを示し、区別されるべき音声とそれをいかに表記するかについて提案することである[4]。

---

[2] 「イ（彝）語」は単一言語から成るのではなく、複数の言語の複合体として理解するほうが現実的であるが、先行研究では必ずしも言語と方言の分類がはっきりしないため、ひとくくりに「イ語」と呼んでおく。

[3] 王成有 (2003) の記述と陳康 (2010:72, 74, 78) の記述が互いに近い方言を扱ったものであるかどうかは判然としない。

[4] ほかにもこれまで筆者が既存の音声表記について適切な定義とともに拡張の必要性を議論してきたものには鈴木 (2005, 2010, 2011c) をあげることができる。

2　[ɣ̩] が不十分な記述である理由

結論から述べると、音節核としての [ɣ̩] という音声表記には、母音の定義として記述されるべき次の３点の情報がないがしろにされている。

1. 調音器官の接近性：摩擦性の高さ（より摩擦音に近いかより接近音に近いか）
2. 円唇性の有無：非円唇か円唇か
3. 舌の構音動作：[ɣ̩] の調音時にとる舌の形状（舌位置）および２次的調音の有無

以上にまとめた３点は、一般的な母音であれば音標文字ごとに定義がなされているものである。しかしながら、舌を主たる可動調音器官としない [ɣ̩] は、この音標文字を用いた段階で以上のすべての情報が未定義のまま置かれている。これらの問題について、朱曉農 (2010) などの先行研究でも取り上げられたことはなかったし、筆者もまた体系的に考察したことはなかった。

それでは、以上のような差異は諸言語において認められないのだろうか？

実際のところ、[ɣ̩] の音色には大いに異なりが存在する。チベット・ビルマ系諸言語の先行研究において音節核を占める [ɣ̩] と記述される音声は、たとえばナシ語とリス語にあるが、筆者の音声観察に基づけば両者の音価には大きな差異が認められる。しかもそれは個人的な差異ではなく、言語別に認められる体系的な差異であることが指摘できる。具体的に述べるならば、ナシ語の [ɣ̩] は非円唇[5]・後舌であり、リス語の [ɣ̩] は円唇・後舌である。両者の摩擦性は十分高い。ただし、両者とも舌位置の高さについては比較的広い範囲が許容され、狭～半狭程度の高さがよく見受けられる[6]。筆者の記述について疑似最小対の具体例をあげておくと、次のようなものがある。

ナシ語啓別方言[7]　/ɣ̩/　/tʰɣ̩^{33}/「出る」：　/ɯ/　/tʰɯ^{21}/「飲む」
リス語阿㑹方言[8]　/ɣ̩/　/fɣ̩^{33}/「蛇」　：　/u/　/ʔe^{55} fu̯^{33}/「鶏卵」

以上に述べたように、/ɣ̩/と分析される音は実際のところ音声学的に異なりが認められるのであるが、少なくともこれまで記述されてきた言語それ自身の記述言語学的取り扱いの中では、余剰な情報であったといえる。それゆえに、１つの言語変種の中で音声実現上の差異が存在するという現象に言及する先行研究もなかった。ところが、筆者は鈴木 (2011ab) において初めて唇歯母音の円唇性による対立を形成する言語を報告した。円唇性による対立というのはこの言語を記述する際に必要不可欠であったが、これらの論文において [ɣ̩] に関する体系的な考察は加えなかった。

---

[5] 非円唇とはいえ、唇を張る緊張度の高い平唇ではない。
[6] 唇歯の接近が認められる以上、必然的に広母音とは共起しないといえる。
[7] 雲南省維西県塔城鎮啓別村で話される。
[8] 雲南省維西県康普郷阿㑹村で話される。きしみ音を伴う場合の 33 調は [^{44}] で実現されることが多い。

3 “唇歯母音” 間の対立

3.1 チベット系諸言語における実例

筆者の調査・記述したチベット系諸言語のうち、音体系の中で複数の “唇歯母音” をもつものは大きく２種類に分かれる[9]。１つはカムチベット語 Zhollam（勺洛）方言で、もう１つは舟曲 [’Brug-chu] チベット語 Ongsum（八楞）方言である[10]。以下にそれぞれの方言における現れをまとめる。

Zhollam 方言

Zhollam 方言の母音組織を取り扱った鈴木 (2011ab) において、“唇歯母音[11]” に/ɣ̩/と/ɣ̩̫/の２つを認めた。日本語による母音の共時的記述を含む鈴木 (2011a:6) から両者の音声記述を引用すると、以下のようである。

/ɣ̩/　主たる調音部位は上前歯と下唇の間の狭めであり、舌位置及び唇の形は [ɤ] に相当する（原注：若年層以下の/ɣ̩/の発音はそれ以外の年代のそれと異なりが認められ、その舌位置及び唇の形は丸みを帯びた [ʊ] で、かつ上前歯と下唇の間で形成される摩擦も弱い）。初頭子音が鼻音の時は [ŋ̩] にもなりうる。

/ɣ̩̫/　主たる調音部位は上前歯と下唇の間の狭めであり、舌位置及び唇の形は [ʉ] に相当する。

Zhollam 方言の “唇歯母音” には円唇と非円唇の区別が認められ、以上の記述においては、非円唇を通常の音標文字を用い、円唇のものにはその舌位置と ʉ の文字形式から着想を得て、中心に横棒を書き入れた形の音標文字を創造した[12]。

---

[9] 単一の “唇歯母音” をもつものは、王雙成 (2012) も記述しているように、アムドチベット語の諸方言に認めらる。ただし一部の方言では、筆者の観察によると、音素として分析できる。たとえば、Sharlung（東溝）方言には/ʋ̩/が認められる。調音方法は、強い円唇で舌位置は [u] が主となる。

[10] これら２つの方言は互いに地域的にも系統的にも遠い関係にある。Zhollam 方言は雲南省迪慶州維西県で話される、カムチベット語 Sems-kyi-nyila（香格里拉）方言群維西塔城下位方言群に属する方言である。一方、Ongsum 方言は甘粛省甘南州舟曲県で話される、言語所属未定の独立方言群の１つである。甘南州南東部のチベット語諸方言については、楊士宏 (2009:67-95) を参照。Ongsum 方言の言語特徴を見る限り、筆者の言うヒャルチベット語（鈴木 2007:31-32）と共通するところが指摘できるが、詳細な検討が必要である。チベット文化圏東部のチベット系諸言語の言語・方言分類に関しては、鈴木 (2009) を参照。

なお、Zhollam 方言と同一下位方言群に属する sKobsteng（格登）方言にも音素/ɣ̩/が認められる。

[11] 鈴木 (2011b) では「子音性母音」と呼んでいる。なお、[ɣ̩] を含むアムドチベット語の複数の方言の記述を扱う王雙成 (2012:286-287) では、[ɣ̩] を [u] の摩擦化というように分析する。このため、音体系上は [ɣ̩] は/u/の異音として帰納されているものと考えられ（王雙成 2012:77）、「摩擦化母音」と呼ぶ部類に入れている。

なお、潘悟雲等 (2012:4) には「摩擦母音」と訳せる用語が用いられていて、「摩擦化母音」か「摩擦母音」かそれとも「子音性母音」か、用語として未整理の状況が反映されていると言える。

[12] 以上２種の音素について、その蔵文との対応関係を簡潔にまとめると、次のようになる。

/ɣ̩/：蔵文-o, -ed, -rel, -rol

/ɣ̩̫/：蔵文-e’u

Ongsum 方言

Ongsum 方言は最近筆者が記述したもので、記述報告はまだ提出していない。この方言では、“唇歯母音” について音韻的に次の４種類の音声が対立を形成し、それぞれの音声記述は以下のようになる。

/ʋ̩/　主たる調音部位は上前歯と下唇の間の狭めであり、軽微の摩擦が生じる。舌位置及び唇の形は [ʊ] [13] に近い。

/ɐ̩/　主たる調音部位は上前歯と下唇の間の狭めであり、軽微の摩擦が生じる。舌位置及び唇の形は [ʉ] に近い。

/ʋ̩ˠ/　主たる調音部位は上前歯と下唇の間の狭めであるが、/ʋ̩/のときより狭めは少なく、摩擦が聞こえない時もある。舌位置及び唇の形は [oˠ] に近い。

/ɐ̩ˠ/　主たる調音部位は上前歯と下唇の間の狭めであるが、/ɐ̩/のときよりも強い摩擦が生じることが多い。舌位置及び唇の形は [ɵˠ] に近い。

Ongsum 方言には各母音に体系的に軟口蓋化の有無が対立するため、以上のように舌位置に４つの対立が生まれている [14]。以上の音素はそれぞれ最小対は少ないが/u, ʉ, uˠ, ʉˠ/などとも対立すると考えて問題ない。Ongsum 方言の記述は先行研究が存在しないため、以下に具体例をあげる。

/ʋ̩/：lʋ̩ tə「話す」　　/u/：sʰʋ̩ lu「のこぎり」

/ɐ̩/：lo tɐ̩ 「穀物」　　/ʉ/：ᶠʰlʉ「太もも」

/ʋ̩ˠ/：ᶠʰlʋ̩ˠ「風」　　/uˠ/：puˠ zə「蒸しパン」

/ɐ̩ˠ/：lɐ̩ˠ「羊」　　/ʉˠ/：tɕʰɯ ɕʉˠ「バケツ」

3.2　“唇歯母音”：表記すべき情報

3.1 で見たように、“唇歯母音” 間で対立が認められるような場合に対応するためには、単に [ʋ̩] と記述するだけでは不十分である。２節で指摘した問題点について、筆者は以下のような表記法を提案する。

---

[13] より正確には、[ʊ] より後ろよりで舌位置も若干低く、スウェーデン語音声学で用いられる [ɷ] の舌位置に近い。

[14] 以上４種の音素について、その主な蔵文との対応関係を簡潔にまとめると、次のようになる。

/ʋ̩/：蔵文-ab, -ib, -ub, -ob, -od, -ong, -os, -or

/ɐ̩/：蔵文-og(s), -in, -un, -ir

/ʋ̩ˠ/：蔵文-um, -ung(s), -ul, -ur

/ɐ̩ˠ/：蔵文-ug(s)

ただし例外も多く、/ʋ̩/に蔵文-og(s) が対応したり、/ɐ̩/に蔵文-ug(s) が対応することもあり、注意が必要である。

調音器官の接近性

少なくとも既存の音標文字を用いるということを前提にするならば、調音位置における接近性について、定義済みの音標文字から [ɣ̩]（摩擦性の強いもの；本来の音標文字の定義は唇歯摩擦音）または [ʋ̩]（摩擦性の弱いもの；本来の音標文字の定義は唇歯接近音）を選ぶことができる[15]。また、音節核の位置にあることを明示する補助記号 [ˌ] も付加するべきである[16]。

円唇性

現在の筆者の使用状況に照らせば、[ɣ̩] を非円唇、中央の横棒を加えた [ɣ̩̞] を円唇として記号を定義している。ただし後者は、**3.1** で記述した２種のチベット系言語の例を見からもわかるように、舌位置が中舌であることを前提として考えているため、単に円唇という意味で用いているのではない。つまり記号の構成上、円唇中舌をひとまとめに有標として扱い、それ以外を無標とすることになる。

ただしこの措置は、鈴木 (2011ab) において Zhollam 方言の記述に際して必要に迫られて行ったものであるから、有標無標の関係がこのままでよいかどうかは一度検討の必要性があるかもしれない。

舌の調音動作

これまで筆者は舌位置を表す点について一度も検討してこなかったため、これが問題として残される。

Zhollam 方言の/ɣ̩/と Ongsum 方言の/ʋ̩/は、唇歯部における接近性のほかに舌位置が異なっている。これを簡潔に表すために、１つの案として、一般の母音組織を構成する音標文字を直接用いて、たとえば以下のように表すことができる。

Zhollam 方言/ɣ̩/：[ɣ̩ɤ̞]
Ongsum 方言/ʋ̩/：[ʋ̩ʊ̞]
ナシ語啓別方言/ɣ̩/：[ɣ̩ɯ]
リス語阿㑹方言/ɣ̩/：[ɣ̩u]

---

[15] これについては、王成有 (2003) などの先行研究でも行われているところである。また、段亞廣 (2012:69-76) の漢語中原官話諸方言の記述および音変化の過程の推定でも、音節核に [v] や [ʋ] が使われている。

ただし、摩擦性の観察と分析については、個人差も出てくる。ナシ語について、黒澤 (2009) は音韻表記に/ʋ̩/を用いつつも音声実現としては唇歯接近音 [ʋ̩] であると述べるが、「下唇と上歯の摩擦音が強く聞こえることもある」とも述べている (p.71)。記述対象の方言の違いもあるが、筆者の観察では、通常は唇歯間の摩擦音が強く聞こえるため、発話によって摩擦が弱まるというのが実際の状況に近い。もしもナシ語の事例を [ʋ̩] と記述する場合、チベット語 Ongsum 方言の/ʋ̩/に対する音声記述の方法に困難が生じる。ナシ語の事例は基本的に/ɣ̩/ [ɣ̩] とするほうがより現実的であろう。

[16] 複数の先行研究では、補助記号 [ˌ] を付加していない。これについて、補助記号を使用すべきとの潘悟雲等 (2012:4-5) による指摘がある。

母音の音標文字は舌位置とともに円唇性についての情報も含まれているため、以上の方式で Zhollam 方言の/ɣ̪/と Ongsum 方言の/ʋ̪/を表す場合、中央の横線を加える必要性はなく、それぞれ以下のように示すことができる。

Zhollam 方言/ɣ̪/：[ɣ̪ʉ]
Ongsum 方言/ʋ̪/：[ʋ̪ɵ]

ただし、以上の案を実際の言語記述に適用した例はこれまで存在しないため、必ずしも表記が妥当であるかどうかは検討課題である。特に、既存の母音用音標文字を直接用いる場合、円唇性について異なりを設ける必要性はないといえる。ただし Zhollam 方言や Ongsum 方言のように、舌位置と円唇性について “唇歯母音” が対立を形成する場合、[ɣ̪] と [ɣ̪] のように表すのも利便性がある。いずれにせよ、音声学的に詳細な記述においては、以上のような情報を提供することが必要不可欠であると考える[17]。

以上、調音器官の接近性、円唇性、舌位置の３つの特徴について、いかに表記するか提案した。続いて、次節において簡単に実際の議論の中で用いることにより、その有用性を検討してみることにする。

4 “唇歯母音” の舌位置に注目することで理解できる問題：雲南省北西部の諸言語を例に

雲南省北西部で話されるペー語、ナシ語、リス語、カムチベット語などのいくつかの言語には音素/ɣ̪/ もしくは音声実現として [ɣ̪] をもつ変種が存在することが報告されている。筆者はこれらの言語について少なくとも２つ以上の変種について直接観察し、[ɣ̪] の調音音声学的な特徴を確認した。

さて、木仕華 (2012) はナシ語の東巴文字読音の中に認められるチベット語からの借用語について取り上げているが、その中に [ɣ̪]（原文中では [v]）を含む例があがっている。たとえば、[dv^{31}dʐɯ^{33}] や [dv^{31}dʐ̩^{31}]「金剛」というナシ語はチベット語（蔵文）*rdo rje* からの借用語である。ただし、木仕華 (2012) は借用の経路については取り扱っていない。一方、和繼全 (2012) もまた東巴文字読音の中に認められるチベット語読みの音について取り上げているが、その中に [fv^{55}]「猿」という例が含まれ、蔵文 *spre’u* の rGyalthang（建塘）方言形式との関連を示している[18]。

ナシ語に取り入れられたチベット語由来の語がチベット語方言との接触によって得られたも

[17] 先行研究の中には、これらの情報を明確に記述するものもある。たとえば、和即仁 (2007) はカツォ語の/v/について「実際の音価は [ʋ] で、発音時に下唇と上歯の間で軽い摩擦があり、唇はやや引き、舌位置は u より前寄り」ということを記述している。上述の提案を適用すれば、さしずめ [ʋ̪] といったところか。

[18] rGyalthang 方言の「猿」は/ˊçwɑː/もしくは/˩ʔa çʉː/であり、ナシ語東巴文字読音 [fv^{55}] と似ているとは言い難い。周辺のそのほかのカムチベット語方言を見てみると、rGyalthang 方言と同じ方言群に属する Choswateng（吹亞丁）方言では/ˊʔa huː/となり、Daan（大安）方言では/˩xõ jã/となる。むしろこれらに含まれる音節に対応関係を見出すことができる。ただし、これらのカムチベット語方言において、[ɣ̪] は音素でないだけでなく、音声学的にも未確認である。

のと考えるとき、地理的観点から Sems-kyi-nyila 方言群の諸言語と接触した可能性がもっとも高い。しかしながら、文語読音からの借用の場合も存在するため、方言形式以外の可能性も否定できない。筆者はナシ語の以上の語について、白地方言および啓別方言の発音を記録した。いずれの方言でも、「金剛」の第１音節は [dɣ̩ɯ^{21}] という発音になり、「猿」のチベット語音による読みは [fɣ̩ɯ^{55}] という発音になっている。つまり、唇歯の接近度が強く、非円唇で唇は突き出さず、舌位置は後舌で高いということである。この/ɣ̩/の特徴はカムチベット語 Zhollam 方言に見られる/ɣ̩/と音声学的には類似しているといえる。しかも Zhollam 方言では、蔵文-o#に対して/ɣ̩/（発音は [ɣ̩ɤ̞]）が対応し、蔵文-e’u に対して/ɣ̩/（発音は [ɣ̩ʉ]）が対応するため、母音の蔵文との対応関係から見れば、上記のナシ語に認められるチベット語由来の読音の形式と並行することになる。

しかしながら、歴史的観点からは別の見方もある。ナシ語が先に/o/>/ɣ̩/という変化を経験し、Zhollam 方言がそれに引き続いて/o/>/ɣ̩/の変化を経験したというものである。実際のところ、Zhollam 方言において/o/>/ɣ̩/がいつごろ起こったかはまだ判明しておらず、周辺のカムチベット語諸方言と比べても類似の例がなく、Zhollam 方言に独自の音変化であるため、推測するのも難しい。

ただし/ɣ̩/の調音音声学的特徴を明らかにすることを通じて１つ明確になったことは、Zhollam 方言の周辺部で話されるリス語に認められる/ɣ̩/が同方言に与えた影響は少ないのではないかということである。リス語の/ɣ̩/は [ɣ̩u] であることが通常で[19]、非円唇の自由変異はほぼ確認されないため、Zhollam 方言に起きたであろう音声変化に関与している音とは異なるものと考えられるからである[20]。

“唇歯母音” の音声特徴を明らかにすることによって、これまでになかった視点から言語現象を検討できるようになることが期待されるだろう。

5　まとめ

本稿では、音節核を担う [ɣ̩] をめぐって、その音声表記の問題を明らかにし、それをいかに解決するかに関する提案を行った。また、[ɣ̩] の詳細な音声実現の記述を利用した簡潔な試論を加えた。

“唇歯母音” とは奇妙な名称である。しかしながら本稿で見たように、“唇歯母音” は一般の母音と同じように舌位置を調整して音色を変えることができる。この音はあくまでも唇歯音が主たる調音音声学的特徴であって、一般の母音の唇歯音化でも摩擦音化でもない。[ɣ̩] や [ʋ̩] などの音節核を担う要素に対する呼称として、やはり “唇歯母音” という名称を提案したい。

---

[19] 先行研究におけるリス語の記述では、木玉璋、孫宏開 (2011:19-23) の永勝方言を除いて、音韻的な/ɣ̩/は認められず、/u/の変異音として [ɣ̩] が存在することになっていることがある。ただし２節で言及したように、阿㑹村の方言では/ɣ̩/と/u/が対立し（鈴木 2012）、それらは木玉璋、孫宏開 (2011:162-163) の維西方言ではいずれも/u/と記述されている。このような経緯がリス語阿㑹方言の/ɣ̩/が円唇性の強い発音であることと関係するかもしれない。

[20] 一方で Zhollam 方言の若年層の話者が/ɣ̩/について [ɣ̩ɤ̞] よりもむしろ [ʋ̩] に近い発音をするという点は注目に値するといえる。[ɣ̩ɤ̞] > [ʋ̩] が生じた原因については不明である。

参考文献

黒澤直道 (2009)「ナシ（納西）語大研鎮方言の音韻体系：先行研究との比較を中心に」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 77 号 63–81

鈴木博之 (2005)「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 69 号 1–23

—— (2007)『川西民族走廊・チベット語方言研究』京都大学博士論文

—— (2009)〈川西地区 “九香線” 上的藏語方言：分布與分類〉《漢藏語學報》第 3 期 17–29

—— (2010)「硬口蓋調音の多様性とその表記—雲南省のカムチベット語諸方言の記述から見た考察—」大西正幸・稲垣和也編『地球研言語記述論集』２, 107–113

—— (2011a)「カムチベット語嘎嘎塘・勺洛 [Zhollam] 方言の文法スケッチ」大西正幸・稲垣和也編『地球研言語記述論集』３, 1–35

—— (2011b)〈嘎嘎塘藏語的咽化元音與其來源〉《語言暨語言學》第 12.2 期 477–499

—— (2011c)「チベット・ビルマ系言語から見た「緊喉母音」の多義性とその実態」『言語研究』第 140 号 147–158

—— (2012)《維西傈僳語阿倮話 “緊元音” 的語音描写》第六届国際彝緬語學術研討會發表論文（成都）

白碧波、許鮮明、楊艷、文艷、季紅麗、石常艷、曹冰雪、陳勰、肖黎、白京、沐華、畢艷紅 (2012)《撒都語研究》民族出版社

陳康 (2010)《彝語方言研究》中央民族大學出版社

戴慶厦、劉菊黄、傅愛蘭 (1991)〈卡卓語〉戴慶厦、黄布凡、傅愛蘭、仁增旺姆、劉菊黄《藏緬語十五種》249–280 北京燕山出版社

段亞廣 (2012)《中原官話音韻研究》中国社會科學出版社

蓋興之 (2007)〈堂郎語〉孫宏開等主編 366–378

和繼全 (2012)〈東巴文藏語音字研究〉《西南民族大學學報（人文社會科學版）》第 5 期 52–57

和即仁 (2007)〈卡卓語〉孫宏開等主編 426–446

姜竹儀 (2007)〈納西語〉孫宏開等主編 346–365

李永燧 (2007)〈哈尼語〉孫宏開等主編 308–326

木仕華 (2012)〈納西東巴文涉藏字符字源匯考〉《民族語文》第 5 期 74–81

木玉璋、孫宏開 (2011)《傈僳語方言研究》民族出版社

潘悟雲、江荻、麦耘 (2012)〈有關計算機數據處理的記音規範建議〉《民族語文》第 5 期 3–7

孫宏開 (2007)〈柔若語〉孫宏開等主編 447–467

孫宏開、胡增益、黄行　主編 (2007)《中国的語言》商務印書館

汪鋒 (2012)《語言接觸與語言比較—以白語為例》商務印書館

王成有 (2003)《彝語方言比較研究》四川民族出版社

王雙成 (2012)《藏語安多方言語音研究》中西書局

徐琳、趙衍蓀 (2007)〈白語〉孫宏開等主編 515–538
楊士宏 (2009)《安木多東部藏族歷史文化研究》民族出版社
張蓉蘭、馬世册 (2007)〈拉祜語〉孫宏開等主編 286–307
趙燕珍 (2012)《趙莊白語參考語法》商務印書館
朱曉農 (2010)《語音學》商務印書館

[付記]

筆者による各種言語資料収集に関する現地調査については、以下の援助を受けている。

- 平成 16-20 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (S) 「チベット文化圏における言語基層の解明」（研究代表者：長野泰彦、課題番号 16102001）
- 平成 19-21 年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」
- 平成 21-23 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」（研究代表者：長野泰彦、課題番号 21251007）

ビルマ語の受動構文 *

倉部慶太

キーワード：ビルマ語，受動構文，所有者受動文, 名詞化接頭辞 ʔă- の脱落条件

1　はじめに

ビルマ語には、以下の例に示すように、動詞 khàɴ「受ける」を用いて、「被動者がある動作行為を受ける」というような、受動的意味を表す構文が存在する[1]。

(1) θù　ʔă-yaiʔ　　khàɴ　yâ dɛ̀.
3SG NMLZ-beat receive yâ REAL
「彼は殴られた」

以下に詳しく記述するが、この構文では、述語動詞 khàɴ「受ける、耐える」が、主語として被動者である θù「彼」を取り、目的語として名詞化された動詞 ʔă-yaiʔ「殴り」を取っている。この文は、「彼は殴りを受けた」、すなわち、「彼は殴られた」という意味を表す。また、上例に示すとおり、この構文では、通常、述語動詞の khàɴ「受ける」に「不可避」を表す助動詞 yâが付加される。ただし、この助詞の生起は義務的ではない。この助詞を伴わない場合、その文は「自ら進んで V される」という意味を表す (6.2 節を参照)。

この種の文には生産性があり、これをビルマ語における受動構文であると考えることができる。本稿の目的は、このビルマ語の受動構文を対象として包括的な記述と考察を行うことにある。

本稿の構成は以下のとおりである。2 節では、先行研究を概観する。3 節では、本稿で扱う受動構文を規定し、また、この構文における主語および目的語に関して記述する。4 節では、この受動構文が表す意味について述べる。5 節では、受動構文に現れる名詞化接頭辞 ʔă-の脱落条件に関して考察を行う。6 節では、この構文における主語の有生性、主語の意志性、この構文の使用頻度、名詞化接頭辞の脱落条件、自動詞由来の派生名詞を目的語に持つ受動構文に関して考

* 本稿は筆者が 2009 年 1 月に大阪大学に提出した卒業論文「ビルマ語の受動表現—KHAN YA 構文の記述、分類と意味」に加筆・修正を施したものである。卒業論文を執筆するにあたり、当時の指導教官である大阪大学の加藤昌彦准教授よりビルマ語を含むチベット・ビルマ諸語の専門家としての立場から数々の有益なご意見を頂いた。この場を借りて厚くお礼申し上げます。また、本稿を改訂するにあたり、言語記述研究会の伊藤雄馬氏、稲垣和也氏、大西正幸先生、長田俊樹先生、富田愛佳氏から数多くの有益なご助言を頂いた。心よりお礼申し上げます。

[1] 以下、本稿におけるビルマ語表記は、加藤 (2008) に示される「加藤式表記法」に従い、分かち書きは原則、語単位で行う。先行研究から引用する例文の表記に関してもこの表記法に従うこととする。

察する。最後に、7 節において、類型論的観点からビルマ語受動構文の機能を考察し、より広い視点からこの構文を特徴づける。

2　先行研究

本節では、ビルマ語受動構文に言及のある先行研究を概観する。この構文のみを対象として扱った先行研究は岡野 (2009) のみであるが、ビルマ語の他の文法現象を扱った文献やビルマ語文法を総合的に扱った文献には、この構文に言及のある研究が存在する。本節ではこれらの先行研究も含め、概観する。

Okell (1969) はビルマ語の参照文法である。Okell (1969:162) は名詞化接頭辞 ʔă-によって派生される名詞を目的語として取る動詞のひとつに khàɴ「受ける」があることを指摘し、ʔă-yaiʔ khàɴ (NMLZ-beat receive) ‘receive a beating’ という例を挙げている。また、名詞化接頭辞 ʔă-により名詞化された動詞がそれ自身の目的語を取る例として、pá yaiʔ khàɴ (cheek strike receive) ‘suffer a blow on the cheek’ という例を示している (後者の例は本稿 5.4 節で詳述する)。Okell (1969) はこの現象を指摘した点で先駆的であるが、受動構文に言及した箇所は数行に留まっている。

Wheatley (1982) はビルマ語文法の全体像を取り扱った博士論文である。Wheatley (1982:290–1) は khàɴ を伴うこの構文は、しばしば ‘passive of adversity’ として振る舞い、意味的な被動者を主語にすると述べるにとどまり、これ以上の詳しい説明は加えていない。

Sawada (1995) はビルマ語の格標識 kò および kâ の用法について考察した論文であるが、同論文の注 14 (p.176) にはビルマ語受動構文に関する言及が見られる。同論文では、この構文の主語が人間名詞句に限定される点 (本稿 6.1 節を参照)、この構文の名詞化された動詞には自動詞も現れうる点 (本稿 6.4 節を参照) が指摘されている。

Okell and Allott (2001) はビルマ語の文法形式を取り扱った辞書である。同書の khàɴ の項目は、(a) to undergo V-ing (deliberately), to seek, request V-ing, etc; (b) common in pattern *ʔă-V khàɴ yâ* ⇒ to undergo V-ing (involuntarily), to be V-ed, to suffer V-ing と説明されている[2]。そして、ビルマ語文法において、動詞 khàɴ に関する主要な関心事は ʔă-V khàɴ yâというパターンであり、これはしばしば英語の受動 (passive) と対応すると述べ、この種の例を多く提示している。また、Okell and Allott (2001:29) は ʔă-V khàɴ と ʔă-V khàɴ yâ の意味的相違点 (本稿 6.2 節を参照)、受動構文に出現する名詞化接頭辞 ʔă- の脱落条件 (本稿 5 節を参照) に関しても言及している。

岡野 (2007) はビルマ語の全体像を取り扱った文法書である。岡野 (2007:130–1) は名詞化接頭辞 ʔă- によって派生される名詞 (ʔă-V 名詞) の用法のひとつとして受動構文を取り上げている。同文献は、名詞化接頭辞 ʔă- の脱落条件 (本稿 5 節を参照)、所有者受動文 (本稿 5.4 節を参照)、受動構文の使用頻度 (本稿 6.3 節を参照)、被害の意味を表さない受動構文 (本稿 4.2 節を参照) など様々な点に言及している。

岡野 (2009) は出版された論文の中では、受動構文を対象に扱った唯一の論文である。同論文

[2] ⇒ の記号は項目の終わり、および、英訳・説明のはじまりを指している (Okell and Allott 2001:xii)。

は、所有者受動文 (本稿 5.4 節を参照)、所有者受動文の動作主の標示 (本稿 5.4 節を参照)、被害の意味を表さない受動構文 (本稿 4.2 節を参照)、受動構文に現れる名詞化された動詞の直前に具格名詞が現れる例 (本稿 5.6 節を参照) など様々な点に言及している。また、同論文はビルマ語の受動構文には様々なバリエーションが認められることを指摘し、名詞化接辞 ʔă- を伴う受動構文、名詞節化標識 tà を伴う受動構文、動詞 thî「当たる」を伴う受動構文などを記述している。そして、まとめにおいて「ビルマ語の受動表現の研究・調査が困難であるのは、第一にバリエーションが非常に多いことが挙げられる」と述べている。

なお、Judson (1883)、Cornyn (1944)、Stewart (1955)、Cornyn and Roop (1968)、Soe (1999)、澤田 (1999) などのビルマ語文法を総合的に取り扱った文献では受動構文に関しては特に取り上げられていない。

以上、本節では、ビルマ語受動構文に言及のあるいくつかの先行研究を概観したが、本稿と先行研究の相違点に関しては 8 節にまとめて提示する。

3　ビルマ語受動構文

本節では、まず本稿でいうビルマ語の受動構文を概観し、本稿で扱う構文を規定する。次に、この構文における主語および目的語に関して記述する。

3.1　受動構文

本稿で取り扱うビルマ語受動構文とは、(3) のような構文である[3]。

(2) ʔăphè ŋâ　gò　yaiʔ tɛ̀.
father 1SG ACC beat REAL
「父が私を殴った」

(3) ŋà　ʔăphè yɛ̂　ʔă-yaiʔ　khàN　yâ dɛ̀.
1SG father GEN NMLZ-beat receive yâ REAL
「私は父に殴られた」

(2) と (3) は、意味的に能動と受動で対応している。(3) の文について説明する。以下でより詳しく述べるが、この文の述語動詞は khàN「受ける」である。この動詞が、主語として被動者である ŋà「私」を、目的語として名詞化された動詞 ʔă-yaiʔ「殴り」を取っている (以下では、名詞化接頭辞 ʔă-により派生される名詞を ʔă-V 名詞と呼ぶ)。そして、この動詞 khàN「受ける」の後には「不可避」を表す助動詞 yâ が現れている。また、動作主名詞句は、名詞化された動詞の直前に属格標識 yɛ̂ を伴って現れている[4]。(3) の文を直訳すると、「私は父の殴りを受けることになった」というようになる。

[3] (2) の例のように、人間名詞句は gòの後で下降調へと変調する。
[4] 動作主はこれ以外の方法でも標示することができる (5.2 を参照)。

(3) のような構文には生産性があり、この構文はビルマ語における受動的な意味を表す構文であるといえる。以下、本稿では (3) のような構文を「ビルマ語の受動構文」または単に「受動構文」と呼ぶことにする。

ところで、(3) では、受動構文に現れる名詞化された動詞は名詞化接頭辞 ʔă- によって名詞化されているが、以下の (5)、(6) に示すとおり、この動詞は他の名詞化標識によって名詞化されることもある。

(4) ŋà ʔă-yaiʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG NMLZ-beat receive yâ REAL
「私は殴られた」

(5) ŋà yaiʔ tà khàN yâ dɛ̀.
1SG beat NMLZ receive yâ REAL
「私は殴られた」

(6) ŋà yaiʔ chíN khàN yâ ðì.
1SG beat NMLZ receive yâ REAL
「私は殴られた」

このように、名詞化にはいくつかの方法が見られるが、本稿では名詞化接頭辞 ʔă- によって派生された派生名詞を持つ受動構文のみを対象とする。なぜならば、(4) に見られる ʔă- による名詞化と (5) と (6) に見られる tà および chíN による名詞化は質的に異なるためである。具体的には、名詞化接頭辞 ʔă- は動詞を名詞化する形式であるのに対して、tà および chíN は節を名詞化する形式である (なお、tà と chíN の相違は文体的なものであり、chíN は tà に対してよりフォーマルな場面で用いられる)。そのため、ʔă- による派生名詞を持つ受動構文と tà または chíN による派生名詞を持つ受動構文とでは相違が観察される。例えば、前者では動作主を属格標識を用いて標示しなければ非文となることがあるのに対して、後者では動作主を属格によって標示せずとも非文とはならない。以下のミニマルセットに示すとおりである。

(7)*ŋà ʔăphè ʔă-yaiʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG father NMLZ-beat receive yâ REAL
「私は父に殴られた」

(8) ŋà ʔăphè yaiʔ tà khàN yâ dɛ̀.
1SG father beat NMLZ receive yâ REAL
「私は父に殴られた」

(9) ŋà ʔăphè yaiʔ chíN khàN yâ ðì.
1SG father beat NMLZ receive yâ REAL
「私は父に殴られた」

このように、ʔă- による派生名詞を持つ受動構文と tà または chíɴ による派生名詞を持つ受動構文とでは質的な違いが存在するため、本稿ではこれらすべてを同時に取り扱うことはせず、以下では、接頭辞 ʔă- による派生名詞を持つ受動構文に対象を限定して考察を行うことにする。

3.2　受動構文の主語

本節では、受動構文の主語に関して述べる。6.1 節において述べるが、この構文の主語に立つことができるのは人間名詞句のみである。意味的に対応する能動文と比較した場合、受動構文の主語に立つ要素には、次の 3 種が存在する。

i) 意味的に対応する能動文の目的語

次の受動構文 (11) の主語は、意味的に対応する能動文 (10) の目的語に相当する。このような文についてはすでに 3.1 節で見た。

(10) ʔăphè ŋâ　gò　yaiʔ tɛ̀.
father 1SG ACC beat REAL
「父が私を殴った」

(11) ŋà　ʔăphè yɛ̂　ʔă-yaiʔ　khàɴ　yâ dɛ̀.
1SG father GEN NMLZ-beat receive yâ REAL
「私は父に殴られた」

ii) 意味的に対応する能動文の目的語の所有者

次の受動構文 (13) の主語は、意味的に対応する能動文 (12) の目的語の所有者に相当する。この種の文については、5.4 節において詳述する。

(12) θù　ŋâ　lɛʔ　kò　phyaʔ tɛ̀.
3SG 1SG.GEN hand ACC cut　REAL
「彼が私の手を切った」

(13) ŋà　lɛʔ　ʔă-phyaʔ　khàɴ　yâ dɛ̀.
1SG hand NMLZ-cut receive yâ REAL
「私は手を切られた」

iii) 意味的に対応する文の主語

次の受動構文 (15) の主語は、意味的に対応する文 (14) の主語に相当する。この種の文に関しては、6.4 節において述べる。

(14) ŋà　ŋaʔ　tɛ̀.
1SG be.hungry REAL
「私は飢えた」

(15) ŋà ʔă-ŋaʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG NMLZ-be.hungry receive yâ REAL
「私は飢えさせられた」

3.3 受動構文の目的語

受動構文に現れる名詞化接頭辞 ʔă- によって名詞化された動詞は、述語動詞 khàN「受ける」の目的語であると考えられる。その根拠は、この種の名詞化された動詞に対格標識 kò (gò) を付加することが可能であるためである[5]。例えば、以下の例では ʔă-V 名詞である ʔă-yaiʔ「殴り」は対格 kò による標示を受けている。

(16) ŋà θù yɛ̂ ʔă-yaiʔ kò khàN yâ dɛ̀.
1SG 3SG GEN NMLZ-beat ACC receive yâ REAL
「私は彼に殴られた」

この ʔă-V 名詞は、次の例のように文頭に置くことも可能である。

(17) θù yɛ̂ ʔă-yaiʔ kò ŋà khàN yâ dɛ̀.
3SG GEN NMLZ-beat ACC 1SG receive yâ REAL
「彼に私は殴られた」

4 受動構文の意味

本節では、受動構文が表す意味について述べる。まず、4.1 節で「被害」の意味を表す受動構文について述べ、どのような動詞が ʔă-V 名詞に来るとこのような意味であると解釈されやすいかを見る。次に 4.2 節で、広い意味での「利益・恩恵」の意味を表す受動構文について述べ、どのような動詞が ʔă-V 名詞に来るとこのような意味であると解釈されやすいかを見る。

本節の内容は、エリシテーションにより得られた結果に基づいている。筆者は、どのような動詞が受動構文の ʔă-V 名詞になりうるかを調べる目的で、大野 (1983) に収録される 6,000 語中の全動詞について受動構文の ʔă-V 名詞になりうるか否かをコンサルタントに尋ねた。なお、この調査ではテスト・フレームとして ʔă-V khàN yâ dɛ̀ を用いた。

4.1 被害の意味を表す受動構文

ここでは、「被動者が何らかの被害を受ける」という「被害」の意味を表す受動構文を見る。このような意味を表すと解釈されやすいのは、θaʔ「殺す」、yaiʔ「叩く」、móuN「憎む」のような動詞に由来する ʔă-V 名詞を持つ受動構文であるが、本来「被害」とは関係しない pyɔ́「言う」のような動詞に由来する ʔă-V 名詞を持つ受動構文も「被害」の意味を帯びる。したがって、こ

[5] 本稿では、動詞の項のうち、kò を付加しうる名詞句を目的語であると考えておく。なお、ビルマ語には目的語という文法関係を設定する必要はないという考えもある。その場合、kòは目的語を標示するのではなく、動詞の項のうち主語項ではない項、すなわち「非主語項」を標示する標識であるとされる (Sawada 1995)。

の構文のデフォルトの意味は「被害」であると考えられる。例えば、以下のペアにおいて能動文が被害の意味を帯びないのに対して、受動構文では被害の意味が加わっている。

(18) θù ŋâ gò pyó dɛ̀.
3SG 1SG ACC tell REAL
「彼は私に言った」

(19) ŋà θù yɛ̂ ʔă-pyó khàɴ yâ dɛ̀.
1SG 3SG GEN NMLZ-tell receive yâ REAL
「私は彼にひどく言われた」

他動性という観点から分類して示すと、「被害」の意味を表す受動構文の ʔă-V 名詞になりやすい動詞には、次のような動詞がある (この分類は便宜的な分類である)。

a.1 対象に働きかけて対象を変化させるもの

khwɛ́「割る」khouʔ「切る」chèhmóuɴ「砕く」chó「折る」phɛ̀「削除する」phɛ́「裂く」phyó「崩す」phyɛʔ「壊す」phyauʔ「消す」phyaʔ「切る」θaʔ「殺す」など

(20) ŋà ʔă-phyaʔ khàɴ yâ dɛ̀.
1SG NMLZ-cut receive yâ REAL
「私は切られた」

a.2 対象に働きかけるが、対象に変化をもたらさないもの

kaiʔ「噛む」kàɴ「蹴る」kháiɴ「命じる」siʔ「調べる」swɛʔ「干渉する」shwɛ́「引く」hɲíɴ「いじめる」hɲaʔ「挟む」tàiɴ「訴える」tôuɴpyàɴ「仕返す」twɛ̀「攻める」taiʔ「ぶつかる」túɴ「押す」mé「尋ねる」hnâuɴçɛʔ「妨げる」hnìɴ「追い出す」hniʔ「沈める」hnɛʔ「打つ」pháɴ「捕まえる」yaiʔ「殴る」laiʔ「追う」wáiɴ「囲む」など

(21) ŋà ʔă-pháɴ khàɴ yâ dɛ̀.
1SG NMLZ-catch receive yâ REAL
「私は捕まった」

a.3 対象に対する積極的な心的態度を表すもの

kɛ̂yɛ̂「けなす」khà「拒む」cìzá「からかう」cháuɴ「覗く」cwá「威張る」chauʔhlâɴ「脅す」suʔswɛ́「責める」shù「叱る」shɛ́「罵る」ɲà「騙す」ɲíɴ「否定する」tɛʔkhauʔ「舌打ちする」thìɴ「思う」hnáiɴ「比べる」mǎnàlà「嫉妬する」mê「忘れる」mɛ̂「顔をしかめる」móuɴ「憎む」yì「笑う」yàɴɲó「恨む」çouʔchâ「批判する」など

(22) ŋà ʔă-kɛ̂yɛ̂ khàɴ yâ dɛ̀.
1SG NMLZ-mock receive yâ REAL
「私はけなされた」

4.2　利益・恩恵の意味を表す受動構文

ここでは、広い意味での「利益・恩恵」の意味を表す受動構文について見る。先行研究においても、このような意味を表す受動構文が存在することは知られていたが、どのような動詞がこの種の受動構文になるかという点に関して調査した文献はない。筆者は大野 (1983) 収録の 6,000 語中の全動詞を対象に調査し、どのような動詞の場合に「利益・恩恵」の意味を表す受動構文と解釈されるかを調べた。その結果、「利益・恩恵」の意味を表す受動構文は意味的に次の 2 種にまとめられることが判明した。ひとつは、「受け手が何らかの名誉ある行為を受ける」という意味を表す受動構文である。もうひとつは、「受け手が援助・救助を受ける」という意味を表す受動構文である。なお、このような「利益・恩恵」の意味を表す受動構文は、「被害」の意味を表す受動構文よりも相対的に少ない。

4.2.1　「受け手が何らかの名誉ある行為を受ける」という意味を表す受動構文

「受け手が何らかの名誉ある行為を受ける」という意味を表していると解釈されやすいのは、chímwáɴ「ほめる」や ʔá kó「頼る (< 力 + 頼る)」、ywé「選ぶ」のような動詞に由来する ʔă-V 名詞を持つ受動構文である。このタイプの動詞を意味的に分類すると次のようになる (なお、ここでの動詞分類と次の 4.2.2 節で示す動詞分類は便宜的な分類であり、それぞれの項目は必ずしも互いに排他的というわけではない)。

b.1 ほめる b.2 頼る b.3 選ぶ b.4 好む b.5 尊ぶ b.6 その他

b.1 ほめる

chíchú「ほめる」chímwáɴ「ほめる」hmyauʔ「お世辞を言う」tànbó phyaʔ「評価する (< 価値 + 切る)」

(23) θù　ʔă-chíchú　khàɴ　yâ dɛ̀.
3SG NMLZ-praise receive yâ REAL
「彼はほめられた」

b.2 頼る

káɴhláɴ「申し入れる」sèhluʔ「派遣する」táuɴ「頼む」táuɴshò「頼む」tàiɴbìɴ「相談する」mêiɴ「命じる」yòuɴcì「信じる」ʔá kó「頼る (< 力 + 頼む)」ʔá thá「頼る (< 力 + 置く)」kòzá phû「代表する (< 代理 + する)」

(24) myànmànàiɴŋàɴ taiʔkùɴdò　ʔágăzámɛ̀ ʔăphyiʔ ʔá　thá khàɴ　yâ dɛ̂　sósómyâ
Burma　taekwondo player　as　power put receive yâ REAL.ATTR PSN
「ミャンマー国のテコンドーの選手として頼りにされているソーソーミャ」(MT)

(25) lɛʔywézìɴ phyiʔ　pí　nauʔ tăhniʔ　hmà bɛ́　pyàiɴbwɛ́
player　become SEQ after one.year LOC only game

sèhluʔ khàɴ gê yâ dà bà.
dispatch receive PAST yâ REAL.NMLZ POLITE
「選手になった後、1 年だけ試合に派遣されたのだ」(MT)

b.3 選ぶ

ywé「選ぶ」ywékauʔ「選ぶ」ywéchɛ̀「選ぶ」θaʔhmaʔ「認める」kauʔhnouʔ「抜粋する」chíhmyîɴ「昇進させる」tìɴhmyauʔ「推薦する」pheiʔ「招く」gòuɴ pyû「名誉を讃える (< 名誉 + する)」shû châ「賞を授ける (< 賞 + 落とす)」shû chíhmîɴ「表彰する (< 賞 + 授与する)」mɛʔsi câ「目をつける (< 目 + 落ちる)」hmaʔtáɴ tìɴ「記録に留める (< 記録 + 置く)」θùgáuɴ pyû「爵位を授与する (< 貴族 + する)」

(26) dàbèmɛ̂ θù ʔă-ywé mă-khàɴ yâ bú khămyâ. hɛ̀rìpyínzá shò dɛ̂ ʔătáɴðá
but 3SG NMLZ-elect NEG-receive yâ NEG SFP PSN call REAL.ATTR student
ʔă-ywé khàɴ yâ dɛ̀. ʔă-ywé khàɴ yâ hmà phɔ̂.
NMLZ-elect receive yâ REAL NMLZ-elect receive yâ IRR.NMLZ SFP
「でも彼は選ばれなかったのですよ。ヘリーピンザーという生徒が選ばれた。当然選ばれるでしょう。」(Myâθáɴtîɴ)

(27) cănɔ̀ hà tɛ̀lìbéɕíɴ gâ tăshîɴ pôhluʔ khàɴ yâ dɛ̂
1SG TOP television ABL via send receice yâ REAL.ATTR
păθămâzóuɴ lù phyiʔ dɔ̂ hmà.
first person become INCHO IRR.NMLZ
「私はテレビを経由して送られた最初の人物となるだろう」(CL)

b.4 好む

caiʔ「好む」cìɴnà「慈しむ」chiʔ「愛する」náɴ「キスする」pópáɴ「求愛する」meiʔshwè phwɛ̂「仲良くする (< 友人 + 組む)」

(28) myànmànàiɴŋàɴ thàiɴnàiɴŋàɴ nɛ̂ meiʔshwè phwɛ̂ khàɴ yâ dɛ̀.
Burma Thai COM friend unite receive yâ REAL
「ミャンマー国はタイ国と友好にさせられた」

b.5 尊ぶ

ciŋò「敬愛する」myaʔnó「尊ぶ」gădɔ̂「拝む」lézá「尊敬する」ʔăyòʔăθè pyû「尊敬する (< 尊敬 + する)」ʔălé pyû「敬礼する (< 尊敬 + する)」

(29) míɴdóuɴmíɴ ðì lùdû ʔă-ciŋò khàɴ yâ ðù phyiʔ θì.
PSN NOM citizen NMLZ-respect receive yâ person be REAL
「ミンドン王は民衆から敬愛された人であった」

b.6 その他

shóunmâ「諭す」cézú tìn「感謝する (< 感謝 + 置く)」tǎyá hó「説教する (< 説法 + 説く)」ʔǎtû yù「まねる (< まね + 取る)」

(30) ŋà myâmyâ gò kùŋì lô cézú tìn khàn yâ dɛ̀.
1SG PSN ACC help because thank put receive yâ REAL
「私はミャミャを手伝ったので感謝された」

4.2.2 「受け手が援助・救助を受ける」という意味を表す受動構文

このような意味を表していると解釈されやすい受動構文は、kù「手伝う」、pyûzû「世話する」、khwɛ́seiʔ「手術する」のように、「援助・救助」の意味を表す動詞由来の ʔǎ-V 名詞を持つ受動構文である。このような動詞は、意味的に概ね次の 4 つに分類できる。

c.1 援助する c.2 救助する c.3 世話する c.4 治療する

c.1 援助する

kù「手伝う」kùŋì「手伝う」kùŋì pé「手伝う (< 援助 + 与える)」thauʔpân「援助する」mâsâ「支える」

(31) shínyɛ́ dɛ̂ lù shò yìn kùŋì pé khàn yâ dɛ̀.
be.poor REAL.ATTR person say if help give receive yâ REAL
「貧しい人というのであれば助けられる」

c.2 救助する

kɛ̀「助ける」kɛ̀zɛ̀「助ける」kɛ̀tìn「助け出す」

(32) yè niʔ θù ʔǎ-kɛ̀ khàn yâ dɛ̀.
water drown person NMLZ-rescue receive yâ REAL
「溺れている人が助けられた」

c.3 世話する

pyûzû「世話する」yûyà「優しくする」gǎyû saiʔ「注意を払う (< 注意 + 立てる)」

(33) nè mǎ-káun yìn gǎyû saiʔ khàn yâ dɛ̀.
live NEG-be.good if care set.up receive yâ REAL
「元気がないと心配される」

c.4 治療する

khwɛ́seiʔ「手術する」shé kû「治療する (< 薬 + 治療する)」shé thó「注射する (< 薬 + 刺す)」shé tai「薬を飲ませる (< 薬 + 飲ませる)」shé thɛ̂「薬を塗る (< 薬 + つける)」

(34) cănɔ̀ gâ khwɛ́seiʔkûθâ khàN yâ môlô pyàN là dà bà
1SG NOM surgerize receive yâ because return come REAL.NMLZ POLITE
「私は手術を受けなければならないので帰って来たのです」(Myâθáɴtîɴ)

4.3 本来の意味と異なる意味を帯びる場合

いくつかの動詞は受動構文において用いられるとき、意味的に対応する能動文と異なる意味を帯びることがある。このような例の場合、この受動構文は意味的に対応する能動文を持たないことになる。以下にいくつかの例を示す。

(35) θù ŋâ gò hɲaʔ tɛ̀.
3SG 1SG ACC interleave REAL
「彼は私を挟んだ」

(36) ŋà ʔă-hɲaʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG NMLZ-interleave receive yâ REAL
「私は金を巻き上げられた」

(37) ŋà ɲân dɛ̀.
1SG be.inferior REAL
「私は劣っている」

(38) ŋà ʔă-ɲân khàN yâ dɛ̀.
1SG NMLZ-be.inferior receive yâ REAL
「私は降服させられた」

(39) ŋà ɲiʔ dɛ̀.
1SG be.dirty REAL
「私は汚い」

(40) ŋà ʔă-ɲiʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG NMLZ-be.dirty receive yâ REAL
「私は不当に扱われた」

5 名詞化接頭辞 ʔă- の脱落条件

本節では、受動構文に現れる ʔă-V 名詞に付加される名詞化接頭辞 ʔă- が脱落しうることを示し、この接頭辞がどのような場合に脱落するかという点を中心に考察を行う。

すでに、先行する節においていくつかの例を示したが、受動構文における名詞化接頭辞 ʔă- は特定の環境において脱落しうる。例えば、以下の (41) に対して、(42) では名詞化接頭辞 ʔă- の脱落が観察されるが、この文は非文とはならない。

(41) ŋà ʔă-shɛ́shò khàN yâ dɛ̀.
1SG NMLZ-abuse receive yâ REAL
「私は罵られた」

(42) ŋà shɛ́shò khàN yâ dɛ̀.
1SG abuse receive yâ REAL
「私は罵られた」

上記の最小対は同一の意味を表し、名詞化接頭辞 ʔă- の有無は意味に全く影響を与えない。

(42) に示すとおり、名詞化接頭辞 ʔă- は脱落することがあるが、どのような場合にでも脱落するわけではない。例えば、以下の例は (42) と同じ形態素を含む ʔă-V 名詞を持つが、名詞化接頭辞 ʔă- を脱落させると、(44) の例に示すように非文となる。

(43) ŋà ʔă-shɛ́ khàN yâ dɛ̀.
1SG NMLZ-abuse receive yâ REAL
「私は罵られた」

(44)*ŋà shɛ́ khàN yâ dɛ̀.
1SG abuse receive yâ REAL
「私は罵られた」

5.1 先行研究: Okell and Allott (2001)

Okell and Allott (2001:29) は、受動構文における ʔă-V 名詞の名詞化接頭辞 ʔă- の脱落条件として、次の 2 点を挙げている (岡野 2007:130 でも同様の条件が挙げられている)。

[I] when the V has two syllables;
[II] when it is closely linked to a preceding N.

[I] は受動構文の ʔă-V 名詞となる動詞が二音節である場合である。Okell and Allott (2001:29) は以下のような例を提示している。

(45) kɛ̂yɛ̂ khàN yâ ðì.
mock receive yâ REAL
‘to be mocked’

(46) θùmâ ʔî luʔlaʔ chíN gò thîpá khàN yâ ðì.
3SG GEN be.free NMLZ ACC infringe receive yâ REAL
‘to have her freedom infringed’

(47) θû ʔăhlâ gò chímwán khàN yâ dɛ̀.
3SG.GEN beauty ACC praise receive yâ REAL
‘to be praised for her beauty’

Okell and Allott (2001:29) は動詞が二音節である場合と規定しているが、以下の例に示すとおり、二音節以上の動詞の場合でも接頭辞 ʔă- は脱落しうる。そのため、より正確には「動詞が二音節以上の場合に脱落する」と規定すべきであろう。ただし、複合語を除くと、ビルマ語の動詞の大部分は一音節か二音節から成るため、単純語に限れば、事実上、二音節語が最も長い語である場合が多い。以下の例の ʔă-V 名詞の V は、khwɛ́「割る」、seiʔ「切り分ける」、kû「治す」、θâ「整える」、という 4 つの形態素からなる複合語である。

(48) ŋà khwɛ́seiʔkûθâ khàN yâ dɛ̀.
1SG surgerize receive yâ REAL
「私は手術された」

筆者の調査によると、大野 (1983) に掲載される動詞の中で受動構文の ʔă-V 名詞になり、かつ、二音節から成る動詞は 95 語あったが、そのうち 94 語において名詞化接頭辞 ʔă- が脱落しうることが判明した。調査した語のうち、唯一の例外は niʔnà「苦しむ」であり、筆者の調査協力者によるとこの動詞では名詞化接頭辞が通常は脱落しないということであった。ただし、他の話者によると、この動詞においても他の二音節動詞と同様、ʔă- は脱落しうると判断された。したがって、ʔă-V 名詞の V が二音節以上の場合に名詞化接頭辞 ʔă- が脱落しうるという観察は極めて正確であるといえる。

次に [II] の条件に関して述べる。この条件に該当する例として、Okell and Allott (2001:29) は以下の例を提示している。

(49) lù móuN khàN ðì.
person hate receive REAL
‘to incur odium (hated from people)’

(50) lù myìN khàN ðì.
person see receive REAL
‘to allow oneself to be seen’

(51) ʔăθîʔăhmaʔ pyû khàN yâ ðì.
recognition do receive yâ REAL
‘to be recognized’

(52) shû chíhmîN khàN yâ ðì.
prize award receive yâ REAL
‘to be awarded a prize’

Okell and Allott (2001:29) は例を示すに留めているが、[II] の条件は [I] の条件に比べて曖昧であると思われる。第一に、ʔă-V 名詞に先行する名詞 (preceding N) にはどのような名詞があるか検討する必要がある。上記の Okell and Allott (2001:29) による例に見られる ʔă-V 名詞に先行する名詞は同質ではなく、動作主や対象などが含まれている。第二に、緊密に結びつく (closely linked) という表現が曖昧である。この点に関して、本稿では ʔă-V 名詞とそれに先行する名詞が複合語を成すかという観点から考察を行う (5.8 節を参照)。

このように、Okell and Allott (2001:29) による規定は必ずしも十分ではないように思われる。岡野 (2009:126) では「ʔă-V 名詞は接頭辞 ʔă-がしばしば脱落する。しかし脱落の環境については詳しいことは分かっていない」と述べられているが、この指摘はこの点を指しているものと思われる。

以下、本節では [II] の条件に関してより詳しく検討し、名詞化接頭辞 ʔă- が脱落するのは「ʔă-V 名詞の直前に主格で現れる名詞 (句) が生起する場合」であることを示す。そして、この種の ʔă-V 名詞の直前に生起しうる主格で現れる名詞 (句) には概ね以下の 6 種類があることを明らかにする。

1. 主格で現れる動作主 (5.2 節)
2. 三項動詞の ʔă-V 名詞の対象や着点 (5.3 節)
3. 主語の所有物 (5.4 節)
4. 熟語の名詞要素 (5.5 節)
5. 道具を表す名詞句 (5.6 節)
6. 起点を表す名詞句 (5.7 節)

5.2 動作主

3 節で示したとおり、受動構文における動作主名詞句は、ʔă-V 名詞の直前に現れる。この構文における動作主名詞句の表し方には、以下の三通りの方法が観察される。

[a] 属格標識 yɛ̂ による動作主の標示
[b] 下降調による動作主の標示
[c] 主格による動作主の標示

[a] は、属格標識 yɛ̂ を用いて動作主を表す方法である。この方法では属格の動作主名詞句が ʔă-V 名詞を修飾する形式をとる。以下のような例である。

(53) ŋà ʔăphè yɛ̂ ʔă-yaiʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG father GEN NMLZ-beat receive yâ REAL
「私は父に殴られた」

(54) θù màuNmàuN yɛ̂ ʔă-θaʔ khàN yâ dɛ̀.
3SG PSN GEN NMLZ-kill receive yâ REAL
「彼はマウンマウンに殺された」

[b] は、動作主名詞句の語末音節の声調を下降調にして動作主を表す方法である。ビルマ語において、この種の下降調への変調は属格標識 yɛ̂ と同じ機能を持つ。したがって、[b] の方法は先に見た [a] の方法と本質的には同等であるといえる。[b] の方法により標示された動作主を持つ例には以下のような例がある。

(55) ŋà ʔăphê ʔă-yaiʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG father.GEN NMLZ-beat receive yâ REAL
「私は父に殴られた」

(56) θù màuNmâuN ʔă-θaʔ khàN yâ dɛ̀.
3SG PSN.GEN NMLZ-kill receive yâ REAL
「彼はマウンマウンに殺された」

[c] は、動作主が何の標識も伴わずに ʔă-V 名詞の直前に現れる例である。本稿では、この種の格標識を伴わずに出現する名詞句を主格で現れる名詞句と呼ぶことにする。以下のような例が観察される。

(57) ŋà khwé ʔă-kaiʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG dog NMLZ-bite receive yâ REAL
「私は犬に噛まれた」

(58) ŋà ká ʔă-taiʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG car NMLZ-hit receive yâ REAL
「私は車にひかれた」(岡野 2009:137 一部改変)

以上、動作主の標示方法として [a] から [c] を挙げた。これらの動作主の標示方法は等質というわけではない。以下のように、置き換えが不可能である場合があるという事実がそれを示唆している。

(59) ŋà θù yɛ̂ ʔă-taiʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG 3SG GEN NMLZ-hit receive yâ REAL
「私は彼にぶつかられた」

(60)*ŋà　ká　yɛ̂　ʔă-taiʔ　khàN　yâ dɛ̀.
1SG car GEN NMLZ-hit receive yâ REAL
「私は車にひかれた」

(61) ŋà　θû　ʔă-kaiʔ　khàN　yâ dɛ̀.
1SG 3SG.GEN NMLZ-bite receive yâ REAL
「私は彼に噛まれた」

(62)*ŋà　khwê　ʔă-kaiʔ　khàN　yâ dɛ̀.
1SG dog.GEN NMLZ-bite receive yâ REAL
「私は犬に噛まれた」

(63) ŋà　lù　ʔă-móuN　khàN　yâ dɛ̀.
1SG person NMLZ-hate receive yâ REAL
「私はひとに嫌われた」(Okell and Allott 2001:29 一部改変)

(64)*ŋà　ʔɛ́dì lù　ʔă-móuN　khàN　yâ dɛ̀.
1SG that person NMLZ-hate receive yâ REAL
「私はその人に嫌われた」

以下、この使い分けに関して述べ、[a] および [b] の方法の使い分けには動作主の有生性が関与的であり、一方、[c] の方法は動作主の指示性が関与的であるという考えを示す。

まず、[a] の方法は基本的に動作主が人間であれ動物であれ、その動作主を標示することが可能である。ただし、動作主が動物である場合、その動作主を [a] の方法によって標示するとやや不自然であると判断されることもある。また、[a] の方法により無生物の動作主を標示すると容認不可能であると判断される。

(65) ŋà　θù　yɛ̂　ʔă-kaiʔ　khàN　yâ dɛ̀.
1SG 3SG GEN NMLZ-bite receive yâ REAL
「私は彼に噛まれた」

(66) ŋà　khwé yɛ̂　ʔă-kaiʔ　khàN　yâ dɛ̀.
1SG dog　GEN NMLZ-bite receive yâ REAL
「私は犬に噛まれた」

(67)*ŋà　ká　yɛ̂　ʔă-taiʔ　khàN　yâ dɛ̀.
1SG car GEN NMLZ-hit receive yâ REAL
「私は車にひかれた」

一方、[b] の方法で標示可能な動作主は人間名詞に限られる。これは受動構文にのみ見られる制約なのではない。下降調により属格を標示することができるのは人間名詞のみであり、動物などの非人間名詞はそもそも下降調を用いて属格を標示することができないためである (e.g., *khwê chìdauʔ (dog.GEN-leg)「犬の足」、*kâ béiɴ (car.GEN-wheel)「車のタイヤ」)。以下の例に示すとおりである。

(68) ŋà　θû　　ʔă-kaiʔ　khàɴ　yâ dɛ̀.
1SG 3SG.GEN NMLZ-bite receive yâ REAL
「私は彼に噛まれた」

(69)*ŋà　khwê　ʔă-kaiʔ　khàɴ　yâ dɛ̀.
1SG dog.GEN NMLZ-bite receive yâ REAL
「私は犬に噛まれた」

(70)*ŋà　kâ　　ʔă-taiʔ　khàɴ　yâ dɛ̀.
1SG car.GEN NMLZ-hit receive yâ REAL
「私は車にひかれた」

以上の議論をまとめると、次表のようになる。

表 1　[a] および [b] の方法による動作主の標示法

	人間	動物	無生物
属格 yɛ̂	yes	yes	no
下降調	yes	no	no

[a] および [b] の方法には動作主の有生性が関与的であったが、[c] の方法は動作主の有生性ではなく、動作主の指示性が関与的であるように思われる。以下の例に示すとおり、[c] の方法による標示は動作主が人間であれ動物であれ無生物であれ可能であるため、[c] の標示法に有生性が関与するとは考えられない。

(71) ŋà　lù　　ʔă-móuɴ　khàɴ　yâ dɛ̀.
1SG person NMLZ-hate receive yâ REAL
「私はひとに嫌われた」(Okell and Allott 2001:29 一部改変)

(72) ŋà　khwé ʔă-kaiʔ　khàɴ　yâ dɛ̀.
1SG dog　NMLZ-bite receive yâ REAL
「私は犬に噛まれた」

(73) ŋà ká ʔă-taiʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG car NMLZ-hit receive yâ REAL
「私は車にひかれた」

[c] の標示法の使い分けに関与的であるのは、動作主の指示性であると思われる。次の例を上記の例と比較されたい。

(74)*ŋà ʔɛ́dì lù ʔă-móuN khàN yâ dɛ̀.
1SG that person NMLZ-hate receive yâ REAL
「私はその人に嫌われた」

(75)*ŋà ʔɛ́dì khwé ʔă-kaiʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG that dog NMLZ-bite receive yâ REAL
「私はその犬に噛まれた」

(76)*ŋà ʔɛ́dì ká ʔă-taiʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG that car NMLZ-hit receive yâ REAL
「私はその車にひかれた」

このように、指示性が高い名詞句は、[c] の方法では標示することができず、上述の [a] または [b] の方法により標示されなければならない。以下の例に示すとおりである。

(77) ŋà ʔɛ́dì lù yɛ̂ ʔă-móuN khàN yâ dɛ̀.
1SG that person GEN NMLZ-hate receive yâ REAL
「私はその人に嫌われた」

(78) ŋà ʔɛ́dì khwé yɛ̂ ʔă-kaiʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG that dog GEN NMLZ-bite receive yâ REAL
「私はその犬に噛まれた」

なお、上述のとおり、動作主が無生物の場合は [a] および [b] の方法により標示することが不可能であるため、無生物であり、かつ、指示性が高い動作主は、受動構文の動作主として現れること自体が不可能である。以下の例を参照されたい。

(79)*ŋà ʔɛ́dì ká yɛ̂ ʔă-taiʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG that car GEN NMLZ-hit receive yâ REAL
「私はその車にひかれた」

以上示したとおり、受動構文の動作主の標示には動作主の有生性および指示性が関与的であり、受動構文における動作主の標示法は非常に複雑であるが、これまでの議論を総合すると次表のようになる (括弧内の数字は根拠となる例の番号を示し、*は容認不可能であることを表す)。

表 2　受動構文における動作主の標示法

	人間		動物		無生物	
	＋指示的	－指示的	＋指示的	－指示的	＋指示的	－指示的
属格 yɛ̂	(77)	(80)	(78)	(66)	*(79)	*(67)
下降調	(55)	(81)	*(82)	*(69)	*(83)	*(84)
主格	*(74)	(71)	*(75)	(72)	*(76)	(73)

上表を埋める上で必要であり、上記の例にまだ現れていない組み合わせを含む例を以下に補充しておく。

(80) ŋà　lù　　yɛ̂　ʔă-móuɴ　khàɴ　yâ dɛ̀.
1SG person GEN NMLZ-hate receive yâ REAL
「私はひとに嫌われた」

(81) ŋà　lû　　ʔă-móuɴ　khàɴ　yâ dɛ̀.
1SG person.GEN NMLZ-hate receive yâ REAL
「私はひとに嫌われた」

(82)*ŋà　ʔɛ́dì khwê　ʔă-kaiʔ　khàɴ　yâ dɛ̀.
1SG that dog.GEN NMLZ-bite receive yâ REAL
「私はその犬に噛まれた」

(83)*ŋà　ʔɛ́dì kâ　ʔă-taiʔ　khàɴ　yâ dɛ̀.
1SG that car.GEN NMLZ-hit receive yâ REAL
「私は車にひかれた」

(84)*ŋà　kâ　ʔă-taiʔ　khàɴ　yâ dɛ̀.
1SG car.GEN NMLZ-hit receive yâ REAL
「私は車にひかれた」

以上、受動構文における動作主の表し方には、三通りの方法があることを見た。これらの方法のうち、[c] の方法で動作主が標示される場合、一音節であるにも関わらず、ʔă-V 名詞を形成する名詞化接頭辞 ʔă- は脱落しうる。言い換えれば、[a] および [b] の方法で動作主が標示される場合は、名詞化接頭辞 ʔă- は脱落しない。この点は以下に示す例により実証される。

(85) ŋà lù ʔă-móuN khàN yâ dɛ̀.
1SG person NMLZ-hate receive yâ REAL
「私はひとに嫌われた」(Okell and Allott 2001:29 一部改変)

(86) ŋà lù **móuN** khàN yâ dɛ̀.
1SG person hate receive yâ REAL
「私はひとに嫌われた」

(87) ŋà khwé ʔă-kaiʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG dog NMLZ-bite receive yâ REAL
「私は犬に噛まれた」

(88) ŋà khwé **kaiʔ** khàN yâ dɛ̀.
1SG dog bite receive yâ REAL
「私は犬に噛まれた」

(89) ŋà ká ʔă-taiʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG car NMLZ-hit receive yâ REAL
「私は車にひかれた」

(90) ŋà ká **taiʔ** khàN yâ dɛ̀.
1SG car hit receive yâ REAL
「私は車にひかれた」

(91) ŋà ʔăphè yɛ̂ ʔă-yaiʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG father GEN NMLZ-beat receive yâ REAL
「私は父に殴られた」

(92)*ŋà ʔăphè yɛ̂ yaiʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG father GEN beat receive yâ REAL
「私は父に殴られた」

(93) ŋà ʔăphê ʔă-yaiʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG father.GEN NMLZ-beat receive yâ REAL
「私は父に殴られた」

(94)*ŋà ʔăphê yaiʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG father.GEN beat receive yâ REAL
「私は父に殴られた」

5.3　三項動詞の ʔă-V 名詞の対象や着点

以下の (95) において、ʔă-V 名詞の直前に現れる名詞句 yízásà「恋文」は、三項動詞の ʔă-V 名詞の対象 (theme) に相当する。これは、pé「与える」という三項動詞の 2 つの目的語のうち一方が、ʔă-V 名詞の直前に現われているものと考えられる。意味的に対応する能動文の例を (96) に示しておく。

(95) ŋà　yízásà　ʔă-pé　khàN　yâ dɛ̀.
1SG love.letter NMLZ-give receive yâ REAL
「私は恋文を渡された」

(96) θù　ŋâ　gò　yízásà　pé　dɛ̀.
3SG 1SG ACC love.letter give REAL
「彼は私に恋文を渡した」

この種の名詞句が ʔă-V 名詞の直前に出現する場合、語幹動詞が一音節であるにも関わらず、ʔă-V 名詞を形成する名詞化接頭辞 ʔă- の脱落が起こりうる。以下の例を参照されたい。

(97) ŋà　yízásà　**pé**　khàN　yâ dɛ̀.
1SG love.letter give receive yâ REAL
「私は恋文を渡された」

以上のような、三項動詞の対象に相当する名詞句が ʔă-V 名詞の直前に現れる例としては、他にも以下のような例が観察される。

(98) ŋà　shé　ʔă-thó　khàN　yâ dɛ̀.
1SG medicine NMLZ-pierce receive yâ REAL
「私は注射された」

(99) ŋà　dăzeiʔ ʔă-khaʔ　khàN　yâ dɛ̀.
1SG mark　NMLZ-stamp receive yâ REAL
「私はレッテルを貼られた」

(100) ŋà　bóuN ʔă-cɛ́　khàN　yâ dɛ̀.
1SG bomb NMLZ-scatter receive yâ REAL
「私は爆撃された」

(101) ŋà　yè　ʔă-pɛʔ　khàN　yâ dɛ̀.
1SG water NMLZ-pour receive yâ REAL
「私は水を掛けられた」

(102) ŋà mí ʔă-ɕô khàN yâ dɛ̀.
1SG fire NMLZ-burn receive yâ REAL
「私は火をつけられた」

(103) ŋà myiʔtà ʔă-pô khàN yâ dɛ̀.
1SG love NMLZ-send receive yâ REAL
「私は祈りを捧げられた」

ʔă-V 名詞の直前に現れる三項動詞目的語の意味役割は、以上に例示したような対象だけではなく、以下の例のように三項動詞の着点 (goal) に相当する名詞句である場合も観察される。

(104) ŋà thàuN ʔă-châ khàN yâ dɛ̀.
1SG jail NMLZ-drop receive yâ REAL
「私は投獄された」

(105) ŋà yè ʔă-hniʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG water NMLZ-sink receive yâ REAL
「私は水に沈められた」

これらの例に関しても、語幹動詞が一音節であるにも関わらず、ʔă-V 名詞を形成する名詞化接頭辞 ʔă- の脱落が起こりうる。以下の例に示すとおりである。

(106) ŋà shé **thó** khàN yâ dɛ̀.
1SG medicine pierce receive yâ REAL
「私は注射された」

(107) ŋà dăzeiʔ **khaʔ** khàN yâ dɛ̀.
1SG mark stamp receive yâ REAL
「私はレッテルを貼られた」

(108) ŋà bóuN **cɛ́** khàN yâ dɛ̀.
1SG bomb scatter receive yâ REAL
「私は爆撃された」

(109) ŋà yè **pɛʔ** khàN yâ dɛ̀.
1SG water pour receive yâ REAL
「私は水を掛けられた」

(110) ŋà mí **ɕô** khàN yâ dɛ̀.
1SG fire burn receive yâ REAL
「私は火をつけられた」

(111) ŋà myiʔtà **pô** khàN yâ dɛ̀.
1SG love send receive yâ REAL
「私は祈りを捧げられた」

(112) ŋà thàuN **châ** khàN yâ dɛ̀.
1SG jail drop receive yâ REAL
「私は投獄された」

(113) ŋà yè **hniʔ** khàN yâ dɛ̀.
1SG water sink receive yâ REAL
「私は水に沈められた」

ただし、以下の例に示すとおり、固有名詞が ʔă-V 名詞の直前に現れる場合は、この接頭辞 ʔă- の脱落は起こらないようである。

(114) θù ʔìnsɛ̀iN ʔă-pô khàN yâ dɛ̀.
3SG PLN NMLZ-send receive yâ REAL
「彼はインセイン刑務所に送られた」

(115)*θù ʔìnsɛ̀iN pô khàN yâ dɛ̀.
3SG PLN send receive yâ REAL
「彼はインセイン刑務所に送られた」

なお、接頭辞 ʔă- の脱落とは無関係ではあるが、本節で扱ったタイプの文では、基本的に、動作主を明示することはできない。動作主を明示すると、極めて不自然な文である判断される。以下の例に示すとおりである。

(116) ʔŋà yízásà θù yɛ̂ ʔă-pé khàN yâ dɛ̀.
1SG love.letter 3SG GEN NMLZ-give receive yâ REAL
「私は彼に恋文を渡された」

(117) ʔŋà θù yɛ̂ yízásà ʔă-pé khàN yâ dɛ̀.
1SG 3SG GEN love.letter NMLZ-give receive yâ REAL
「私は彼に恋文を渡された (の意味では不自然)」

5.4 主語の所有物

以下の (118) においては、ʔă-V 名詞の直前に現れる名詞句は、主語の「所有物」に相当する (所有物には身体部位も含まれる)。意味的に対応する能動文を (119) に例示する。

(118) ŋà lɛʔ ʔă-phyaʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG hand NMLZ-cut receive yâ REAL
「私は手を切られた」

(119) θù ŋâ lɛʔ kò phyaʔ tɛ̀.
3SG 1SG.GEN hand ACC cut REAL
「彼は私の手を切った」

この種の例では、語幹動詞が一音節であるにも関わらず、ʔă-V 名詞の名詞化接頭辞 ʔă- が脱落しうる。以下に示すとおりである。

(120) ŋà lɛʔ **phyaʔ** khàN yâ dɛ̀.
1SG hand cut receive yâ REAL
「私は手を切られた」

ʔă-V 名詞の直前に主語の所有物に相当する名詞句が現れる例として、他にも次のような例が観察される (なお、(125) と (126) のように、所有物には抽象物も含まれる)。

(121) ŋà ŋwè ʔă-θéiN khàN yâ dɛ̀.
1SG money NMLZ-confiscate receive yâ REAL
「私は金を没収された」

(122) ŋà kòunbǎnì ʔă-pàinsí khàN yâ dɛ̀.
1SG company NMLZ-own receive yâ REAL
「私は会社を乗っ取られた」

(123) ŋà zǎbìN ʔă-hŋaʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG hair NMLZ-cut receive yâ REAL
「私は髪を切られた」

(124) ŋà gáuN ʔă-yaiʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG head NMLZ-beat receive yâ REAL
「私は頭を殴られた」

(125) ŋà bàθàyé ʔă-phîhneiʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG religion NMLZ-oppress receive yâ REAL
「私は宗教を抑圧された」

(126) ŋà khǎyíθwálàgwîN ʔă-peiʔpìN khàN yâ dɛ̀.
1SG entry.permission NMLZ-prevent receive yâ REAL
「私は入国を妨げられた」

以上例示した文においても、語幹が一音節であるにも関わらず、ʔă-V 名詞の名詞化接頭辞 ʔă- が脱落しうる。以下に示すとおりである。

(127) ŋà ŋwè **θéiɴ** khàɴ yâ dɛ̀.
1SG money confiscate receive yâ REAL
「私は金を没収された」

(128) ŋà zăbìɴ **hɲaʔ** khàɴ yâ dɛ̀.
1SG hair cut receive yâ REAL
「私は髪を切られた」

(129) ŋà gáuɴ **yaiʔ** khàɴ yâ dɛ̀.
1SG head beat receive yâ REAL
「私は頭を殴られた」

ところで、名詞化接頭辞 ʔă- の脱落とは無関係ではあるが、上述したような文は、日本語 (松下 1930、工藤 1990、Shibatani 1990、仁田 1992、)、朝鮮語 (李 1979、Shibatani 1990、鷲尾 1997、生越 2008、鷲尾 2008)、モンゴル語 (梅谷 2008、鷲尾 2008)、漢語 (Shibatani 1990、鷲尾 2008) などにも観察され、「所有者受動」や「持ち主の受身」などと呼ばれている。本稿においても、本節において例示してきたビルマ語の例を所有者受動文と呼ぶことにする。

ビルマ語の所有者受動文は日本語の所有者受動文ほど生産的に形成することができない。所有者受動文の許容範囲が日本語より限定的であることは、朝鮮語やモンゴル語の所有者受動文にも当てはまる (生越 2008、梅谷 2008)。ビルマ語の所有者受動文の許容範囲が限定的であることは次の例によって示される。次の文で ʔă-V 名詞の直前に現れる名詞句は主語の所有物であると考えられるが、この文は容認度が低い不自然な文であると判断される。

(130) ʔŋà ʔeiʔ ʔă-kàɴ khàɴ yâ dɛ̀.
1SG bag NMLZ-kick receive yâ REAL
「私は鞄を蹴られた」

このように、ビルマ語の所有者受動文は許容範囲が限定的であり、主語の所有物であればどのような場合でも成立可能であるわけではない。では、どのような場合に所有者受動文が成立するのであろうか。本節の残りの部分ではこの問題について考察を行う。

第一に、所有物が身体部位である場合は、所有者受動文の容認度が高いといえる。例は (118)、(124)、(131)、(133) などの例がある。所有物が身体部位の場合に所有者受動文が成立しやすいという事実は様々な言語に観察されるものである。この特徴は、例えば、朝鮮語 (Shibatani 1990、生越 2008)、モンゴル語 (梅谷 2008)、漢語 (Shibatani 1990) などの所有者受動文にも当てはまることが指摘されている。

このように、ビルマ語において所有物が身体部位である所有者受動文の成立条件には問題がないのであるが、所有物がものである場合、所有者受動文の成立条件が複雑化する。まず、以

下の各ミニマルペアを比較すると、所有物がものである所有者受動文は容認度が低いことが分かる。

(131) ŋà chìdauʔ ʔă-níɴ khàɴ yâ dɛ̀.
1SG foot NMLZ-tread receive yâ REAL
「私は足を踏まれた」

(132) ʔŋà sàʔouʔ ʔă-níɴ khàɴ yâ dɛ̀.
1SG book NMLZ-tread receive yâ REAL
「私は本を踏まれた」

(133) ŋà baiʔ ʔă-yaiʔ khàɴ yâ dɛ̀.
1SG belly NMLZ-beat receive yâ REAL
「私は腹を殴られた」

(134) ʔŋà ʔeiʔ ʔă-yaiʔ khàɴ yâ dɛ̀.
1SG bag NMLZ-beat receive yâ REAL
「私は鞄を殴られた」

このように、所有物がものであるとき、所有者受動構文が許容されにくい場合があるが、このような例がまったく不可能であるというわけではない。例えば、以下の例は容認可能であると判断される。

(135) ŋà ŋwè ʔă-θéiɴ khàɴ yâ dɛ̀.
1SG money NMLZ-confiscate receive yâ REAL
「私は金を没収された」

(136) ŋà ʔèiɴ ʔă-phyɛʔ khàɴ yâ dɛ̀.
1SG house NMLZ-break receive yâ REAL
「私は家を破壊された」

以上の例に示すとおり、所有物がものである所有者受動文には容認度が高いものと低いものがあるが、本稿では、所有物がものである所有者受動文の成立条件として、以下のふたつの条件が組み合わさる場合に、この種の所有者受動文が成立しやすいのではないかと考えたい。それは、i) 所有物が所有者にとって重要なものであり、かつ、ii) それが状態変化を被る場合である。この考えの根拠となる例を以下に示す。

次の例は、所有物の重要性が低く、また、所有物は状態変化も被らない。この例の容認度は低い。

(137) ʔŋà tù ʔă-níN khàN yâ dɛ̀.
1SG chopstick NMLZ-tread receive yâ REAL
「私は箸を踏まれた」

次の例は、所有物の重要性が低いが、所有物が状態変化を被る。この例の容認度は低い。

(138) ʔŋà tù ʔă-chó khàN yâ dɛ̀.
1SG chopstick NMLZ-break receive yâ REAL
「私は箸を折られた」

次の例は、所有物の重要性が高いが、所有物は状態変化を被らない。この例の容認度は低い。

(139) ʔŋà ká ʔă-kàN khàN yâ dɛ̀.
1SG car NMLZ-kick receive yâ REAL
「私は車を蹴られた」

次の例は、(139) と同様に車が所有物であるが、この文の容認度は高い。この例は、所有物の重要性が高く、かつ、所有物が状態変化を被る点に特徴がある。

(140) ŋà ká ʔă-phyɛʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG car NMLZ-break receive yâ REAL
「私は車を破壊された」

以上をまとめると次表のようになる。

表 3　所有者がものである所有者受動文の容認度

	− 重要	＋ 重要
− 状態変化	低 (137)	低 (139)
＋ 状態変化	低 (138)	高 (140)

以上に例示したとおり、所有物がものである所有者受動文は、所有物が所有者にとって重要なものであり、かつ、それが状態変化を被る場合に成立しやすいようである。この理由は、おそらく、強い被害の意味の感じ取りやすさによるものと思われる。重要なものに行為を受ける場合のほうが、重要ではないものに行為を受ける場合よりも被害の意味を感じ取りやすく、また、所有物が状態変化を被る方が、所有物が状態変化を被らないよりも被害の意味が感じ取りやすいと考えられる。このように、被害の意味が強い場合にこの種の所有者受動文が成立しやすいものと考えられる。

以上、所有物がものである所有者受動文が成立する条件として、2 つの条件が組み合わさった場合を想定したが、多くの例にこのことが当てはまるかどうかに関しては、まだ疑問の余地がある。というのも、所有物がものである所有者受動文の容認性判断は、話者によってゆれが観

察されるうえに、同一話者であっても、同一の文に対して毎回同じ判断を与えるわけでもないためである。このように容認度に差が出るのは、所有物にものを持つこの種の所有者受動文の使用頻度が低いことに起因すると思われる。また、話者がどのような文脈を想定するかによっても判断にゆれが出るものと思われる。

ところで、上述したとおり、所有物にものを取る所有者受動文には、容認度の低い例もあるのだが、そのような例であっても、以下のように所有物の所有者を明確にして表現すれば、容認度が増すことが多い。この事実は以下のコントラストに現れる (なお、このようにして表現される場合、この文の主語は通常、省略される。これは所有者を二度いうことが冗長であるためであると思われる)。

(141) ʔŋà　ʔeiʔ ʔă-kàɴ　　khàɴ　yâ dɛ̀.
　1SG bag　NMLZ-kick receive yâ REAL
　「私は鞄を蹴られた」

(142) (ŋà) ŋâ　　ʔeiʔ ʔă-kàɴ　　khàɴ　yâ dɛ̀.
　1SG 1SG.GEN bag　NMLZ-kick receive yâ REAL
　「(私は) 私の鞄を蹴られた」

(143) ʔŋà　sàʔouʔ ʔă-níɴ　　khàɴ　yâ dɛ̀.
　1SG book　NMLZ-tread receive yâ REAL
　「私は本を踏まれた」

(144) (ŋà) ŋâ　　sàʔouʔ ʔă-níɴ　　khàɴ　yâ dɛ̀.
　1SG 1SG.GEN book　NMLZ-tread receive yâ REAL
　「(私は) 私の本を踏まれた」

このように、所有者を明示すると容認度が上がることが多いのであるが、その理由は、所有者を明示することによって、それだけ直接的な被害の意味が感じ取りやすくなるためであると思われる。先述のとおり、所有物が身体部位である所有者受動文は成立しやすいが、この例も身体部位に直接的に影響を被るために直接的な被害の意味が感じ取りやすく、所有者受動文が成立しやすいのかもしれない。ただし、現時点においては、被害の直接性の重要性を示す証拠は乏しいため、この点に関する考えは憶測の域を出ない。

以上いくつかの観点から所有物がものである所有者受動文の成立条件に関して考察してきたが、この種の文の成立条件は非常に複雑であり、現時点ではこの種の文の成立条件に関する問題を完全に解決することができない。この点に関しては今後の研究によるさらなる言語事実の積み上げが必要である。

ところで、日本語の所有者受動文における所有物は、「私は娘を殺された」という文のように、有生物 (有情者) であることも可能である。一方、ビルマ語の場合、所有物に人間を取る例は全く容認されない。以下の例に示すとおりである。

(145)*ŋà　θǎmí　　ʔǎ-θaʔ　　khàN　yâ dɛ̀.
　　1SG daughter NMLZ-kill receive yâ REAL
　　「私は娘を殺された」

なお、本節で見てきたビルマ語の所有者受動文は、すべて「被害」の意味を表す受動構文であった。4.2 節で示したとおり、この構文が「利益・恩恵」の意味を表す場合がある。以下に例を示すとおり、このような意味を表す受動構文でも所有者受動文を形成することは可能である。このような文の成立条件は、上述の説明では説明することができない。この種の文の成立条件については今後、検討する必要がある。

(146) θû　ʔǎhlâ　gò　chímwáN khàN　yâ dɛ̀.
　　3SG beauty ACC praise　　receive yâ REAL
　　「(彼女は) 彼女の美しさをほめられた」(Okell and Allott 2001:29)

(147) dì　sháuNbá gò　mɛʔgǎzíN dɛ́　　hmà ʔǎ-phɔ̀pyâ　khàN　yâ dɛ̀.
　　this prose　ACC magazine inside LOC NMLZ-state receive yâ REAL
　　「(私は) この散文を雑誌に載せられた」

最後に、所有受動構文における動作主の標示方法に関して若干述べておく。以下の例に示すとおり、一般的に、この種の文で動作主を標示すると、不自然であると判断され、容認度が低い。

(148) ʔŋà　θù　yɛ̂　lɛʔ　ʔǎ-phyaʔ　khàN　yâ dɛ̀.
　　1SG 3SG GEN hand NMLZ-cut receive yâ REAL
　　「私は彼に手を切られた」

(149) ʔŋà　lɛʔ　θù　yɛ̂　ʔǎ-phyaʔ　khàN　yâ dɛ̀.
　　1SG hand 3SG GEN NMLZ-cut receive yâ REAL
　　「私は彼に手を切られた」

岡野 (2009:129) においてもこの種の文の容認度がかなり低いことが指摘されており、その理由として、(148) の θù yɛ̂ lɛʔ ʔǎ-phyaʔ の部分に関して、θù yɛ̂ ʔǎ-phyaʔ「彼の切ること」ではなく、θù yɛ̂ lɛʔ「彼の手」の解釈の方が優先されるためであるかもしれないと述べられている。

以上のように、一般的には、所有者受動文に動作主が現れると不自然な文となるのであるが、次の文のように動作主名詞句が主格で現れる例では、動作主が現れることがある。以下のような例は自然であると判断される。

(150) ŋà　chìdauʔ khwé ʔǎ-kaiʔ　　khàN　yâ dɛ̀.
　　1SG leg　　dog　NMLZ-bite receive yâ REAL
　　「私は足を犬に噛まれた」

(151) ŋà ʔeiʔ θǎkhó ʔǎ-khó khàN yâ dɛ̀.
1SG bag thief NMLZ-steal receive yâ REAL
「私は鞄を泥棒に盗まれた」

(148) に示すとおり、動作主を明示することができない所有者受動文があるが、動作主も含めて同様の意味を表現したい場合は、そもそも受動構文を用いない。例えば、(148) の文のかわりに、次のような文を用いて同種の意味が表現される。

(152) θù ŋâ lɛʔ kò phyaʔ tɛ̀.
3SG 1SG.GEN hand ACC cut REAL
「彼が私の手を切った」

5.5 熟語の名詞要素

本節では、ʔǎ-V 名詞の直前に、熟語を構成する名詞要素が現れる例を見る。以下の例では、ʔǎ-V 名詞の直前に seiʔ「心」という名詞句が現れている。この名詞句は、動作主でも、三項動詞の対象でも、主語の所有物でもない。

(153) ŋà seiʔ ʔǎ-shó khàN yâ dɛ̀.
1SG mind NMLZ-be.bad receive yâ REAL
「私は怒られた」

この文に意味的に対応する能動文は以下の文である。

(154) θù ŋâ gò seiʔ shó dɛ̀.
3SG 1SG ACC mind be.bad REAL
「彼は私を怒った」

(154) では、seiʔ「心」と shó「悪い」が熟語を成しており、この文に意味的に対応する受動構文である (153) においては、この熟語の seiʔ「心」が ʔǎ-V 名詞の直前に現れているものと考えられる。

なお、この seiʔ「心」と shó「悪い」の組み合わせを N+V 型の複合動詞と考えることはできない。なぜならば、以下の例に示すとおり、seiʔ「心」と shó「悪い」は tàuN「さえ」のような「語」に近い統語的要素をその内部に含むことができるためである。複合動詞は一般的にその内部に統語的要素を含むことができないため、seiʔ「心」と shó「悪い」を N+V 型複合動詞と見なすことはできない。

(155) θù seiʔ tàuN shó dɛ̀.
3SG mind even be.bad REAL
「彼は怒りさえした」

この事実を考慮し、本稿では、(153) のような例は、seiʔ「心」と shó「悪い」というふたつの語からなる熟語的表現が ʔă-V 名詞の V となるとき、名詞要素が ʔă-V 名詞の直前に現れる例であると考える。

以上見たような例においても、名詞化接頭辞 ʔă- は脱落しうる。以下の例に示すとおりである。

(156) ŋà seiʔ **shó** khàN yâ dɛ̀.
1SG mind be.bad receive yâ REAL
「私は怒られた」

同様の例は他にもある。以下の例では、ʔă-V 名詞の直前に dɔ́「怒り」という名詞句が出現しているが、この例も前節までで見た分類に収まりきらない。ʔă-V 名詞の直前に現れる dɔ́「怒り」は dɔ́「怒り」と pwâ「膨らむ」から成る熟語の名詞要素が現れているものと考えられる。

(157) ŋà dɔ́ ʔă-pwâ khàN yâ dɛ̀.
1SG anger NMLZ-swell receive yâ REAL
「私は怒られた」

次の例では、ʔă-V 名詞の直前に ʔăthìN「考え」という名詞句が出現しているが、この例も前節までで見た分類に収まりきらない。この例は ʔăthìN「考え」と θé「小さい」から成る熟語の名詞要素が ʔă-V 名詞の直前に現れているものと考えられる。

(158) ŋà ʔăthìN ʔă-θé khàN yâ dɛ̀.
1SG thinking NMLZ-be.small receive yâ REAL
「私は見下された」

これらのように、ʔă-V 名詞の直前に熟語を構成する名詞要素が現れる例でも、名詞化接頭辞 ʔă- は脱落しうる。以下の例に示すとおりである。

(159) ŋà dɔ́ **pwâ** khàN yâ dɛ̀.
1SG anger swell receive yâ REAL
「私は怒られた」

(160) ŋà ʔăthìN **θé** khàN yâ dɛ̀.
1SG thinking be.small receive yâ REAL
「私は見下された」

5.6 道具を表す名詞句

岡野 (2009:136) では、ʔă-V 名詞の直前に道具の意味役割を持つ名詞句が現れる以下のような例が観察されることが指摘されている。

(161) kòsó hà gɛ́ ʔă-pyiʔ khàN yâ dɛ̀.
PSN TOP stone NMLZ-throw receive yâ REAL
「コーソーは石を投げられた」(岡野 2009:137 一部改変)

この文に意味的に対応する能動文は以下のとおりである。

(162) θù kòsó gò gɛ́ nɛ̂/*ø pyiʔ tɛ̀.
3SG PSN TOP stone COM/ø throw REAL
「彼はコーソーに石を投げた」(岡野 2009:137 一部改変)

対応する能動文においては道具は必ず共格で標示されなければならないが、意味的に対応する受動構文の場合では、道具は主格で現れうる (共格で標示されてもよい)。

この種の ʔă-V 名詞の直前に道具が現れる例においても ʔă-V 名詞の名詞化接頭辞 ʔă- は脱落しうる。以下の例を参照されたい。

(163) kòsó hà gɛ́ **pyiʔ** khàN yâ dɛ̀.
PSN TOP stone throw receive yâ REAL
「コーソーは投石を受けた」(岡野 2009:137 一部改変)

類例として以下のような例を挙げることができる。

(164) ŋà dá ʔă-thó khàN yâ dɛ̀.
1SG knife NMLZ-stab receive yâ REAL
「私は刃物で刺された」

(165) ŋà θănaʔ ʔă-pyiʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG gun NMLZ-hit receive yâ REAL
「私は銃で撃たれた」

(166) ŋà dăgá ʔă-hŋaʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG door NMLZ-interleave receive yâ REAL
「私はドアに挟まれた」

これらの例でも接頭辞 ʔă- の脱落が起こりうる。以下に例示するとおりである。

(167) ŋà dá **thó** khàN yâ dɛ̀.
1SG knife stab receive yâ REAL
「私は刃物で刺された」

(168) ŋà θănaʔ **pyiʔ** khàN yâ dɛ̀.
1SG gun hit receive yâ REAL
「私は銃で撃たれた」

(169) ŋà dăgá **hɲaʔ** khàN yâ dɛ̀.
1SG door interleave receive yâ REAL
「私はドアに挟まれた」

5.7 起点を表す名詞句

以下の例では、ʔă-V 名詞の直前に起点の意味役割を持つ名詞句が現れている。

(170) ŋà cáuN ʔă-thouʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG school NMLZ-take.out receive yâ REAL
「私は学校から追い出された」

この文と意味的に対応する能動文は以下とおりである。

(171) θù ŋâ gò cáuN gânè/ø thouʔ tɛ̀.
3SG 1SG ACC school ABL/ø take.out REAL
「彼は私を学校から追い出した」

対応する能動文においては、起点は奪格または主格で現れている。(170) では、この主格の起点が ʔă-V 名詞の直前に現れているものと考えられる (起点は奪格で標示されてもよい)。

この種の ʔă-V 名詞の直前に起点が現れる例においても ʔă-V 名詞の名詞化接頭辞 ʔă- は脱落しうる。以下の例に示すとおりである。

(172) ŋà cáuN **thouʔ** khàN yâ dɛ̀.
1SG school take.out receive yâ REAL
「私は学校から追い出された」

類例としては、以下の例がある。

(173) ŋà ʔălouʔ ʔă-phyouʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG job NMLZ-take.off receive yâ REAL
「私は解雇された」

(174) ŋà ʔălouʔ **phyouʔ** khàN yâ dɛ̀.
1SG job take.off receive yâ REAL
「私は解雇された」

5.8 ʔă- が脱落した ʔă-V 名詞は直前の名詞と複合語を成すか

本節では、ʔă-V 名詞の直前に名詞要素が現れる受動構文において、接頭辞 ʔă-が脱落した場合、ʔă-V 名詞とそれに先行する名詞要素とが複合語を成すかどうかを検討する。先行研究について述べると、Okell and Allott (2001) は、この状況を ʔă-V 名詞と先行する名詞が緊密に結び

つく (closely linked) と表現しているが、この表現は曖昧である。岡野 (2009:130) では、ʔă-V 名詞の直前に所有物が現れる所有者受動文について、「名詞化接頭辞 ʔă- が脱落して、前にある名詞と複合を起こす」と述べられている。

ʔă-の脱落した ʔă-V 名詞とそれに先行する名詞要素は次の点で複合語の特徴を持つ。ビルマ語において、接頭辞 ʔă- の脱落は複合時にも起こる。Okell (1969:47–8) は、ビルマ語において、ʔă という音節が複合時に脱落する例を示している。この ʔă という音節には名詞化接頭辞 ʔă- も含まれる。以下に Okell (1969:47–8) から例を示す。

- pányàuɴ「ピンク色」← pánɴ「花」+ʔăyàuɴ「色」
- bămàgâ「ビルマ人の踊り」← bămà「ビルマ人」+ʔă-kâ「踊り (NMLZ-踊る)」
- ʔèiɴθiʔ「新宅」← ʔèiɴ「家」+ʔă-θiʔ「新 (NMLZ-新しい)」

一方、ʔă-の脱落した ʔă-V 名詞とそれに先行する名詞要素は次の点で複合語の特徴を持たない。ビルマ語の複合において、複合時に起こるもうひとつの現象として voicing sandhi を挙げることができる (Okell 1969:12–8、藪 1970:4、Nishi 1998)。これは前部要素が開音節もしくは鼻音末子音 N を持ち、かつ、後部要素の頭子音が対応する有声音を持つとき、後部要素の頭子音が有声音と交替する現象である。より具体的には、以下のようなパターンが観察される。

- p → b (e.g., păyá「パゴダ」+pwɛ́「祭り」 → păyábwɛ́「パゴダ祭り」)
- ph → b (e.g., săláuɴ「土鍋の蓋」+phóuɴ「覆う」 → săláuɴbóuɴ「土鍋の蓋」)
- θ → ð (e.g., ʔămɛ́「獲物」+θá「肉」 → ʔămɛ́ðá「牛肉」)
- t → d (e.g., sà「手紙」+taiʔ「ビル」 → sàdaiʔ「郵便局」)
- th → d (e.g., yè「水」+thwɛʔ「出る」 → yèdwɛʔ「泉」)
- c → j (e.g., lù「人」+cí「大きい」 → lùjí「大人」)
- ch → j (e.g., yè「水」+cháɴ「冷たい」 → yèjáɴ「冷水」)
- k → g (e.g., kăyìɴ「カレン人」+ʔăkâ「踊り」 → kăyìɴgâ「カレン人の踊り」)
- kh → g (e.g., khăyí「旅行」+khâ「料金」 → khăyígâ「旅費」)
- s → z (e.g., chì「足」+suʔ「はめる」 → chìzuʔ「靴下」)
- sh → z (e.g., ʔóuɴ「ココヤシ」+shì「油」 → ʔóuɴzì「椰子油」)

この交替は、名詞化接頭辞 ʔă- の脱落した ʔă-V 名詞とその直前に現れる名詞の間では起こらない。例えば、thó「挿す、刺す」という動詞は複合時に有声化を起こす (e.g., yìɴ「胸」+thó → yìɴdó「ブローチ」、shàɴ「髪」+thó → zădó「かんざし」、zăbwɛ́「机」+thó → zăbwɛ́dó「ウェイター」)。一方、ʔă- が脱落した ʔă-V 名詞とそれに先行する名詞では、同一の形態素であるにも関わらず、thó「挿す、刺す」は交替を起こさない。以下の例に示すとおりである。

(175) ŋà yìɴ ʔă-thó khàɴ yâ dɛ̀.
1SG chest NMLZ-pierce receive yâ REAL
「私は胸を刺された」

(176) ŋà yìN thó khàN yâ dɛ̀.
1SG chest pierce receive yâ REAL
「私は胸を刺された」

(177)*ŋà yìN dó khàN yâ dɛ̀.
1SG chest pierce receive yâ REAL
「私は胸を刺された」

(178) ŋà dá ʔă-thó khàN yâ dɛ̀.
1SG knife NMLZ-stab receive yâ REAL
「私は刃物で刺された」

(179) ŋà dá thó khàN yâ dɛ̀.
1SG knife stab receive yâ REAL
「私は刃物で刺された」

(180)*ŋà dá dó khàN yâ dɛ̀.
1SG knife pierce receive yâ REAL
「私は刃物で刺された」

同様に、pô 「送る」という動詞は複合時には有声化する (e.g., sà「手紙」+pô → sàbô「郵便車」)。しかし、ʔă- の脱落した ʔă-V 名詞とそれに先行する名詞では、pô「送る」は交替を起こさない。以下の例に示すとおりである。

(181) ŋà myiʔtà ʔă-pô khàN yâ dɛ̀.
1SG love NMLZ-send receive yâ REAL
「私は祈りを捧げられた」

(182) ŋà myiʔtà pô khàN yâ dɛ̀.
1SG love send receive yâ REAL
「私は祈りを捧げられた」

(183)*ŋà myiʔtà bô khàN yâ dɛ̀.
1SG love send receive yâ REAL
「私は祈りを捧げられた」

以上のように、接頭辞 ʔă- の脱落した ʔă-V 名詞とそれに先行する名詞要素の関係は両義的である。すなわち、接頭辞 ʔă- が脱落するという点では複合語と類似するが、後部要素が有声化を起こさないという点では複合語と相違する。これらの事実から、本稿では、接頭辞 ʔă- の脱落した ʔă-V 名詞とそれに先行する名詞要素とは完全には複合を成していないものと考えたい。ただし、この問題の解決にはさらなる言語事実の発掘が必要であり、現時点ではこの問題を完全に解決することができない。

6　受動構文の諸特徴

本節では、受動構文の諸特徴について述べる。具体的には、主語の有生性、主語の意志性、受動構文の使用頻度、自動詞の ʔă-V 名詞を持つ受動構文に関して考察する。

6.1　主語の有生性

Sawada (1995:176 note 14) において指摘されているとおり、ビルマ語受動構文の主語は人間名詞句に限られる。例えば、以下の例のように、受動構文の主語位置にものが置かれる例は容認されない。

(184)*dì　zəbwɛ́ ʔă-yaiʔ　　khàɴ　yâ dɛ̀.
this desk　NMLZ-beat receive yâ REAL
「この机が叩かれた」(Sawada 1995:176 note 14)

次の例は一見、上例と同様の形式を取るが容認可能であると判断される。しかしながら、この例では主語にモノが置かれているのではなく、この文の主語は hmàɴ「ガラス」ではなく、ガラスの所有者である。この文は、主語は明示されていないが、5.4 節で見た所有者受動文に相当する。

(185) hmàɴ ʔă-khwɛ́　　khàɴ　yâ dɛ̀.
glass　NMLZ-break receive yâ REAL
「(誰かが) ガラスを割られた」

受動構文の主語に基本的に人間名詞句が置かれるという上記の特徴は、この構文における述語動詞 khàɴ「受ける」の選択特性に起因すると考えられる。すなわち、動詞 khàɴ「受ける」が人間名詞句を主語に取る動詞であるため、受動構文においても人間名詞句が主語として現れると考えることができる。

以上述べたように、受動構文の主語には基本的には人間名詞句のみが立つが、次の例のように、表面上は無生物が来るという例もなくはない。このような例の主語は、国や地域、組織などの広い意味での人間に相当する名詞に限られる。

(186) myàɴmànàiɴŋàɴ nɛ̀chɛ̂　khàɴ　yâ dɛ̀.
Burma　invade receive yâ REAL
「ミャンマー国は侵略された」

(187) zégwɛʔ thɛ́　hmà ʔămyázóuɴ ʔătû　pyûlouʔ khàɴ　yâ dɛ̂
market　inside LOC most　imitation do　receive yâ REAL.ATTR
dăzeiʔ twè gâ　tòc̣ìbà　shònì fîliʔ　dô bà.
brand　PL　NOM Toshiba Sony Philips PL POLITE
「市場の中でもっとも偽造された商標は、東芝、ソニー、フィリップスです」(MT)

6.2　主語の意志性

受動構文における主語の意志性は「不可避」を表す助動詞 yâ の有無によって表される。受動構文において、助動詞 yâ が置かれない場合、その文の意味は「自ら進んで…される」という、意志性を表す意味になる。一方、これまで見てきたような、助動詞 yâ を含む受動構文の場合は、自らの意志に関わらず動作行為を受けるという意味になる。以下の (188) は水掛け祭りなどにおいて、自ら進んで水をかけられる場合に用いられる。一方、(189) は望まないにも関わらず、水をかけられ被害を被ったという場合に用いられる。

(188) ŋà　yè　pɛʔ　khàɴ　dɛ̀.
1SG water break receive REAL
「私は (自ら進んで) 水をかけられた」

(189) ŋà　yè　pɛʔ　khàɴ　yâ dɛ̀.
1SG water break receive yâ REAL
「私 (好まないのに) 水をかけられた」

Okell and Allott (2001:29) は以下のミニマルペアを提示している。

(190) θù　ʔă-phánɴ　khàɴ　dɛ̀.
3SG NMLZ-arrest receive REAL
「彼は自首した」

(191) θù　ʔă-phánɴ　khàɴ　yâ dɛ̀.
3SG NMLZ-arrest receive yâ REAL
「彼は逮捕された」

(192) θù　ʔă-ywé　khàɴ　dɛ̀.
3SG NMLZ-elect receive REAL
「彼は立候補した」

(193) θù　ʔă-ywé　khàɴ　yâ dɛ̀.
3SG NMLZ-elect receive yâ REAL
「彼は選出された」

6.3　受動構文の使用頻度

東南アジア大陸部の言語には受動構文を持たない言語が見られ、また、受動構文を有する言語であっても受動構文の使用頻度が低いことが知られている。ビルマ語でも同様であり、特に自然談話においては被害の意味を表す場合であっても受動構文が用いられないことが多いとされる (岡野 2007:130)。ビルマ語の自然談話では、次の (194) のような受動構文を用いるよりも、

(195) のような意味的に対応する能動文を用いる方が多い。このようにビルマ語受動構文の使用頻度が低い理由のひとつは、この構文が特に重要な機能を担わないことにあると思われる (7 節を参照)。

(194) ŋà khwé ʔă-kaiʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG dog NMLZ-bite receive yâ REAL
「私は犬に噛まれた」

(195) khwɛ́ ŋâ gò kaiʔ tɛ̀.
dog 1SG ACC bite REAL
「犬が私を噛んだ」

6.4 自動詞の ʔă-V 名詞

本節では、自動詞の ʔă-V 名詞を持つ受動構文について述べる。受動構文の ʔă-V 名詞になりうる動詞はその大部分が他動詞であり、(197) のような自動詞の ʔă-V 名詞を持つ受動構文は通常、容認されない。

(196) ŋà yú dɛ̀.
1SG be.mad REAL
「私は馬鹿だ」

(197)*ŋà ʔă-yú khàN yâ dɛ̀.
1SG NMLZ-be.mad receive yâ REAL
「私は馬鹿にされた」

ところが、少数の例では自動詞が ʔă-V 名詞に来ることがある。自動詞の ʔă-V 名詞を持つ受動構文の存在は Sawada (1995:176 note 14) でも指摘されている。以下の例は Sawada (1995:176 note 14) からの引用である。

(198) θù ʔă-ŋaʔ khàN yâ dɛ̀.
3SG NMLZ-be.hungry receive yâ REAL
'He suffered from hunger.'

筆者は大野 (1983) に掲載される全動詞を対象として受動構文を形成しうるか否かを調べたが、この調査により次のような自動詞が受動構文を形成しうることが判明した: ŋaʔ「飢える」shà「飢える」shíNyɛ́「貧しい、悲惨だ、苦しい」hɲɔ̀「焦げ臭い」niʔnà「苦しむ」tíNcaʔ「厳しい」ɕóuN「損する」ɲân「劣っている」ɲiʔ「汚い」θè「死ぬ」。受動構文を形成する自動詞は存在するにしても、極めてまれであるといえる。以下のような例が観察される。

(199) ŋà ʔă-shíɴyɛ́ khàɴ yâ dɛ̀.
1SG NMLZ-be.poor receive yâ REAL
「私は貧しさに苦しんだ」

(200) siʔpwɛ́ hmà siʔθá dwè ʔă-θè khàɴ laiʔ yâ dɛ̀.
war LOC soldier PL NMLZ-die receive EMPH yâ REAL
「戦争で兵士たちが死なされた」[6]

7 受動構文の機能

本節では、類型論的観点からビルマ語の受動構文の機能に関して考察し、より大きな観点から、ビルマ語の受動構文を位置付ける。

類型論的に見て、受動構文には以下のような機能が認められることが知られている。

- 動作主を背景化する機能
- 被動者を前景化する機能
- 従属節と主節の主語を統一する機能

以下、本節では、これらの機能がビルマ語受動構文にも認められるかどうかを検討し、結論として、ビルマ語受動構文がこれらのどの機能も担わないことを指摘する。

7.1 動作主を背景化する機能

Shibatani (1985:833) は動作主の背景化 (defocusing of the agent) が受動構文の最も主要な機能であると指摘している。その根拠として、Shibatani (1985) は 1) 一般的に受動構文では動作主が明示的に表されないこと；2) いくつかの言語 (フィンランド語など) で受動構文における動作主の存在が避けられること; 3) 一般的に受動化が動作主を持たない自動詞節に適用されないことを挙げている。

3.1 節で述べたように、ビルマ語受動構文においても動作主は明示されないことが多い。また、ʔă-V 名詞の前に、三項動詞の対象 (5.3 節)、主語の所有物 (5.4 節)、熟語表現の名詞要素 (5.5 節) などが生起するような例では、動作主を明示することができない場合が多い。これらの点では、受動構文は動作主を背景化しているといいうる。

しかしながら、動作主の背景化はこの構文の本質的な機能であるとはいいがたい。例えば、日本語の「北京でオリンピックが開催された」や「ビルマではビルマ語が話されている」のような文では動作主が不特定であり、これを明示させないために受動構文を用いて動作主を背景化していると考えられる。しかしながら、このような文はビルマ語では以下のように表現され、受動構文を用いると非文となる。以下の例に示すとおりである。

[6] 戦争で一番最初に殺されるために戦う兵を ʔă-θè+khàɴ+ðá (NMLZ-die+receive+man) というが、この複合語中にも自動詞の ʔă-V 名詞を持つ受動構文が含まれる。

(201) pìkíɴ hmà ʔòlàɴpiʔpwɛ́dɔ̀ gò cíɴpâ dɛ̀.
Beijing LOC Olympics ACC hold REAL
「北京でオリンピックを開催した」(直訳)

(202)*pìkíɴ hmà ʔòlàɴpiʔpwɛ́dɔ̀ ʔă-cíɴpâ khàɴ yâ dɛ̀.
Beijing LOC Olympics NMLZ-hold receive yâ REAL
「北京でオリンピックが開催された」

(203) bămàpyì hmà bămàzăgá gò pyɔ́ dɛ̀.
Burma LOC Burmese ACC speak REAL
「ビルマではビルマ語を話す」(直訳)

(204)*bămàpyì hmà bămàzăgá ʔă-pyɔ́ khàɴ yâ dɛ̀.
Burma LOC Burmese NMLZ-speak receive yâ REAL
「ビルマではビルマ語が話されている」

これらの例が示すことは、ビルマ語においては、動作主をそのまま省略することが動作主を背景化するための主要な手段であるということである。ビルマ語の受動構文は主語が人間名詞句でなければならないなどの制約があり、また、この構文は利害の意味を帯びるがために、上記の例を受動構文を用いて表現すると非文となる。ビルマ語の受動構文は動作主を背景化するために用いられているとは言いがたい。

同様に、小説 *The Catcher in the Rye* に見られる ‘only seniors were allowed to bring girls with them’ という英文は動作主が不特定であり、これを明示しないために受動構文を用いて動作主が背景化されているのであると考えられる。一方、この文の翻訳であるビルマ語文は以下の文であるが、受動構文は用いられておらず、やはり動作主をそのまま省略することにより、動作主が背景化されている。

(205) tánjícáuɴðájí dwè gò θà méiɴmâgălé dwè gò khɔ̀gwîɴ pyû dɛ̀.
senior PL ACC only girl PL ACC permision.to.call do REAL
「高学年にだけ女の子を呼ぶ許可を与えた」(lèwîɴðù)

以上の考察から、ビルマ語の受動構文は動作主を背景化する機能を担ってはおらず、ビルマ語において動作主を背景化する主要な手段は、動作主をそのまま省略する方法であると考えたい。

7.2 被動者を前景化する機能

受動構文の主要な機能として、被動者を前景化する機能があるとされる (Keenan and Dryer 2007)。受動構文を用いて被動者が前景化されるのは、被動者の有生性が動作主の有生性よりも高いなどの場合である (Dixon 1994:148)。

以下の例のとおり、ビルマ語の場合も被動者は主語位置に置かれており、被動者は前景化されているといえる。

(206) ŋà θù yɛ̂ ʔă-yaiʔ khàN yâ dɛ̀.
1SG 3SG GEN NMLZ-beat receive yâ REAL
「私は彼に殴られた」

このように、確かにビルマ語受動構文では被動者が前景化されているといえるのであるが、この構文には主語が人間名詞句でなければならないという制約があり、使用することのできる範囲が限定的である。また、この構文は利害という特殊な意味を帯びているため、命題的意味を変えない統語操作というわけではない。「私は彼に呼ばれた」という日本語文は、被動者 (受け手) を前景化するために用いられていると考えられるが、この文をビルマ語受動構文を用いて表現すると被害の意味を伴うことになる。

ビルマ語では受動構文ではなく、次の文のように、強調したい要素を文頭に持って来るという語順の変更が、被動者を前景化するための主要な方法であるとされている。岡野 (2007) によると、受動構文を用いずとも、ビルマ語では (207) のような文がすでに受け身的 (受動的) な意味を帯びているとされる。Okell and Allott (2001:8) も直接目的語が文頭に置かれるビルマ語文はしばしば英語の受動構文により翻訳することができると指摘している。Wheatley (1987) は目的語が主語よりも前に現れる文に英語の受動態の訳を与えている (岡野 2009:127 注 7)。

(207) ŋâ gò θù yaiʔ tɛ̀.
1SG ACC 3SG beat REAL
「私を彼が殴った」

以上の考察から、被動者の前景化はビルマ語受動構文の本質的な機能ではないと考えられる。

7.3 従属節と主節の主語を統一する機能

Dixon (1994) は受動と逆受動の機能のひとつとして、節連結において、pivot constraint を満たす機能があると指摘している。Dixon (1994:148) は以下のように説明を加えている ([ ] 内は筆者による)。

> one major function [of passive or antipassive] is often to feed a pivot constraint on clause combining – this can be a function of passive in a language with accusative syntax (S/A pivot) and of antipassive in one with ergative syntax (S/O pivot).

この機能は pivot を有する言語に観察されるものであるが、ビルマ語は pivotless language であり、基本的に節連結において pivot constraint を満たす必要がない。以下の例では、主節の主語が省略されているが、この主語は無文脈の状況では、「母」にも「父」にも解釈しうる。

(208) ʔămè ʔăphê gò cî bí pyàN dɛ̀.
mother father ACC see SEQ return REAL
「母が父を見て、(母が/父が) 帰った」

以下に示す実例は、ビルマ語においては文脈から推測できるのであれば、従属節と主節の主語が不統一であっても問題がないことを示している。

(209) θóuɴbéiɴkáθǎmá dwɛ̀ gò paiʔshàɴ táuɴ yìɴ tǎwɛʔ pɛ́ pé dɛ̂.
cyclo.driver PL ACC money request if half only give HS
「輪タクの運転手に、(運転手が) 料金を請求したら、半額だけ払えと言われた」(直訳)
「料金を請求されたら、輪タクの運転手に半額だけ払えって」(ʔǎŋàðá)

(210) cǎnɔ̂ ʔá (中略) táuɴbàɴ θǎphyîɴ θù hnîɴ tǎkháɴdé
1SG ACC ask because 3SG COM inside.one.room
ʔǎtù nè yâ dɔ̂ ðɛ̂ bǎwâ ðô yauʔ θwá gɛ̂ bà ðì.
together live yâ INCHO REAL.ATTR life ALL arrive go PAST POLITE REAL
「(彼が) 私に頼んだので (私は) 彼と同じ部屋に一緒に住む生活になりました」(直訳)
「(彼に) 私は頼まれたので彼と同じ部屋に一緒に住むようになりました」(yòɕìhàdà)

ビルマ語受動構文には主語の有生性の制約があり、また、この構文は利害という特別な意味を帯びているがために、命題的意味を変えない統語的操作としてこの構文を用いることはできない。ビルマ語の受動構文は従属節と主節の主語を統一する機能を担っているとは言い難い。

8 おわりに

本稿では、これまで先行研究において考察されることの少なかったビルマ語受動構文を対象に考察を行った。具体的には、以下のような点を中心に論じた。

2 節では、受動構文に言及のある先行研究を概観し、Okell (1969)、Wheatley (1982)、Sawada (1995)、Okell and Allott (2001)、岡野 (2007, 2009) などの文献に、この構文に関する言及が見られることを述べた。

3 節では、本稿で扱う受動構文を名詞化接頭辞 ʔǎ- による ʔǎ-V 名詞を持つ受動構文に限定した。また、この構文における主語は、意味的に対応する能動文と比較した場合、i) 意味的に対応する能動文の目的語、ii) 意味的に対応する能動文の目的語の所有者、iii) 意味的に対応する文の主語の三種があることを述べ、この構文に現れる ʔǎ-V 名詞が統語的には述語動詞 khàɴ「受ける」の目的語であることを指摘した。

4 節では、この受動構文を形成しうる動詞に関して述べ、この構文には「被害」を表すものと「利益・恩恵」を表すものがあることを示した。

5 節では、受動構文に現れる名詞化接頭辞 ʔǎ- の脱落条件に関して考察を行い、この接頭辞の脱落条件を、1) ʔǎ-V 名詞を形成する動詞が二音節以上の場合、2) ʔǎ-V 名詞の直前に主格の名詞 (句) が現れる場合、と規定した。また、2) の条件に該当する名詞 (句) には、i) 主格で現れる動作主 (5.2 節)、ii) 三項動詞の対象や着点 (5.3 節)、iii) 主語の所有物 (5.4 節)、iv) 熟語を構成する名詞要素 (5.5 節)、v) 道具を表す名詞 (句) (5.6 節)、vi) 起点を表す名詞 (句) (5.7 節) があることを示した。

6 節では、この構文における主語の有生性、主語の意志性、この構文の使用頻度、自動詞の

ʔă-V 名詞を持つ受動構文に関して述べ、この構文の主語には人間名詞句のみが生起すること、主語の意志性は助動詞 yâ の有無によって表されること、この構文の自然談話における使用頻度が低いこと、受動構文を形成しうる自動詞には θè「死ぬ」、ŋaʔ「飢える」、shínyɛ́「貧しい、悲惨だ、苦しい」などがあることを述べた。

7 節では、類型論的観点からビルマ語受動構文の機能を考察し、ビルマ語受動構文が類型論的に受動構文を特徴付ける、動作主を背景化する機能、被動者を前景化する機能、従属節と主節の主語を統一する機能のどの機能も担わないことを示した。

なお、先行研究では詳細に述べられることがなかった点として、次のことを明らかにした。

1. 受動構文が「利益・恩恵」の意味を表す場合があるということは、先行研究でも指摘されることがあった。しかし、このような文については、二三の例を挙げるに留められていた。本稿では、大量のデータを調査し、具体的にどのような動詞が ʔă-V 名詞になった場合に「利益・恩恵」の意味を表す受動構文が成立するかを示した (4.2 節)。
2. 受動構文における名詞化接頭辞 ʔă- の脱落条件について、すでに Okell and Allott (2001) に記述が見られるが、Okell and Allott (2001) に示された [II] の条件は若干の例を挙げるに留められ、この条件はいくつかの点において不十分であった。本稿では、この点をより詳しく考察し、ʔă-V 名詞の直前に主格で現れる名詞 (句) が生起する場合に名詞化接頭辞 ʔă- が脱落すると規定し、この種の名詞 (句) には様々なものがあることを明らかにした (5 節)。
3. 先行研究では、受動構文における動作主の標示に関して、いくつかの標示法があることは知られていたが、それらの使い分けに関して触れたものはなかった。本稿ではこの点に関して考察し、この使い分けには動作主の有生性および指示性が関与的であるという考えを示した (5.2 節)。
4. 先行研究では、ビルマ語に所有者受動文が存在することが述べられることがあったが、例を挙げるに留められていた。本稿では、この種の文を対象に詳述し、この種の文の成立条件についても考察を行った (5.4 節)。
5. ビルマ語の所有者受動文において容認度が低い文であっても、その所有者を属格によって標示すると、容認度が増すという事実は、これまで先行研究で指摘されてこなかったことである (5.4 節)。
6. 名詞化接頭辞 ʔă- の脱落した ʔă-V 名詞とそれに先行する名詞の関係に関して、先行研究では複合とする場合や「緊密に結びつく」という曖昧な表現で説明される場合があった。本稿ではこの問題をいくつかの根拠に基づき考察し、これらが完全には複合を成していないという考えを示した (5.8 節)。
7. 先行研究ではビルマ語受動構文の機能的側面に関して考察されることがなかったが、本稿では類型論的観点からビルマ語受動構文の機能を考察し、ビルマ語受動構文が類型論的に見られる受動構文の典型的な機能を欠くことを指摘した (7 節)。

また、本稿の考察を通じて以下のような未解決の問題の存在が明らかになった。これらの問

題に対しては現時点で完全な解答を与えることができない。今後の研究により解決されるべき課題である。

- 所有物がものである所有者受動文はどのような条件下で成立するか (5.4 節)
- 利益・恩恵を表す所有者受動文はどのような条件下で成立するか (5.4 節)
- 名詞化接頭辞 ʔă- の脱落した ʔă-V 名詞とそれに先行する名詞要素は形態統語的にどのような関係を持つか (5.8 節)

記号・略号一覧

-接辞境界; 1 一人称; 2 二人称; 3 三人称; ABL 奪格 ACC 対格; ALL 向格; ATTR 名詞修飾形; COM 共格; DAT 与格; EMPH 強調; GEN 属格; INCHO 起動; INST 具格; IRR 非現実; LOC 位格; NMLZ 名詞化; NOM 主格; PASS 受動; PERF 完了; PLN 地名; PL 複数; PSN 人名; PST 過去; REAL 現実法; RESL 結果; SEQ 継起; SG 単数; SFP 文末助詞; TOP 主題; HS 伝聞

参考文献

Cornyn, William S. (1944) *Outline of Burmese Grammar*. Bertimore: Linguistic Society of America.

Cornyn, William S. and D. Haigh Roop. (1968) *Beginning Burmese*. New Haven: Yale University Press.

李文子 (1979)「朝鮮語の受身と日本語の受身 (その一) —「もちぬしの受身」を中心に—」『朝鮮学報』91: 15–31. 朝鮮学会.

Judson, Adoniram. (1883) *Grammar of the Burmese Language*. Rangoon: American Baptist Mission Press.

加藤昌彦 (2008)「ビルマ語発音表記の一例」ms.

Keenan, Edward L. and Matthew S. Dryer. (2007) Passive in the world's languages. In Timothy Shopen ed., *Language Typology and Syntactic Description*, vol. I: Clause Structure, 325–61. Cambridge: Cambridge University Press.

工藤真由美 (1990)「現代日本語の受動文」『ことばの科学』4: 47–102. 東京: むぎ書房.

松下大三朗 (1930)『標準日本口語法』東京: 中文館書店.

Nishi, Yoshio. (1998) The development of voicing rules in Standard Burmese. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 23.1: 253–60.

仁田義雄 (1992)「持主の受身をめぐって」『藤森ことば論集』354–23. 大阪: 清文堂出版.

生越直樹 (2008)「朝鮮語における「所有者受動」をめぐって」『日本言語学会第 137 回大会予稿集』300–3.

岡野賢二 (2007)『現代ビルマ (ミャンマー) 語文法』東京: 国際語学社.

岡野賢二 (2009)「ビルマ語の受動表現に関する覚え書き」『語学研究所論集』14: 125–40. 東京外国語大学語学研究所.

Okell, John. (1969) *A Reference Grammar of Colloquial Burmese*. vol. I. London: Oxford University Press.

Okell, John and Anna Allott. (2001) *Burmese/Myanmar Dictionary of Grammatical Forms*. Richmond, Surrey: Curzon Press.

大野徹 (1983)『ビルマ語常用 6000 語』東京: 大学書林.

Sawada, Hideo. (1995) On the usage and functions of particles *-kou̯/-ka*. in colloquial Burmese. In Yoshio Nishi, James A. Matisoff, and Yasuhiko Nagano ed., *New Horizons in Tibeto-Burman Morphosyntax*. 153–87. Osaka: National Museum of Ethnology.

澤田英夫 (1999)「ビルマ語文法 (1 年次・2 年次)」(1998 年版の補訂版) ms.

Shibatani, Masayoshi. (1985) Passives and related constructions. *Language* 61: 821–48.

Shibatani, Masayoshi. (1990) *The Languages of Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.

Soe, Myint. (1999) A grammar of Burmese. Ph.D. dissertation, University of Oregon.

Stewart, John A. (1955) *Manual of Colloquial Burmese*. London: Luzac.

梅谷博之 (2008)「モンゴル語における「所有者受動」をめぐって」『日本言語学会第 137 回大会予稿集』304–9.

鷲尾龍一 (1997)「比較文法論の試み～ヴォイスの問題を中心に～」筑波大学現代言語学研究会 (編) 『ヴォイスに関する比較言語学的研究』1–66. 東京: 三修社.

鷲尾龍一 (2008)「「所有者受動」と受動表現の類型をめぐって」『日本言語学会第 137 回大会予稿集』310–5.

Wheatley, Julian K. (1982) Burmese: A grammatical sketch. Ph.D. dissertation, University of California.

Wheatley, Julian K. (1987) Burmese. In Bernard Comrie ed., *The Major Languages of East and South-East Asia*. 106–26. London: Routledge.

藪司郎 (1970)「ビルマ語の名詞の語構成について」『アジア・アフリカ文法研究』3: 1–12.

藪司郎 (1992)「ビルマ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』3: 567–610. 東京: 三省堂.

資料

CL (ビルマ語の小説)

MT (ビルマ語の新聞)

ʔǎɲàðá (ビルマ語によるラジオ劇)

lèwîɴðù (*The Catcher in the Rye* のビルマ語翻訳)

yòc̣ìhàdà (ビルマ語の小説)

南スーダンのことば遊び
—「ルドリング」の類型論への視点— [1]

仲尾周一郎

1　はじめに

特定の言語の聴覚的印象を規則的な音韻的操作によってカモフラージュさせる類の「ことば遊び」または「秘密語」は数多くの言語において観察されている [2]。こうした言語現象は、社会言語学的関心はもとより音韻理論に示唆を与えるテーマとしての地位を獲得しており、音韻論的な類型化に向けた試みが行われている。また、「ことば遊び」や「秘密語」は術語として漠然としていることから、このような言語現象は Laycock (1972) により便宜的に「ルドリング (ludling)」[3] と名付けられている。

本稿は 2012 年時点で南スーダン共和国の首都ジュバに住む 10 代のジュバ・アラビア語 [4] 話者に流行しているルドリングについて記述し、ルドリングの類型論を検討する材料を提供することを目的としている。まず 2 節では、ジュバ・アラビア語ルドリングの構造を記述し、特に興味深いプロソディの振る舞いについて分析する。3 節では、ルドリングに関する音韻類型論を概観し、ジュバ・アラビア語ルドリングの視点からどのように評価できるかを述べる。4 節では、2 節で扱ったものとは異なる、ジュバ・アラビア語ルドリングの別変種について記述し、これら 2 種のルドリングは使用者である小学生世代のディアスポラ経験を背景として伝播した可能性があること、またアラビア半島のルドリングとも歴史的関係があるであろうことを述べる。さらに、南北スーダンでこれまで記録されてきた「秘密語」を紹介し、これらもルドリング研究の対象に含めることで、より興味深い示唆が得られることを述べる。

[1] 本稿は JSPS 特別研究員奨励費 (23·6924) の助成を受け、筆者が 2012 年 8–9 月に南スーダン・ジュバにおいて行った調査に基づく。なお、この調査ではジュバ・マラカル地区のマヨ女子小学校 (Mayo Girls) 所属の複数の女子児童の協力を得て、ルドリングによる自由談話、または文を単位とする発話のルドリング形式への自由翻訳を収集するという方法をとった。特に調査に協力して頂いた Winny Yenu 嬢、および本稿執筆に際して多くのコメントを頂いた稲垣和也氏には記して感謝の意を表する。

[2] 日本語ではこれまでに「ズージャ語」 (ジャズ → ズージャ、メシ → シーメ)、「ノサ語」(わたし → わノサたし)、「ばびぶべぼ遊び／バビ語」(わたし → わバたバしビ) などが知られている。

[3] ラテン語 *ludus*「遊び」と *lingua* 「言語」からの造語。なお、その他の先行研究では language disguise, speech disguise, word game, play language, secret language などの名称も使用されているが、本稿では「ルドリング」を採る。また、ルドリングに現れる無意味形態素 (crypteme) は「ルドリング素」と呼ぶ。

[4] スーダン・アラビア語などを語彙供給言語として発生した、いわゆる「クレオール」。その他にも、いくつかのクレオールにはルドリングが報告されている (例えばパプアニューギニアのトク・ピシン、スリナムのサラマッカン, cf. Bagemihl 1989)。

2　ジュバ・アラビア語ルドリング

2.1　基本的な構造

本節では導入として、ジュバ・アラビア語ルドリングの構造について記述する。このルドリングはジュバ・アラビア語で *rondók* ~ *rundúk* (4.2 節参照) や *rutân*「民族語」と呼ばれ、小学校教師や両親などの年長者に対して 10 代児童が友人間の発話内容を隠蔽する機能を持つ。大まかには、このルドリングはジュバ・アラビア語[5]の発話を入力形式として、各語彙中の音節核母音の直後に子音連続 *-ŋg-* または *-rb-* を挿入し、その直後に核母音と同じ母音を続けるという構造をもつ (補助記号で表しているプロソディについては後述する)。

(1)	入力		出力 (*-ng-* 型)	出力 (*-rb-* 型)	
	ána	→	*á**ŋg**ána*	*á**rb**ána*	「1SG」
	munú	→	*mu**ŋgu**nú*	*mu**rbu**nú*	「誰」
	dêr	→	*dé**ŋgê**r*	*dé**rbê**r*	「欲しい」
	wónusu	→	*wó**ŋgó**nusu*	*wó**rbó**nusu*	「話す」
	kátifu	→	*ká**ŋgá**ti**ŋgi**fu*	*ká**rbá**ti**rbi**fu*	「書く」
	giyáfa	→	*gi**ŋgi**yá**ŋgá**fa*	*gi**rbi**yá**rbá**fa*	「美しい」
	kebîr	→	*ke**ŋge**bí**ŋgî**r*	*ke**rbe**bí**rbî**r*	「大きい」

ルドリング素 *-ŋgV-* または *-rbV-* は一発話中において共起せず、以下の例が示すように、いずれのルドリング素が用いられるかは「われ曰く (*ána galí*)[6]」という意味を持つ、儀礼的な発話初頭のフレーズにおいて明示される。

(2)	*ána*	*galí,*	*râs*	*táki*	*kebîr.*	入力
	*á**rb**ána*	*ga**rba**lí,*	*rá**rbâ**s*	*tá**rbá**ki*	*ke**rbe**bí**rbî**r.*	出力 (*-rbV-* 型)
	*á**ŋgá**na*	*ga**ŋga**lí,*	*rá**ŋgâ**s*	*tá**ŋgá**ki*	*ke**ŋge**bí**ŋgî**r.*	出力 (*-ŋgV-* 型)
	1SG	COMP	頭	2SG.POSS	大きい	

「(われ曰く)、君の頭は大きい」

その他に注目すべきジュバ・アラビア語ルドリングの特徴として、ルドリング形式における自由変異の存在とプロソディの振る舞いがある。以下の節ではそれぞれの現象を記述し、問題点について述べる。

[5] ジュバ・アラビア語には基層話体・中層話体 (仲尾 2012) や世代方言 (仲尾 2011)、民族方言などの変種が存在する。ここで扱うルドリングはジュバ生え抜きの 10 代が話す基層話体を基底にしている。ハルツーム生まれの中層話体話者のルドリングについては 4 節において紹介する。

[6] ジュバ・アラビア語では引用節標識 (*galí* など) の主要部である発話動詞 (「言う」等) は省略できる。

2.2　自由変異

1 語中のルドリング素の挿入される位置と回数に関しては、2 種類の自由変異が観察できる。まず、(3) のように、多拍語 (多音節または CVC) を入力とする場合、語頭音節の核母音直後への挿入は義務的であるが、その他の核母音直後に関しては随意的なようである [7]。また、(4) のように一拍語 (CV) に関しては、例外 [8] を除きルドリング化は随意的である。

(3)	*ásuma*	→	*á**ŋgá**suma*	~	*á**ŋgá**su**ŋgu**ma*	
			*á**rbá**suma*	~	*á**rbá**su**rbu**ma*	「聞く」
	íta	→	*í**ŋgí**ta*	~	*í**ŋgí**ta**ŋga***	
			*í**rbí**ta*	~	*í**rbí**ta**rba***	「2SG」
	sunú	→	*su**ŋgu**nú*	~	*su**ŋgu**nú**ŋgú***	「何」
	silâ	→	*si**ŋgi**lâ*	~	*si**ŋgi**lá**ŋgâ***	「武器」
	wónusu	→	*wó**ŋgó**nusu*	~	*wó**ŋgó**nu**ŋgu**su*	「話す」
	isténe	→	*i**ŋgi**sténe*	~	*i**ŋgi**sté**ŋgé**ne*	「待つ」
	kátifu	→	*ká**ŋgá**ti**ŋgi**fu*	~	*ká**ŋgá**tifu**ŋgu***	「書く」
	beyîd	→	*be**rbe**yîd*	~	*be**rbe**yí**rbî**d*	「遠い」
	súkuran	→	*sú**rbú**kuran*	~	*sú**rbú**ku**rbu**ran*	「ありがとう」
	lókílíŋ	→	*ló**ŋgó**kí**ŋgí**lí**ŋ*	~	*ló**ŋgó**kí**ŋgí**lí**ŋgí**ŋ*	「肘鉄砲」
	giyáfa	→	*gi**ŋgi**yáfa*	~	*gi**ŋgi**yá**ŋgá**fa*	「美しい」
	giyaf-în	→	*gi**ŋgi**yafí**ŋgî**n*	~	*gi**ŋgi**ya**ŋga**fí**ŋgî**n*	「美しい-PL」

(4)

íta	*bí*	*géni*	*wên?*
*í**rbí**ta*	*bí ~ bí**rbí***	*gé**rbé**ni*	*wé**rbê**n?*
2SG	TAM	住む	どこ

「君はどこに住んでいるの？」

ána	*kedé*	*jíbu*	*le*	*íta*	*móyo?*
*á**rbá**na*	*ke**rbe**dé*	*jí**rbí**bu*	*le ~ le**rbe***	*í**rbí**ta*	*mó**rbó**yo?*
1SG	SUBJ	持ってくる	ALL	2SG	水

「私は君に水を持って来ようか？」

jíbu	*hája*	*dé*	*guwâm*
*jí**ŋgí**bu*	*há**ŋgá**ja*	*dé ~ dé**ŋgé***	*gu**ŋgu**wá**ŋgâ**m.*
持ってくる	もの	DEM	早く

「早くそれをもってこい」

[7] ただし、前節で述べた発話初頭のフレーズは固定化されており、自由変異は観察されない。
[8] ただし、一拍語 *já* → ***já**ŋgá***「来る」や *tô* → ***tó**ŋgô***「彼 (女) の」には自由変異は観察されない。

2.3　プロソディ

ジュバ・アラビア語におけるピッチは、基本的に高 (H: 鋭アクセント記号により標示) と低 (L: 無標示) の二項対立である。語末音節にのみ現れる下降 (F: 曲アクセント記号により標示) は H と L の複合とみなせる。しかし、これらの分布を観察すると、ジュバ・アラビア語は安易な一般化を許さない複雑なプロソディ体系をもつことがわかる。

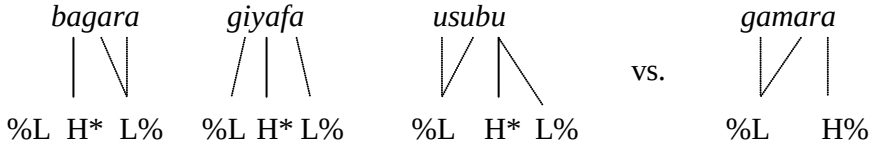
まず、ジュバ・アラビア語には、大部分のピッチ・アクセント型の語彙 (以下 PAW と略す) および形態論と、少数のトーン型の語彙 (以下 TW と略す) および形態論が存在する。PAW は主にアラビア語起源であり、(5) のように一音韻語に一音節のみが H または F をもつ自由アクセント (n 音節語に対し、n+1 パターンのアクセント型がある) と特徴づけられ、複数形接尾辞が付加される場合などは語幹の H または F が除去 (いわゆる de-accenting) される。一方、TW は主に民族語起源であり、(6) のように各音節に対し制限なく H や L (語末音節には F も) が現れ、複数形接尾辞には語幹末のピッチとは対極のピッチ (いわゆる polar tone) が現れる (F の場合は H)。

(5)　*bágara*「牛」、*giyáfa*「美しい」、*usubû*「週」、*gamará*「月」
　　***bá**gara* → ***ba**gar-ât*「牛-PL」、*giy**á**fa* → *giy**a**f-în*「美しい-PL」

(6)　*dáŋgá*「弓」、*kwete*「ローカルビール」、*tuútuút*「毒蟻」、*kapáparât*「蝶」
　　dáŋgá → *dáŋgá-**jin***「弓-PL」、*kwete* → *kwete-**jín***「ローカルビール-PL」

これらの形態音韻構造の違いは、PAW と TW が基底レベルで異なる表示をもつと分析することで説明できる。Nakao (in print) では、TW にはピッチの現れに制限がないことや、複数形接尾辞のピッチの現れを説明する必要から、基底で各音節に H や L が付与されている体系を想定した。一方で、PAW ではピッチ実現の制限から、日本語ピッチ・アクセント体系などをモデルとし、(5) *bágara, giyáfa, usubû* などは基底では卓立 (H*) の位置のみが指定され、後語彙的な境界トーン (%L [9] および L%) が付与されるいわゆる「有核語」、これに対し、語末音節に H をもつ (5) *gamará* などは卓立をもたず、後語彙的な境界トーン (%L および H%) が付与されるいわゆる「無核語」と分析した [10]。

(7)



[9] ただし、語頭音節に卓立がある場合 (e.g. *bágara*) 、%L は実現しない。

[10] その他の境界トーンには、疑問文末で現れる H% 等が認められうる (e.g. *bágara?* [ba˥ga˥ra˥]「牛か？」)。なお、この H% は TW にも付与されうる (e.g. *kwete?* [kweꜜteꜛ]「ローカルビールか？」)。

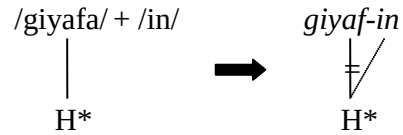
しかし、ルドリング形式においては以上の分析の枠にはあてはまらないプロソディ構造が観察できる。第一に、PAW と TW は基底が異なると考えられるにも関わらず、ルドリングでは特に区別なく、同一の規則が適用されている (e.g. (3) *giyáfa* → *gi**ŋgi**yá**ŋgá**fa*「美しい (PAW)」vs. *lókílíŋ* → *ló**ŋgó**kí**ŋgí**líŋ*「肘鉄砲 (TW)」)。次に、PAW は 1 音韻語に 1 音節のみ卓立をもつが [11]、ルドリング化された形式はこの制約に反する。さらに、Nakao (in print) の分析に従えば、語末音節の F (H* + L%) は卓立 (H*) のみがコピーされる (e.g. (3) *silâ* → *si**ŋgi**lá**ŋgâ*, **si**ŋgi**lâ**ŋgâ*, **si**ŋgi**lâ**ŋga***「武器」) が、語末音節の H (H%) は境界トーンがコピーされている (e.g. (3) *sunú* → *su**ŋgu**nú**ŋgú***, **su**ŋgu**nu**ŋgú***「何」) ことになる。

以上のような問題に対し、本稿では暫定的に、ルドリングの特殊な振る舞いは、それが独立した音韻派生段階をもつためと考える [12]。まず、(3) *giyaf-în* → *gi**ŋgi**ya**ŋga**fí**ŋgî**n*「美しい-PL」から、ルドリング化は PAW の語形成の後に行われていると考えられる。また Nakao (in print) を修正し、語末での H と F の対立は、(8) のように語ごとに語末に H* を持つ音節に L% の多重連結を許すか (語末 F, *usubû*)、許さないか (語末 H, *gamará*) の対立と分析し、これに基づきルドリング化は境界トーンの付与の前段階で生じていると一般化する。

(8)

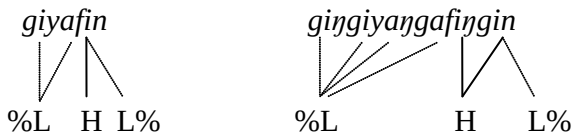
以上から、ルドリング化の規則順序付けは (9) のように図示できる。また、(9b) の段階では PAW と TW が区別されないと推定しておく [13]。

(9) a. 語形成に関わる形態音韻規則



b. ルドリングの形態音韻規則

c. 境界トーンの付与



[11] ただし、動詞重複形 (動詞は全て PAW) では *séregu*「盗む」→ *sérégú-seregu*「盗みまくる (多回数)」のようなプロソディ実現が観察されており、PAW の音韻語の規定自体に課題がないわけではない。

[12] これに似た分析として、Begemihl (1995) や Vaux (2012) はルドリングを類型化するパラメータして音韻規則の順序付けを認めており、本稿での分析はこの枠組みに組み込むこともできる。

[13] TW にも境界トーンが付与される (cf. 註 10) ことは、この推定を支持している。

3　ルドリングの音韻類型論

3.1　先行研究

ルドリングに関しては、音韻形式ごとの類型化が試みられてきた。初期の研究として、Laycock (1972) は拡大型 (入力外の分節音を追加)、縮小型 (入力内の分節音を削除)、置き換え型 (入力内の分節音を入力外の別の分節音に)、並び替え型 (入力内の複数の分節音の音位転換)、複合型 (以上の組み合わせ) の 5 類型を提示している [14]。

ところで、ルドリング素が 1 語中に反復的に現れ、その形式において入力形式内の分節音 (特に母音) がコピーされるタイプのルドリング (以下「反復コピー型」) については、Laycock (1972) は拡大型のサブグループとするが、いくつかの先行研究は観察的に (10) の傾向や特徴を提示し、特殊な類型とみなして音韻論的解釈を行っている。

(10) a. ルドリング素は入力の音節に対し後方に現れる (McCarthy 1991, Yu 2008, etc.)
例外：ブラジル・ポルトガル語 *bola* → ***po**bo**pa**la* (Guimarães & N. 2012, Yu 2008)

b. 子音はコピーされにくい (Botne & Davis 2000, Frazier & K. 2011)
例外：スウェーデン語 *bra* → ***bo**b**ro**ra* (Botne & Davis 2000)

c. 挿入される形式は唇子音が多い (Botne & Davis 2000, Frazier & K. 2011)
例外：インドネシア語 *kita* → *ki**deni**ta**dena*** (Botne & Davis 2000)
ドイツ語 *erschlug* → *er**herlefer**schlug**huglefug*** (Yu 2008)

d. 出力形式が特徴な韻律構造をもつことがある (Yu 2008, Frazier & K. 2011)
例：ハウサ語 *mùstáfà* → *(mú**bùs**)(tá**bà**)fá, búuláalàa* → *(bù**gùdù**)(lá**gádá**)làa*
タガログ語 *salá:mat* → *(sa**gá:**)(la**gá:**)(ma**gá**t), hindíq* → *(hi**gí:di**n)(di**gí:di**q)*

e. 表層表示が入力形式となりやすい (Guimarães & N. 2012, Frazier & K. 2011, etc)
例：ブラジル・ポルトガル語 /kamiza/ [kẽmiza] ($V_{[+stress]}$ →[+nasal]/__$C_{[+nasal]}$)
→ [kẽ**pẽ**mi**pi**za**pa**] (語頭音節の核母音が、非鼻子音の前にも関わらず鼻母音化)

McCarthy (1991) は自律分節音韻論に則り、母音のコピーは分節音の拡張と捉えて (10a) の傾向を説明している。しかし、前方への拡張か後方への拡張かは恣意的に決定せざるをえず、(10b, c) の傾向も説明できない (Botne & Davis 2000)、また、(10c) のドイツ語の例外のようにライムがコピーされる場合、各分節音をそれぞれコピーする必要があり、ライムのまとまりを表現できない (Yu 2008)、などの問題点が指摘されている。

Botne & Davis (2000) は反復コピー型ルドリングを「半音節 (demisyllable)」の間に子音的調音が付課 (impose) された特殊な類型とみており、唇子音はその長音に必要な可動器官が唇のみであり、母音の調音に必要な舌の動作への影響を最小化できるため最も挿入されやすいと分析している。この分析は (10a, b, c, e) の特徴を説明できるが、極めて特殊な音韻規則を建てるにも関わらず (10b, c) の例外が処理できない (Frazier & Kirchner 2011, Vaux 2012)。

[14] Bagemihl (1995) や Frazier & Kirchner (2011) はこのほかにもマイナーな類型があることを述べている。

最適性理論を用いた最近年の代表的な分析には、以下の 3 種類がある。

Yu (2008) は (8d) の特徴を最重視し、入力形式の各音節に対する韻律構造を単位とするテンプレートの形成 (FOOTBINALITY) がより強い制約としてランク付けられ、このテンプレートの要請から二次的に母音がコピーされると分析する。Yu (2008) は入力形式としてはおそらく基底表示のみを扱っており、(8e) の特徴に関しては注目していない。

Guimarães & Nevins (2012) はブラジル・ポルトガル語ルドリングにおいて (8d) の特徴を指摘し、Raimy (2000) による重複音韻論による制約 (Base-Reduplicant Correspondence, IDENT-BR) との類似から、重複と並行的に、出力形式は基底表示との照合性制約 (IDENT-IO) よりも表層表示との照合性制約 (IDENT-BR) がより高い位置にランクづけられると分析する。ただし、ルドリング素の反復性と出力形式の韻律構造については説明していない (Yu 2008)。

Frazier & Kirchner (2011) は Guimarães & Nevins (2012) とは独立に、ティグリニャ語ルドリングなどにおける (8d) の特徴を指摘し、基底表示との照合性制約 (IDENT-IO) より表層表示との照合性制約 (IDENT-NL) が高い位置にランクされ、Yu (2008) と同様に韻律構造を単位とするテンプレート (FOOTBINALITY) からの要請で母音がコピーされると分析している。

3.2　ジュバ・アラビア語ルドリングからの検討

ジュバ・アラビア語ルドリングから以上の分析を評価すると、まず (10a, b) は満たすが (10c) に関しては例外であることがわかる。ここでは Botne & Davis (2000) の分析では、なぜ子音連続 *-rb-* や *-ŋg-* が選択されたかについては説明できないことを指摘しておく。

(10d) についても、多拍語がルドリング素の挿入に関して自由変異をもつ点 (cf. 2.2 節) を考慮すれば例外と認めたほうがよい。つまり、ジュバ・アラビア語ルドリングの事例は、韻律構造と母音のコピーに依存関係を認めるという分析 (Yu 2008, Frazier & Kirchner 2011) では、必ずしもルドリング素が反復しないという型のルドリングを扱えないという問題を端的に示している [15]。より包括的な視点としては、Laycock (1972) を参考に、反復コピー型ルドリングはある種の「複合型」とみることが妥当であろう。また、(10e) に関し、ジュバ・アラビア語ルドリングは、その音韻派生段階は表層と基底の中間とみなせる (cf. 2.3) ため、この傾向に対しても例外といえる。このことは、「ルドリングでは表層表示との照合性制約がより高い位置にランク付けられる」という説明 (Guimarães & Nevins 2012, Frazier & Kirchner 2011) では不十分であり、いずれの音韻派生段階でルドリング化が生じるかが類型化のパラメータとなりうることを示唆している (cf. 註 12)。

加えて、従来のルドリング類型論は言語普遍性を前提としており、ルドリングに関する通時的な考察は十分行われていないことが指摘できる。次節では、ジュバ・アラビア語ルドリングの事例がルドリング類型論に通時的視点を提供できることについて述べる。

[15] なお、Yu (2008) は (10d) のハウサ語の例について語末音節を「韻律外」と分析できることを述べている。しかし、特に語中の音節 (太字) がルドリング素を持たない例 (3) *giŋgi**ya**fíŋgîn, káŋgá**ti**fuŋgu* などは、韻律外性では説明できない点にも留意したい。

4　ルドリング類型論への社会言語学的視点

4.1　ジュバ・アラビア語ルドリングの変種

スーダン・アラビア語との言語接触の結果、ジュバ・アラビア語には部分的に脱クレオール化が生じており、基層話体 (より伝統的なクレオール変種) と中層話体 (目標言語の影響を受けたクレオール変種) が区別できる。中層話体は動詞の主語人称活用や接尾人称代名詞などを獲得していることで特徴づけられる (仲尾 2011, 2012)。

さて、これまでジュバ・アラビア語ルドリングとしてきたものはジュバ生え抜きの話者が使用するものであったが、ハルツーム生まれのジュバ・アラビア語中層話体話者は規則が異なるルドリング変種を使用している。後者のルドリング変種は、ルドリング素は卓立を持つ音節 (C)**V́**(C) のみを(C)**V́V́rbV́**(C) のテンプレートへと組み込むという構造をもつ。

(11)	*íta*	*t-áruf*		*t-éktib?*	入力：中層話体
	***íírbí**ta*	***tá**árbá**ruf*		***té**érbé**ktib?*	出力：ハルツーム型
	2SG	2SG-知っている. IMPF		2SG-書く.IMPF	
	íta	*bi*	*áruf*	*katífa?*	入力：基層話体
	***í**rbí**ta*	*bi*	***á**rbá**ruf*	*ka**rba**tí**rbí**fa?*	出力：ジュバ型
	2SG	TAM	知っている	書く.GER	

「あなたは書けますか」

(12)	*ísm-ak*	*munú?*	入力：中層話体
	***íírbí**smak*	*mun**úúrbú**?*	出力：ハルツーム型
	名前-2SG.M.POSS	誰	
	ísim	*táki*	*munú?*	入力：基層話体
	***í**rbí**sim*	*tá**rbá**ki*	*mu**rbu**nú?*	出力：ジュバ型
	名前	2SG.POSS	誰	

「あなたの名前は何ですか」

(13)	*ána*	*galí,*	*rás-ik*		*kebîr.*	入力：中層話体
	***áárbá**na*	*gal**íírbí**,*	*r**áárbá**sik*		*keb**íírbî**r.*	出力：ハルツーム型
	1SG	COMP	頭-2SG.F.POSS		大きい	
	ána	*galí,*	*râs*	*táki*	*kebîr.*	入力：基層話体
	***á**rbá**na*	*ga**rba**lí,*	*rá**rbâ**s*	*tá**rbá**ki*	*ke**rbe**bí**rbî**r.*	出力：ジュバ型
	1SG	COMP	頭	2SG.POSS	大きい	

「あなたの頭は大きい」

なお、以下の例が示すように、ハルツーム型ルドリングは中層話体のみならず基層話体を入力とすることもできることから、これらのルドリング変種の規則は言語変種の文法からの要請の帰結としてみることはできない。

(14)	*ána*	*bí*	*géni*	*fi*	*hai-melekân*	入力：基層話体
	***áárbá**na*	*bí*	***géérbé**ni*	*fi*	*hai-melek**áárbâ**n.*	出力：ハルツーム型
	***árbá**na*	*bí**rbí***	*gé**rbé**ni*	*fi*	*ha**rba**i-me**rbe**lekár**bâ**n.*	出力：ジュバ型
	1SG	TAM	住む	LOC	地区-マラカル (地名)	

「私はマラカル地区に住んでいます」

近年のジュバでは、2005 年の包括的和平条約締結そして 2011 年の南スーダン独立以降、ハルツームなどのディアスポラからの帰還民が急激かつ一方向的に増加している。こうした人口移動の方向性を考慮すれば、ハルツーム型ルドリングが先行的に存在し、ジュバへと伝播したと推定するのが自然である [16]。

この推定と関連して、ハルツーム型ルドリングと極めて類似したルドリングがアラビア半島周辺のアラビア語変種において報告されている点は興味深い。Bakalla (2002) は 1950–60 年代のメッカで流行した *misf* と呼ばれるルドリングを記録している。このルドリングでは、入力形式の卓立 (ストレス) をもつ音節 ˈC**V**(**V**C) のみが、C**VVr**ˈ**bV**(**V**C) というテンプレートに組み込まれるという構造をもつ。

(15)	*ˈhaada*	*ˈšayy*	*ja ˈmiil*
	*h**aar** ˈ**baa**da*	*š**aar** ˈ**ba**yy*	*jam**iir** ˈ**bii**l*
	この	もの	良い

「これは良いものだ」

ta ˈʕaalu	*ˈkulla-kum*	*ˈhina*
*taʕ**aar** ˈ**baa**lu*	*k**uur** ˈ**bu**llakum*	*h**iir** ˈ**bi**na*
来い	全て-2PL	ここ

「君たちみんなここに来い」

[16] 筆者が調査を行った小学校では、遊び歌にもこれと類似した現象が見られた。例えば、1 人が泣きまねをしている周りに円形に並んだ状態で以下のような歌 (括弧部分で呼ばれたメンバーが次に泣きまねをする役に回る) を歌うという、日本の「かごめかごめ」にやや類似した遊びがある。この歌にはエジプト・アラビア語と考えられるバージョン：*Selwā ya selwā, mālik bi-tebkī, āyiza ē, āyiza ṣadīqti, ṣadīqtik mīn, ṣadīqti (Winny).*「セルワーちゃん、セルワーちゃん、なぜ泣くの、何が欲しいの、私の友達が欲しいの、あなたの友達は誰、私の友達は (ウィニー) よ」と、ややジュバ・アラビア語の影響を受けたバージョン：*Selwā selwā, mālu bi dengir, hāzā ē, hāzā sadīqī, sadīqī munu, sadīqī filān, filān de munu, filān de (Inda).*「セルワーちゃん、セルワーちゃん、なぜ膝ついて座っているの、これは何、これは私の友達、私の友達はだれかよ、だれかはだれ、だれかは (インダ) よ」がある。このように南スーダン人子弟のディアスポラ経験を背景として言語文化の伝播が生じていたことは注目に値する。

Bakalla (2002) は 1950–60 年代のメッカにおいては、このルドリングは様々な言語 (ナジド・アラビア語、カイロ・アラビア語、英語、フランス語、タミル語、トルコ語、ベンガル語、ハウサ語、ペルシャ語、ウルドゥ語) において用いられていたことを報告し、イスラームの聖地かつ世界都市であったメッカの都市文化と位置づけている。

その他のアラビア語変種に関しても、Walter (2002) はイエメン・ハドラマウト地方で使用される、卓立を持つ音節の頭子音の直後に *-aarb-* を挿入するというルドリング (e.g. *muˈkalla* → *muˈk**aarb**alla*「ムカッラ (地名)」) を、Abu-Abbas et al. (2010) はヨルダンで 使用される、語頭音節の頭子音の直後に *-irb-* (入力の核母音が /a/ か/i/) または *-urb-* (入力の核母音が /u/) が挿入するというルドリング (e.g. *saˈlaam* → *s**irb**aˈlaam*「平和」、 *riˈmaal* → *r**irb**iˈmaal*「砂」、*ˈrukba* → *r**ur**ˈ**b**ukba*「膝」) を記録している。両研究はこの言語文化がメッカ巡礼により各地域に伝播、変容したものである可能性を提示している [17]。

Laycock (1972) はいくつかのルドリング間の類似に関して、それが言語普遍によるものか、偶然によるものか、それとも伝播によるものかを考察する価値について問題を提起している。以上のようなジュバ・アラビア語ルドリングを含むこれらの *-rb-* 型ルドリングは、ルドリング類型論に対して、通時的考察という、純粋な言語普遍性とは異なる立場からの説明が有効であることを示す事例と位置づけられる。

4.2 ルドリングの定義と南北スーダンの「秘密語」

Laycock (1972) はルドリングを「普通の言語のテクストを、そのメッセージの意味を変えずに、隠蔽または滑稽な効果を意図して形式を規則的に変形した帰結」と暫定的に定義している。この定義は、広義にいわれる「秘密語」や「スラング」などにおける予測不可能な語彙の置き換え (隠蔽を意図するが規則的でない)、裏声やささやき声、不明瞭な発話や、特定の音韻的特徴を用いた外国人訛りの真似 (規則的だが隠蔽を意図しない) などを排除する。また、この定義はルドリングをあくまで言語現象と捉えており、自律的な言語体系とみなしていない点も重要である [18]。

ジュバ・アラビア語ルドリングはこの定義に合致しているが、南北スーダンにおいてはこうした典型的なルドリングはほぼ報告されてこなかった。しかし、「若年層の秘密語」と呼ばれるある種の言語変種がこれまでに 2 種類記述されている。

まず、Miller (2004) は 1980 年代のジュバにおいて使用された「若年層の秘密語」を記録している。この言語変種では、1 発話中に接尾辞 *-efon* がある程度規則的にかつ語類に関わ

[17] ルドリングの伝播に関して、Vycichl (1959) はかつてエジプト南東部のアッバーディー人首長の話したルドリングとある種のペルシャ語ルドリングの類似が伝播に起因する可能性を指摘している。

[18] その他の定義もこの点では概ね一致しているようである (Bagemihl 1995, Vaux 2012, etc.)。ルドリングは、その使用目的から、ある種の「レジスター」や「スタイル」と見做し、限定的な場面でのみ出現する「言語変種」と認める観点もありうる。しかし、こうしたカテゴリーはいわゆる集団語やジャーゴンなどと同様に、自律的な言語体系をなしている (と記述言語学でみなされうる) 「方言」とは峻別する必要がある (cf. 千田 2010)。

らず付加されており、この言語現象のみを取り上げるのであればルドリングの定義に合致しうる。しかし、Miller (2004) は、やや不規則な接辞付加・短縮語化・借用・意味変化などによる秘密語語彙を含めた総体を「秘密語」として記述している [19]。

また、Manfredi (2008) は、スーダンの諸都市を中心に 1980–1990 年代以降に発生した、スーダン・アラビア語で *rendók* (*ruṭāna*「民族語」からの変形) と呼ばれる「若年層の秘密語」を記録している。こちらの「秘密語」では、スーダン・アラビア語を入力とし、一部の機能語を除いて語類に関わらず子音が音位転換するという規則 [20] をもっている。

(16)	*al-xawā[ʤ]-āt*	*ṣuɣār*	*lakín*	*rās-hum*	*b-i-kūn*	*kabīr.*
	al-ʤawāx-āt	***ɣurāṣ***	*lakín*	***sār-hum***	*b-i-**nūk***	***barīk.***
	DEF-西洋人-PL.F	小さい.PL	しかし	頭-3PL.M	IMPF-3SG.M-COP	大きい
	「西洋人は小さいが、頭は大きい」					

やはりこの言語現象自体はルドリングの定義に合致しうるが、Manfredi (2008) はその他のやや不規則な接辞付加・短縮語化・借用・意味変化などによる秘密語語彙 (上記の音位転換はこうした語彙に循環的に適用されうる) を *rendók* に含める。また、Manfredi (2008) は、一部の若年層コミュニティ (*Šammāsa*) において *rendók* [21] の使用場面が限定されておらず、「第一言語として使用されている」と報告している。

これらの事例をルドリングの定義に当てはまらないものとして分析対象から除外するのは容易いが、言語現象であるルドリングがより高度な言語コードへと発達しうることを示す端的な例とみることもできるだろう [22]。これまで、言語現象が (自律的な) 言語変種あるいは言語へ発展する現象は、ピジンからクレオール、コードスイッチングから混成言語 (mixed language) への発展モデル等によって提示されてきたが、これらと並行的に捉えることで、ルドリングは音韻論を超えたテーマとなる可能性がある。

[19] 仲尾 (2011) は、2010 年の調査に基づき 20 代前後のジュバ・アラビア語話者により使用される「スラング」の語彙やそれを形成する短縮語化・接辞付加などの形態論を記録した。Miller (2004) の記録したやや不規則な形態論や語彙は現在も変容しつつ広く使用されているのに対し、接尾辞 *-efon* の付加に関しては知識を持たない話者が多く、1980 年代当時の段階で異なるレベルの現象であった可能性がある。なお、現時点では仲尾 (2011) の「スラング」と本稿で扱ったルドリングは混合されず、異なる言語現象として存在している。

[20] 筆者の調査によれば、1970–1980 年代頃のジュバにおいても、Miller (2004) の「秘密語」とは別に、小学生はこれに類似したルドリング (***wúra*** < ***rúwa***「行く」、***ɩáabu*** < ***áɩabu***「遊ぶ」) を使用していたようである。Kenyon (2011) はスーダン中央部で行われる憑依儀礼において、憑依霊がスーダン・アラビア語の子音を入れ替えた「異言」(*rutana* [sic]) を話すと述べているが、具体例はない。南スーダンのザンデ語 (Evans-Pritchard 1954) や隣接のコンゴ北東部のマンベトゥ語 (Demolin 1991) では、音節単位の音位転換等による「スラング」や「秘密語」が報告されているが、恐らく *rendók* との関係性は薄い。

[21] なお、このコミュニティにおける *rendók* 変種は独自の接中辞的要素を発達させている (Manfredi 2008: 122, *ʤāmid* → *ʤa-**tta** **na**-mid*「良い」)。Manfredi (2008) は特に述べていないが、ここで接中されている形式のカイロ・アラビア語におけるルドリング素 *-tinV-* (Burling 1970)との類似は興味深い。

[22] 類例として、コンゴ東部のブカヴではスワヒリ語ルドリングから *Kibalele* と呼ばれるより自律的かつ複雑な構造と明確な使用目的をもつ「秘密語」への発達が報告されている (Goyvaerts 1996)。

5　まとめ

本稿では、南スーダンの 10 代の小学生間において流行しているジュバ・アラビア語ルドリングについて記述した。また、このルドリングには出身都市 (ジュバかハルツームか) により異なる変種があり、時系列的にはハルツーム型のものがジュバ型のものに先行して存在した可能性を指摘した。

ジュバ・アラビア語プロソディ体系については、以下のような分析を行いうることが示唆された (2.3 節)。これらの発見は、Nakao (in print) を見直し、より包括的なジュバ・アラビア語プロソディ体系を再考する上で重要な手がかりとなりうる。

(17) a. 語末音節での H と F の対立に関し、H を境界トーン (H%)、F を卓立 (H*) + 境界トーン (L%) とする分析は、少なくともルドリングの音韻派生からは不適切と考えられる。本稿では、暫定的に、両方に対して H* が付与されており、L% が実現するか否かは多重連結を許すか許さないかの対立であると分析した。

b. ルドリング化は PAW の語形成の後、かつ境界トーン付与の前の音韻派生段階において行われていると考えられる。

c. ルドリング化が行われる音韻派生段階においては、PAW と TW のプロソディの振る舞いは中和していると考えられる。

また、ジュバ・アラビア語ルドリングを分析したことで、従来のルドリング類型論に対して、以下のような評価を行うことができた。

(18) a. Yu (2008) ほかは、反復コピー型ルドリングにおける母音のコピーは、韻律構造からの要請であると分析しているが、ジュバ・アラビア語ルドリングは少なくとも現時点ではこのように分析できない。(3.2 節)

b. Guimarães & Nevins (2012) や Frazier & Kirchner (2011) はルドリングは表層表示から派生する傾向があると分析しているが、ジュバ・アラビア語のルドリング化は (17b) の段階で生じている。このことは、ルドリングは音韻派生段階ごとに類型化できる可能性を示唆している。(3.2 節)

c. 反復コピー型ルドリングにおいて出現する入力外の分節音に関して、ジュバ・アラビア語は例外的といえる。ただし、これは伝播に起因する例外であり、純粋な言語普遍性の課題として扱う必要はない。(4.1 節)

なお、本稿ではジュバ型ルドリングにおける母音のコピーに関する音韻派生、ハルツーム型ルドリングにおける音韻派生は十分扱わなかった。今後、これら 2 変種に関しては、エリシテーションに基づくデータを収集することで、包括的な分析枠組みを構築することを課題としたい。

参考文献

Abu-Abbas, Khaled H., Thaer T. Al-Kadi, Feda Y. Al-Tamimi (2010) “On Three -rb- Language Games in Arabic” *Argumentum* 6: 76–90.

Bagemihl, Bruce (1989) “The Crossing Constraint and ‘Backwards Languages’” *Natural Language and Linguistic Theory* 7: 481–549.

Bagemihl, Bruce (1995) “Language Games and Related Areas” In John A. Goldsmith (ed.) *The Handbook of Phonological Theory*. Cambridge: Blackwell, pp. 697–712.

Bakalla, Muhammad H. (2002) “What is a Secret Language? A Case from a Saudi Arabian Dialect” in Dilworth B. Parkinson & Elabbas Binmamoun (eds.) *Perspectives on Arabic Linguistics XIII-XIV*. Amsterdam: John Benjamins, pp. 171–183.

Botne, Robert & Stuart Davis (2000) “Language Games, Segment Imposition, and the Syllable” *Studies in Language* 24 (2): 319–344.

Burling, Robbins (1970) *Man’s Many Voices*. New York: Holt, Rinehart, and Winston Inc.

Demolin, Didier (1991) “L’analyse des segments, de la syllable et des tons dans un jeu de langage mangbetu” *Langages* 25 (101): 30–50.

Evans-Prichard, Edward E. (1954) “A Zande Slang Language” *Man* 54: 185–186.

Frazier, Melissa & Jesse S. Kirchner (2011) “Correspondence and Reduplication in Language Play: Evidence from Tigrinya and Ludling Typology” ms. (www.melfraz.com, 閲覧日 2013.2.7.)

Goyvaerts, Didier L. (1996) “Kibalele: Form and Function of a Secret Language in Bukavu (Zaire)” *Journal of Pragmatics* 25: 123–143.

Guimarães, Maximiliano & Andrew Nevins (2012) “Opaque Nasalization in Ludlings and the Preccedence Relation of Reduplication and Infixation” *Letras & Letras* 28 (1): 129–166.

Kenyon, Susan (2011) “Spirits and Slaves in Central Sudan” in Andrew Dawson (ed.) *Summoning the Spirits: Possession and Invocation in Contemporary Religion*. London & New York: I. B. Tauris, pp. 58–73.

Laycock, Don (1972) “Towards a Typology of Ludlings, or Play-Languages” *Language Communications* 6: 61–113.

Manfredi, Stefano (2008) “Rendók: A Youth Secret Language in Sudan” *Estudios de dialectología norteafricana y andalusí* 12: 113–129.

McCarthy, John (1991) “L’infixation réduplicative dans les langages secrets” *Langages* 25 (101): 11–29.

Miller, Catherine (2004) “Un parler ‘argotique’ à Juba, Sud Soudan” in Dominique Caubet et al. (eds.) *Parlers jeunes ici et la-bàs*. Paris: L’Harmattan, pp. 69–90.

仲尾周一郎 (2011)「現代若年層ジュバ・アラビア語についての予備的報告」『地球研言語記述論集』3: 59–83.

――― (2012)「ディアスポラの南部スーダン・アラビア語―オーストラリアにおける現状と言語政策―」『地球研言語記述論集』4: 101–121.

Nakao, Shuichiro (in print) “Prosody of Juba Arabic: Split Prosody, Morphophonology, and Slang” in Mena Lafkioui (ed.) *African Arabic: Approaches to Dialectology*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Raimy, Eric (2000) *The Phonology and Morphology of Reduplication*. Berlin: Mouton de Gruyter.

千田俊太郎 (2010)「麻雀ジャーゴン試論―麻雀ジャーゴン記述と社會方言、集團語の一般論に對する問題提起」『日本語研究センター報告』(大阪樟蔭女子大学) 16: 15–36.

Vaux, Bert (2012) “Language Games” in John Goldsmith, Jason Riggle & Alan C. L. Yu (eds.) *The Handbook of Phonological Theory*. Chichester: Blackwell, pp. 722–750.

Vycichl, Werner (1959) “A Forgotten Secret Language of the ʿAbbādi Sheikhs” *Kush* 7: 222–223.

Walter, Mary A. (2002) “Kalaam, Kalaarbaam: An Arabic Speech Disguise in Hadramaut” *Texas Linguistic Forum* 45: 177–186.

Yu, Alan C. L. (2008) “On Iterative Infixation” in Hannah J. Haynie & Charles B. Chang (eds.) *Proceedings of the 26th West Coast Conference on Formal Linguistics*. Somerville: Cascadilla Proceedings Project, pp. 516–524.

略号一覧

1: 一人称, 2: 二人称, 3: 三人称, ALL: 方向格前置詞, COMP: 補文標識, COP: コピュラ, DEF: 定冠詞, DEM: 指示詞, F: 女性, GER: 動名詞, IMPF: 未完了, LOC: 位格前置詞, M: 男性, PL: 複数, POSS: 所有, SG: 単数, TAM: テンス・アスペクト・モダリティ標識

編集後記

この記述研論集も第５巻を迎えることが出来ました。今号は電子出版となり、不慣れな作業に戸惑った点も多々ありましたが、記述研メンバーの皆様と地球研の方々の御尽力により、無事出版することが出来ました。心より感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございます。

発展途上の研究発表こそ歓迎を受ける「記述研」。私のような「かけだし言語学徒」にとってどれだけありがたい存在か、記述研に携わるたびに感じています。序文にもありましたように、２０１２年度は低調でしたが、ここで終わらせしまっていい研究会ではありません。２０１３年度は、より一層盛り上げていきたいと思いますので、ご鞭撻のほど何卒よろしくお願いいたします。

(2013 年 3 月，伊藤雄馬記)

地球研言語記述論集 5

大西正幸・稲垣和也・伊藤雄馬（編）
言語記述研究会

総合地球環境学研究所プロジェクト
「アジア・太平洋における生物文化多様性の探究」プロジェクト
（プロジェクトリーダー：大西正幸）

2013 年 3 月 29 日発行

発行：総合地球環境学研究所・「アジア・太平洋における生物文化多様性の探究」プロジェクト
京都市北区上賀茂本山 457 番地 4
http://www.chikyu.ac.jp/indus/kijutsuken/
ISBN 978-4-902325-90-4